
天使の仮面舞踏会

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仮面舞踏会

【Nコード】

N0035R

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

三文小説化の主人公「俺」こと、萌木伊津留が出合った奇妙な同居人。

「シェリ・ルー」と名乗ったそいつと暮らし始めてから、俺の周辺が何やら怪しい事に……。

果たして奴の正体は？

振り回される俺の運命は！？

プロローグ

1 プロローグ

誰にでも、一生のうちに忘れられない光景が、一つや二つはあるもんだ。そして俺も、あの日見た光景を一生忘れる事はないだろう。そう。俺の人生を変えた光景を。

＊＊

あの日、俺は書き上げた原稿を出版社に納め、自宅へ向かってバイクを飛ばしていた。一応のところ、小説家なんぞをやっている俺は、帰り際の担当者の言葉を思い出していた。

「じゃあ、萌木^{もえぎ}さん。次回はちびつとホラーっぽくいきましようか。あ、ファンタジーの要素も入れてね」

なあにが“ちびつと”だ、バカたれが。テーマは注文つけるだけだから楽だろうけど、ネタ考えんのは俺なんだぜえ……。ぶつぶつ。夕陽が朱い。その朱が、白い雲に映えている。まるで朱炎が揺れているようだ。

メット越しに視線を上げて、俺は息を飲み込んだ。

「え……。あの形は？」

そこに「天使」が立っていた。夕陽に背を向け、翼を広げて巨大な天使が立っていたのだ。その両腕は下界へ向けて差し伸べられ、顔はやや俯いている。

見事な雲の芸術だ。朱く燃える夕陽をまとい降臨した天使。

「緋色の大天使 か」

ほんの一瞬、俺は雲の天使に気を取られた。ハツとした時には遅すぎた。脇から飛び出してきたダンプの荷台へ向かって、俺のバイクは特攻ぶちかましていたのだ。

脳天まで突き抜ける衝撃と、身体が吹っ飛ぶ感覚と、ああ、ヤベエ。俺の人生、これでアウトか。案外短い人生だったな……。ああ！ バイクのローン　ってな自分の意識。
そして　ブラック・アウト。

気付けばそこは……（前書き）

どうして俺が、シェラと出会ったのか？ その理由……。

気付けばそこは……

気が付くと俺は、温くぬる澱んだ闇の中に漂っていた。ホンワカして
いて、気持ちがいい。

このまま沈み込んで、ドロのように 眠ってしまいたくなる。膝
を抱えて丸くなる。トロトロと意識を溶かして、周囲の闇と同化し
てしまいたい。

“死ぬぞ、お前”

そう。死んでしま……まっ……、まっ、待てえい！ 俺は、ま
だ死にたかぁねーぞ！まだまだ遊びてえし、女の子とだってお付き
合いしてーんだ！ 冗談じゃねーぞお！

バチツと目を開けると、まとわりつく柔らかい闇を掻き分け、全
力で抗う。

“そんな事したって、無駄だよ。お前、深い場まで来すぎたんだ”

また声がした。さっき、俺の意識を目覚めさせてくれた、あの声
だ。声のした方に目をやると、真っ暗な闇の中にポカリと光が浮か
んでいる。その光が、スイーツと近寄ってきた。どうやら光の中
に、誰かがいるようだ。

“よお”

光の中の人物が、片手を挙げて笑いかけてくる。いやに馴れ馴れ
しい。

“随分と元気そうじゃないかよ。死に掛けたにしては”

呆れ気味に苦笑し、腕を組んで俺を見ている人物は、銀の髪に金
の瞳の超美形。男か女か、一見、判断しがたい中性的な顔立ち。

胡坐あぐらをかいて座り、頬杖をついているその態度から、恐らくは男
なんだろうが……見た目で判断は出来ん。何てったって飲み屋で
声かけた「女」が「男」だったっていう、苦しい経験の持ち主だか
んなぁ、俺って奴は……。

“何、ボーッとしてんだよ、オメーはさ。死に掛けてんのに、随分

とまあ余裕だな”

男は（果たして男なのか？）ニヤツと笑う。おお。男の俺がゾクツとする。あ、あぶねー。

“なあ。お前、名前教えてくれよ”

俺が動揺してんのを、表情から見事に読み取ったらしい。ニヤニヤ笑いが深くなる。

伊津留だよ、いづる。萌木伊津留だ。もえぎいづる職業は、鳴かず飛ばずの作家業。血液型はお人好しのO型で、生年月日は昭和 4 6 年 3 月 1 5 日。星座は魚座。干支は亥年。現在、恋人募集中とくらあ。どうよ！”

俺はヤケクソになって自己紹介を披露する。相手はプカプカと浮いたまま問いかけてきた。

“ふうん。伊津留。お前、このまま死んでみる？”

ふっざけんなあ！ やりたい事、やってねえ事が山ほどあんだ！

“ならさ、俺と取り引きしようぜ”

取り引きい？ 本当に、一体何モンなのよ、こいつ？

うろんげ胡乱気に相手を眺めて

何をだよ？

“生き返らせてやるよ、俺が。そのかわり、しばらくの間、お前と一緒に居させてくれればいいんだ”

生き返らせるって、お前、そんな事出来んのかよ？ マジで、

何モンなんだ？

奴はフフンと鼻で笑うと、

“俺はシェリ・ルー。シェラって呼んでくれ。ちよつとばかり事情があって、人間界に降りてきた『アズラエル』だ”

アズラエル、アズラエル。何か、どっかで聞いた事あんだけど、なんだっけかなあ？ でも人間界に降りてきた？ なら、こいつは人間じゃねーのか？ むー！。

“どうする？ 信用するんか？”

信用するも何も、理解不能状態なんだよ、俺はよお。

“まあまあ、そう言っなよ”

本当に、生き返らせてくれるんだろっなあ。ぬか喜びは嫌だかんな。

“任せとけよ。大丈夫だって”

とか何とか言ってよお、実は、死神だった。なあんてんじゃねーだろっなあ？

“疑り深い奴だな、こいつは”

奴の手が軽く俺の肩を押した。

“安心して流れて行けよ。次に気がつく時は、自分の身体の中だ。心配すんな。じゃあな”

闇の中、そこだけ明るい光の中で、シェリ・ルーはヒラヒラと手を振っている。

吸い寄せられるように闇の中を流れ、そして　ブラック・アウ
ト……。

シェリ・ルーというヤツ（前書き）

目が覚めたとき、俺は確かに生きていた。よかったあ。

シェリ・ルーというヤツ

ガヤガヤと周囲がやかましい。

「んー。ぬ？」

意識が徐々に引つ張られ、感覚が戻ってくる。

「うにゅー？」

ゆっくりと目を開く。つわー、眩しい。締め切りがずれ込み、地獄のような徹夜の後、何日か振りに太陽を見た時みたいだ。

眩しさが過ぎると、まず、白い天井が見えてくる。そして窓と、外の景色。

んー。どうやら俺は生き返ったらしい。常識で考えれば噴飯ふんぱんものの話しだが、今の俺にはこれしか言いようがない。ベッドの中で手足をワキヤワキヤ動かしてみる。うむ。大丈夫だ。ちゃんと動く。上半身を起こして思いっきりノビをする。

お、お、生きとる、生きとる。ワハハハハ。

一人でニマニマしていると、突然、声を掛けられた。

「気色悪い奴だな、さっきっから」

声のした方を見ると、椅子に腰掛けて俺の事を呆れ気味に見ている男がいる。

「だっ、誰だよ、お前！」

慌てた俺は、何を思ったのかシーツをしっかりと引き上げ、枕を抱きしめて問いただした。

「はーああ」

男は大げさにため息をついてみせる。

あ、何か、見た事あんど、コイツ。

「お前、死ぬほど鈍い奴だな。つとにさあ。命の恩人の顔くらい覚えとけよ」

そう言って、茶色の長髪をかきあげた。はて、どこで見たんだっ
たかいの？ ええーっと。

「ああ　っ！　お、お前はああ！？」

思わず指差して叫んじまったよ。

ああ、そうだ。こいつの薄茶色の髪を銀にして、色素の薄い瞳を金にしたら、夢ん中の奴だ。夢の　夢？

「五日間も眠ってたんだぜ、お前。あんまり暇だったから、あちこち治しちまうなんてサービス付だ」

確かに手足に傷はなく、動いてみても痛みはまったく感じられない。

「看護師の姉ちゃんが言ってたぞ。気がつき次第検査して、異常がなければ退院してもいいんだとさ」

おお、ラッキー！　昔から病院で嫌いなんだよなあ、俺って。

タイミング良くやってきた白衣のお姉さまに案内されて、検査のフルコース。結果を見ながら不思議だと首をひねり、頭を悩ませている医者共を尻目に、後日、会計金額を持つてくる事を了承してもらって退院。あのまま病院にいたら、生体実験されかねぞ。

街へ出る。おお！　シャバだ、シャバ！　やっぱ外が一番だな！　歩きながら、買ったばかりの煙草に火を点けようとした。

「歩き煙草はまずいでしよう、やっぱり」

横からスツと伸ばされた白い手が、俺の唇から煙草を奪っていった。

「お行儀、悪いよ」

微笑を浮かべて囁く奴に、俺は本能的に頷いてしまった。仕方なく、煙草を箱に戻すと、服のポケットにしまう。

俺の着ていた服は事故のお陰で雑巾以下となり果て、今はシエラの用意してくれた新品のスーツを着ている。

少し余裕のある黒のスーツ。ちなみにシェリ・ルーことシエラは、ダーク・グレーのスーツ。しかし、何でスーツなんだ？　他にも安い服はあっただろうに？

別にスーツが嫌いな訳じゃない。どちらかというと、好きな方だ。しかし、この生地の手触り、この仕立ての良さ……値が張るぞ、こ

れ。まあ、そろえてもらったんだから、あんまし文句も言えんが。

「お前さんが、俺の夢ん中に出てきたシェリ・ルーと同一人物っていうのは、五十歩譲って本当でしょう。けど、何で俺の後をついてくるんだ？」

「伊津留、約束しただろう？」

「約束？」

シェラは俺に人差し指を突きつけると、額にかかる髪をかきあげながら言った。

「ん。お前さんを生き返らせてやったら、いさせてくれるってよ。まさか、忘れたんじゃないよな？」

へへッ。キレーサツパリ、忘れてたよーんだ。しかし、そんな約束したのかあ？

俺は腕を組んで空を見上げて考えた。……約束……。したようーな、してないよーな……。

「あーっ！ 思い出したっ！」

確かにシェラはそんなような事、言ってたよ。しかしねえ、俺は“約束”をした覚えはないぜ。って、ちよつと卑怯？

「はああ。本当に、忘れたんね」

シェラは盛大にため息を吐くと、少し腰をかがめ前髪越しに俺の顔を見る。

うつっ。そういう目付きで見るのはヤメてくれええ。反則だああ。

シェリ・ルーの身長は、一六五センチの俺より十センチばかり高い。その長身と服装から、パツと見た目には“男”に見える。が、薄茶色のサラサラ・ストレートの長髪に、抜けるように白い肌。加えて中性的な顔立ちとくれば……。

うわああっ！ 流し目を送るな！ ヘタな女よりも色っポインだよ、オメーはよっ！

「約束、破る気なのかよ？」

「お、あ、だつて、お前」

何を言っているかわからん。頭ん中がパニックっている。

「生き返らせてもらって、傷まで治してもらって」と

シエラが言い募る。い、いかん。少しは反撃せねば。シエラの色香に迷つとる場合ではないぞ、俺。ガッツだ、俺。ファイトだ、俺。「だってお前よお。『生き返らせてやる』なあって言われて、素直に信用するか、普通？　まず『夢だった』と思っぜ。聞いた奴らはさ」

そうそう。頭っから信用するような、オメデたい奴はいないだろう。……恐らくね。

必死の反撃に出た俺を見て、シエラは深いため息を吐く。
「でも、生きてんじやんよ」

シエラと真砂と顔のいい奴ら（前書き）

シエラといい、真砂といい、何で……。グッスン。

シェラと真砂と顔のいい奴ら

「　　ほあ？」

前髪をバサツとかきあげ、空を見上げてから

「夢だと思つて死ぬならまだしも、伊津留つてば、生きてんじゃん。それって何でだろうなあ？」

眼を細めてニマツと笑うシェリ・ルーの顔が、スツゲー面白いイタズラを思いついた時のガキ大将の顔に見える。

「そ、そんな。大体よお、生き返らせただの、ケガを治しただの、どうやってやったんだよ？　お前がやったっていう何か証拠でもあるのかよ。ええっ？」

俺の先を歩いていたシェリ・ルーが、クルリと振り返り、人差し指を俺の顔の前に突き出してひと言。

「企業秘密です」

目が点になった。何か、足元からスーツと力が抜けた感じだわ。

「わかった。もー、何も言わんでいい」

無性に煙草が吸いたかった。ポケットの中の煙草の箱を手で押さえながら、大きなため息を吐き出した。

「ハアアア　　」

そのまま深呼吸して、腹に力を入れる。

「んじゃ、伊津留のところに行つてもいいのか？　あ、もしかして家族と一緒に？　一人？」

？　ここまで来て、何かシェリ・ルーが慌て始める。んだ？

「アパートに一人暮らしただけど？」

「エ？　あ、いや。家族と一緒にだったりすると、やっぱりマズイかなあ、とか思つてさ」

「別にマズかあねえよ。俺以外に誰かが住んでるわけでもなし」
流れる車の列を見ながら目を眇める。

むー。やっぱり眼鏡がないとキツイかも。

普段の俺は眼鏡がないと日常生活に支障をきたす。細かい作業が好きなのと凝り性が祟って（単に姿勢が悪いとの噂あり）、俺の視力はかなり低下している。まったく見えない訳ではないが、見えにくい事には変わりはないのでイライラする。

「なあなあ、伊津留。本当にいいのか？ すっげー迷惑なら俺、無理言わないぞ」

隣ではシェリ・ルーが、いまだに「ゴチャゴチャ言っている」。

「そんなら聞くけど、俺がお前の事『すっげー迷惑』つつたらどうすんの？ まず今夜の寢床。どうか、行くアテでもある訳？ なあ？」

自分でも意地が悪いと思うよ。さっきまでやり込められていた、その反動なのだ。大人気ない事に。

シェラはグツと言葉に詰まると、ボソツと呟いた。

「別にいくアテなんてないよ」

だろーと思ったよ。ったく。これを聞いてシェラを放り出せる程、俺は無慈悲にはできていない。

「はあふ。来いよ。構わないよ、一人くらい増えたって」

捨てられた仔犬みたいな瞳で俺の事を見ていたシェリ・ルーに、右手の親指を立てて言う。

「ん。頼むわ、伊津留」

そう。余計な事はウダウダ言わない方がいい。

ニパニパと笑顔を振りまくシェリ・ルーを連れて自分ん家の近くまで歩いてきた時、俺は妙な事に気が付いた。眼鏡がないので、多少ボンヤリと霞んで見える街の風景。いつも見慣れているはずの風景の中に、ハッキリと見えるモノが混じっている。

例えば。

行き交う人々の足元をかすめる黒い影。5・6メートル離れた店の前に佇む、若い女性の表情。走ってくる子供にダブって見える奇怪な生物。地面からウネウネと這い出てくるデロデロ等々。

それらは街の風景に溶け込む事なく、俺の視界に暴力的に飛び込

んでくる。目をこすつたり、まばたきたりするくらいでは、それらは消えそうにもない。

「なあ、シエラよ」

多分、俺の声は、みつともない程うわずっていたに違いない。

「なんか俺さ、変なモンが見えてんだけど」

「変なモン？」

お、おおっ！ 今、俺の前を横切った奴！ オメー、何でシッポ生えてんだよお！

一人静かにパニックに陥っている俺を見て奴は言った。

「もしかして、ウネウネとかデロデロ？」

シエラの言葉に俺はただ、コクコクとうなずく。あ、涙目だ。

「ああ、別に大した事じゃあないさ。伊津留の傷を治したりするんで、俺の魂の一部がお前の身体ん中に入って、それが不安定なだけだ」

なんだ、そんな事か。つてな顔だ。

「んじゃ、んじゃさ。その、お前の魂の一部とやらが安定すれば、こつというのは見えなくなんのか？」

すぐり付きたい思いで尋ねる俺に、シエラはニツコリ笑いかけると「安心しろ。シツカリ、ハツキリ、クツキリ見えるようになる」

あう。

「でも俺が側にいる時は、ヤバイのは寄ってこないから。心配すんな」

そのひと言に、俺はシエラの両手を握り締めてまくし立てた。

「来て。頼む。家賃入れろとか言わない。お願いします。一緒に住んでください」

お目目ウルウルの俺の勢いに一瞬息を飲んでから、奴はのたまった。

「もちろん。ところで、伊津留の家って、ここから近い？ まだ結構ある？」

「いや。あとちょっとだけど」

何とか膝に力を入れ、背筋を伸ばす。

「あ、んじゃさ、ちつとばかり寄り道してもいいかな？ 知り合いがこの近くに店を出してんだけど」

クイツと目の前の路地を親指で示す。

「あんまり遠くじゃなきゃ、かまわねえよ」

何？ 知り合い？ いるの、この街に？

シェリ・ルーの後について示された路地へ入り込む。

ん？ こんな所に道なんかあったっけか？ ぬぬー。思い出せん。思い悩む俺を知らぬ氣に（いや、完璧に無視して）、シェラはサクサクと進んでいく。ま、何とかなるでしょう。

説明してもらいたい事は山ほどあった。そしてその質問のほとんど全部に、シェリ・ルーは説明する事はない。する氣がない事も、同時に理解できてしまった。

だが、この男とも女とも知れない美貌の持ち主。出会ってから（目覚めてから）数時間しか経っていない謎の人物「シェリ・ルー」を信用する氣になっている俺。

「ここ。この店」

シェラの声につられて足を止めたその場所は、「仮面舞踏会」マスカレードと飾り文字の看板を出した喫茶店だった。

カロン、カロロン

ドアのカウベルが独特の音色で迎えてくれる。カウンターでグラスを磨いていたマスターらしき若い男が顔を上げ、シェリ・ルーと俺を認めると微笑んで口を開く。

「いらっしやいませ。おや、ここントコ姿が見えないと思ったら、本当に突然ですね」

「ご無沙汰、真砂。まゆい店の方はどうよ？」

カウンター席に腰を降ろした俺達二人の前に水のグラスとおしぼりを置き、肩をすくめて苦笑した。外人臭い仕草が様になっている。「まあ、見ての通り。こんな店だからね」

通りに面している窓ガラスから差し込む陽の光が、店内を柔らか

く染めている。路地ひとつ入っただけで街の喧騒が遠い。まるで別の空間に入り込んだようだ。

「ご注文は？」

真砂と呼ばれた男に声を掛けられて、俺はメニューに目を通した。ヒョイと顔を上げると、カウンターの奥の棚にズラリと並んだ酒のボトルが目に入った。俺のもの言いたげな視線に気付き、真砂はチラツとボトルに目をやり、

「残念でした。こっちは街の景色がセピア色に染まってから」

そう言ってウインクをひとつ。ばっちり決まったそれが嫌味にならない。

「カフェ・オ・レ」

「ストロング」

俺の事を外見で“こういう人物”と思い込んでいる奴は、一緒にコーヒーを飲みに言ったりすると必ず、

「え、萌木さんで、コーヒーに砂糖入るんですか？」

とか言いやがる。悪かったな。俺は元々、基本的に、根本的に甘党なんだよ。

「あ、そうだ。真砂、紹介するよ。今度、俺の家主になった萌木伊津留。作家なんだぜ。そこでこっちが『仮面舞踏会』のマスターで、豪徳寺真砂。でも豪徳寺てな顔じゃないけどな」

確かに古臭く、いかめしい姓にはそぐわない、色白のほっそりした青年だ。

「だから萌木さんも、真砂て呼んで下さいよ。姓の方で呼ばれると、何か自分もゴツクないといけないような気になるから」

俺の前にカフェ・オ・レのカップを置くと、ニコツと笑う。

顔の造作は整っている。肩の辺りまで伸ばした髪を、根元でゆるく結わいている。

「俺の事も伊津留でいいわ。『萌木さん』とか呼ばれると、締め切りの催促にあっているみたいでさ。落ち着かんのだわ」

しかしシェリ・ルーといい、真砂といい、何で顔のいい奴が寄っ

てくんだ？ 腹立つなあゝゝゝ。

ハア。トホホ。だからって、別に俺が不細工って訳じゃないからな。まあまあ、いい男なんだから。十人並みには男前なんだからなっ！

負け犬の遠吠えにしか聞こえないトコロが、また悲しい。

『仮面舞踏会』というところ（前書き）

目の前に現れた不思議な店「仮面舞踏会」。ここって、どこよ？

『仮面舞踏会』というトコロ

俺が側の二人に対して妙な（不毛な）対抗意識を燃やしている時、店内に来客を告げるカウベルの音が響き渡った。

「いらつしやいませ」

真砂のテノールに迎えられて入ってきたのは、どこか疲れた表情の女の子だ。窓際のテーブルに落ち着くと、真砂がオーダーをとりにいく。

「何にいたしましょう？」

「あ、ミルク・ティーを」

「かしこまりました」

テーブルに頬杖をついて、窓の外の景色をボンヤリと眺めている。何分かして、ミルク・ティー特有の柔らかい香りが静かに流れてきた。

「お待たせいたしました」

ピンクに花の散ったカップを女の子の前に差し出す。その声になつと我に返った彼女は、恥ずかしそうに笑んで礼を言った。

「不思議ね。ここでボーっとしてたら、今までの色んな事が浮かんできて。なんだか少し、あつたかくなつたみたい」

「当店にいらつしやる方は、皆様がそうおっしゃいます」

ミルク・ティーをひと口すすって

「おいしい……。今までこんな所にお店があるなんて、知らなかったわ。もう、全部が嫌になっちゃって。心の中が硬くなっちゃった。そしたら、このお店があつたのよ」

彼女の言葉に、真砂はゆっくりと微笑んだ。

「楽しい時、嬉しい時、満たされている時には、この店は見えないんです。でも反対に悲しい時、寂しい時、辛い時には、すぐに見つかるんですよ。冷めてしまった心を温めるために。硬くなってしまう気持ちを柔らかくするために」

「本当ね」

彼女に一礼すると、真砂はカウンターに戻ってきた。

「相変わらず、女には優しいな」

「男にやる優しさは、あいにくと持ち合わせがないんですよ」

シェラの皮肉を軽く受け流した真砂は、おかわり分のカップを俺に出してくれる。しばらくの間、とりとめもない会話が続く。俺達以外、たった一人のお客だった女の子が、ニッコリ笑顔で帰るのを見届けてから、

「そいじゃ、俺達も帰るとしようか」

「そうだな」

シェラの掛け声にヨッコイセと立ち上がり、ゴソゴソと財布を探す。

「あ、一杯目は私のおごりですから。お近づきのしるしに」

「んお、サンキュー」

釣銭を受け取ると、先に店を出たシェリ・ルーを追いかけようとする。

「伊津留　さん」

「ああ？　何？　真砂」

相手が敬称を付けてくれたのを、分かっただけで無視する。

「天使って、いると思いますか？」

ムムム　。何事だ、いきなり？　しかし真砂の目は、「冗談を言っているにしては真面目すぎるようだ。」

「“天使”ねえ　」

ついこの前までなら「いる訳ねえじゃん、そんなモン」と、即答するところだ。が　。分からなくなってしまったんだなあ、これが。死にかけた経験。シェリ・ルーとの出会い。圧倒的な存在感を持って視界に入ってくる不思議な物体　。ひと言で切り捨ててしまふ事も出来ない。

「んー。そうだな。この広い世の中、何がいても不思議じゃねえと思うんだよな。いるかもしれないモノを、絶対いねえんだと言い切

れる程、世の中知らないしな。かと言って、いると大見得切れる程生きてもないしなあ。難しい問題だな」

胸ポケットから煙草を取り出す。

「でもさ、『いる』んじゃねえかと思った方が、生きるの楽しいよな。夢あつてさ」

一本抜き取って火を点けずに啜える。

「伊津留らしい答えなんでしょうね」

真砂はクツと笑いながら手を振った。

「シエラの事、よろしく」

その言葉にこちらも手を挙げて応える。

「また、くんよ」

「いつでもどうぞ」

カロン

カウベルに送られて「仮面舞踏会」を出る。

「なあにを話し込んでたのかな？」

だいぶ短くなった煙草の灰を、店先の灰皿に落とし込みながらシエリ・ルーが尋ねてくる。何気ない素振りを装ってはいるが、実は気になって仕方がないらしい。

「別に。いろいろとナ。シエラは性格が悪いから、気をつけた方がいいとかつてな」

「うっ。伊津留、お前って意地悪いよな」

「ほっといてくれ。生まれつきだ」

次元の低い言い争いをしながら、我が家へと急ぐ。

五日振りの我が家への道を、奇妙な同居人と一緒に。

俺の日常と非日常（前書き）

平穏なはずの日常に、非日常の波紋が広がり始める。

俺の日常と非日常

「る。伊津留ってだよ」

うーにやー。っるせーよお。俺はもつと寝てたいんだあ！眠らせろお！

「んの、ボケ野郎！ 担当さんから、電話だぞっ！ とつと起きろ！」

ビローンと引っ張られた耳に、目覚まし時計の如き怒声が突き刺さった。驚いて飛び起きた俺は、立ち上がるうとして迂闊にも、天井に嫌というほど頭をぶつけてしまった。ちなみに俺の睡眠スペースはロフトである。分かる人にはわかんと思うが、慌てて起きたりすると、死ぬほど痛い目を見ることになる。

なんとか電話に辿りつく

「はい、萌木ですが」

「あ、おはようございます、萌木先生。事故で入院なさってたんですって？ お見舞いにも行かないで、どうもすみません。もう大丈夫なんですか？」

電話の相手は、俺がコラムの連載をもらっている某社の担当殿だ。
“て事で、次の締め切りは来月の二十日ですから。よろしくお願ひしますよお。じゃ、失礼します”

その電話は、担当者の一方的な話を伝え、一方的に切れた。ツーツ、ツーツと呟いている受話器を握り締めたまま、俺は深いため息を吐いた。

受話器を戻しながら、昨日の事を思い出していた。五日振りにアパートへ帰った俺を迎えたのは、五日分の新聞の束と留守電の点滅。伝言は全部で十件。

うち一件は保険屋から。実家からも入っていた。四件は事故の事を聞いた友人達からの見舞いで、飛び交うからかいの中にも気遣いの色があちこちに伺われ、それなりに嬉しい電話だった。

問題は残りの四件。いずれも担当者からだったのだが、人の心配より原稿の心配だ。ある担当なんぞ“死ぬんなら、うちの原稿あげてからにして下さい”などとのたまった。君達は担当者の鑑だよ。

いつか、コロス。

はーあ。俺って愛されてないかも……。

カシカシと頭を掻きながら、もう一度目醒ようかと振り向く。

「伊津留。何するつもりなんさ？」

後ろからシエラの声がかぶさる。

「あん？ 寝んだよ、も一回」

はあーふっ。ちくしょー。本当は今日から遅れちまった五日分の仕事を片付けるつもりだったんだ。あくまでも、つ・も・り。さっきの電話ですっかり、やる気を失くしちゃったよ。

「だめだめ。せつかく起きたんだから早く顔洗って。今日から仕事すんだろ？ ホレホレ、行った行っただけ」

強制的に洗面所へと追いやられた俺は、不本意ながらシャゴシヤゴと歯を磨き始める。

うーむ。シエラの奴め。この調子でいくと、今までどの担当者も成し得なかった“萌木の原稿を締め切り前に”という快挙を成し遂げるかも……。

別に俺だって、ワザと遅れてるわけじゃないんだけどよっ！ 計画倒れの男と呼んでくれ。

目の粗いタオルで顔を拭いていると、トーストのいい匂いが漂ってくる。

駅から歩きで二十分弱の場所にあるこのアパートを、俺は結構気に入っている。比較的駅に近いので、家賃もそれなりに高めだが、環境はなかなか良い。バス・トイレが別というのも嬉しい。特にこんな状況でトイレが目の前にあって、トーストの匂いがしてきても、まず食欲をそそらないと思う。部屋選びでは、大きなポイントだな。リビング兼仕事部屋へ戻ってみると、シェリ・ルーがまめめしく朝食の支度をしている。モノトーンが好きな俺が揃えた市松模様

のテーブルの上には、朝食の盛られた食器が並べられている。

しかし、こいつって何者だ？ トーストにコーヒーは朝食の基本形である（俺の場合、それしか摂取しないという話もある）。基本形ではあるが、食卓に彩りがないというのも、また事実である。

ならばオプシオンを揃えればいいだけなのだが、元来怠け者で朝に弱い俺には、無理な相談なのだ。目の前に並べられたベーコン・エッグや野菜サラダの盛られたボウルを見ながら、俺はしばしの間、感慨に耽ってしまった。朝食とは、かくあるべきだよな。

「伊津留？」

トーストにバターを塗っていたシェラが、不思議そうな顔をして見上げる。

「んあ、ああ。いやあ、まともな朝メシ見るの、久しぶりだなあと
思つてよ」

積み重ねたクッションに座り込み、奴が手渡してくれたマグカップを受け取る。さっきまでのイライラはどこへやら。俺は上機嫌で、日課である新聞に目を通しながら朝メシを堪能していた。溜まっていた五日分の新聞を端から順にチェックしていく。小説のネタは、どこに転がっているか分からない。

ネタネタ、どーこだ。

最初は小さな記事だった。公園をねぐらにしていたホームレスの老人が野良犬に噛み殺されたという記事で、何が俺の意識に引っかったのか自分でも分からない。

その二日後の新聞には、終電で帰ってきた酔っ払いの会社員が帰宅途中で、野良犬らしき大型の獣に襲われている。この被害者は首筋に喰いつかれて、意識不明の重体だ。翌日、翌々日と何もなく、今日の新聞をめくってみる。胸の中がモヤモヤする。それがどうしてなのか、自分でも良く分からない。あえていうなら、焦りに似て

いるかもしれない。内容に視線を走らせていく。

あつた！

午前二時頃、一人暮らしの老婦人が自宅の中で襲われている。やはり、野良犬らしき大型獣だ。すごい惨状だったらしい。しかも、重体だった三日前の被害者は、意識不明のまま亡くなったと書いている。

五日間に三人。決して少ない数ではない。

「むーん。夜間のパトロールを強化しても、外出を控えても、無意味な気がするのなんですかあ？」

俺の独り言にシエラが反応する。

「ん？ 何だつて？」

「あ？ ああ、悪い。独り言だ」

ゴソゴソと新聞をたたむと、仕事机の側に積んでおく。

「これから仕事すんだろ？」

テーブルの上の食器を片付けながら、シエラが尋ねる。

「おお。済ましちまわねーと、担当が泣くからな」

パジャマ代わりのトレーナーを脱ぐと、椅子に引っ掛けておいたシャツに腕を通す。カチャカチャと音をさせながら、キッチンからシエリ・ルーの声が響いてくる。

「じゃ、俺、ちょっと出掛けてくるわ。昼は用意しとくから。あ、夜メシは何食いたいかな？」

着替え終わってから煙草をくわえる。

「エビフリア。何だ、出掛けんのか？」

片付け終了したシエラが、俺の仕事用コーヒーセットを運んでくる。良く分かったな。仕事上の俺は際限なくコーヒーを消費する。そのため、手の届く所にコーヒーセットを置いておかないと落ち着かない。コーヒーと煙草がないと、俺のお仕事用ゼンマイが切れちまう。

「ん。お仕事さ」

「へえ、お前、仕事なんざしてたの？」

俺の煙草から一本抜き取り

「してたんさ。夕方には帰ってくるから、大人しくお仕事してんだぜ」

いちいちム力つく奴だな、コイツ。俺は分かったという合図に片手を挙げ、仕事机に向かってから気が付いた。

「おい、ちよつと待て！ お前がいなくて、俺はどうすりゃいいんだ？」

「何が？」

何がじゃねーよ、このオマヌケ野郎！

「俺に見えるあのデロデロやら、グログロやら、その他モロモロの事だよっ！」

「ああ」

そんな事かと呟いて

「だから、大人しく仕事してろって言っただろ？」

ケロリンパと言うんじゃないね　　っっ！

「バカ。資料揃えたりすんのに、出掛けたりしなきゃなんねーんだよ」

ムキになっている俺を見て、シェリ・ルーはクククツと肩を震わせて笑う。

「大丈夫だよ。もう“力”も安定してるし、ちよつとやさつとじゃ、お前にはとり憑けないよ」

「本当だなあ？」

疑り深いんだぞ、俺ってば。

「ああ。本当本当」

そう言われると、本当に大丈夫なような気になっちまうんだから、俺も人がいい。

シェラはキッチンに消え、何やら音がする。昼メシと夜メシの心配をしなくて済む俺は、自分用のコーヒーを淹れて机に向かう。散らかった原稿用紙の中から書きかけのページを探し出すと、眼鏡をかけてペンを執る。

「ええと、こいつの締め切りが今月末だろ。その後、来月の二十日があつて　あ、ちよつと待てよお」

原稿を揃えながら、卓上カレンダーをチェックする。

うー。こりゃ、ちよつちヤバイな。

ペンのお尻で頭をカシカシと搔くと、ラジオのパワーをONにして、仕事を開始する。

仕事を始めるまでに時間がかかるが、準備が完了すれば、邪魔されるのが何より嫌だ。そんな気配を察してか、シェラも必要以上に音を立てない。いつの間に出掛けたものやら、気が付けばドアにメモが張つてある。

出掛けるよ。昼メシは鍋の味噌汁と、冷蔵庫の中のおかずを温めて。漬物も入ってるから。メシは炊いてあるよ。夕方には戻るから、大人しく、いい子にしてろよ　P・S・何か急用の時は、真砂のところに電話してくれ　番号が続く。

まるで長いコト一緒に過ごしてきたかのように、俺の生活パターンに溶け込んでいる。要らぬ気を使う必要はなく、自分の生活を壊す心配もない。ごく自然に、さりげなく、シェリ・ルーが俺の世界に入ってくる。同居人としては最適である。

一時間くらい集中して原稿用紙のマス目を文字で埋めた後、新しいコピーを淹れ直し、ラジオをCDにチェンジしようとする。

CDラックから数枚ディスクを抜き取り、適当な一枚をデッキにセットしようと近寄る。スイッチを押そうとした瞬間、番組がニュースに変わった。女性パーソナリティが、それまでの事件を報告していく。

『した　。本日未明、　市××町の　さん宅に侵入し、一人暮らしの　さんを殺害した大型の獣は、ほかの二件と同一の種類である可能性が大きいという、動物園関係者からのコメントが発表されました。警察からの発表によりますと、現場に残されていた獣毛や歯形から類似点が指摘され　』

俺はCDをセットすると、スイッチを切り替えた。ズンズンと響

いてくる重低音のリズムに浸りながら、今聞いたばかりのニュースの事を考えていた。

三件とも同一の動物　おそらく大型肉食獣の類だろう　で
ある可能性が高い、か。高いなんてもんじゃねえ。まず間違いなく
同じ奴だ。目撃者がいないので、詳細は分からない。そう、目撃者
が一人もいないのだ。公園、帰宅途中の道、住宅地……。

他の人がいない時間、いない場所を選ぶほど知能が高いのか。それとも単なる偶然なのか？　何か目的があるのか。ただ、人間の血肉の味を覚えただけなのか？

謎だらけだ。そして一番の疑問は、この事件が気になって仕方がない、この俺自身。

何でだ？　分からん。

ぬるくなつたコーヒーを一気に飲み干すと、俺は机の上の原稿用紙に注意を戻した。当面の問題は、この紙の束だ。

ハード・ロックの波に包まれながら、ひたすら白紙を消費する事に意識を集中する。

悪夢の到来（前書き）

悪夢は知らないうちに忍び寄る。そう、誰の側にも……。

悪夢の到来

「ねえ、知ってる？ この間から続いてる事件の事」

助手席の女が尋ねる。

「事件？ ああ、野良犬が人間を襲ってるっていう奴？ 犬のくせに人様襲うなんてな」

右手の煙草を口元へ持つていきながら、運転席の男が答えた。

「そうそう。ニュースで、夜間の外出は控えるようにって言ってたよね」

そういつてから女は、腕時計に視線を走らせる。時刻はすでに十一時半を回っている。久しぶりのデートで浮かっていた二人は、映画のレイトショーの帰りであった。事件も警告も知っていたが、普段から会社の残業などで帰りが遅くなる事に慣れていたために、あまり氣にしていなかったのだ。何より「自分達に限って」という気持ちもあった。

だが、一度時刻を気にし始めると、途端に不安にかられてしまうのだ。まるで、人間の時間の流れの外にある、人間外の時間帯に足を踏み入れてしまったように。

そんな恋人の怯えに氣が付いたのか、運転していた男が口を開く。「平気だって。そんなに不安がるなよ。イザって時には、俺が守ってやるから」

「本当ね。絶対よ」

「ああ、ホントホント」

大通りを抜けて、静かな住宅地へと車を乗り入れる。

「さ、ホラ。もうすぐ家に着くから安心しろよ」

しかし次の角を曲がった瞬間、男はブレーキを思いつきり踏み込んでいた。タイヤの滑る甲高い音が、夜の闇に響き渡る。

「うわっ　！」

「キャアッ　！」

ガクンツというショックと共に、車体が止まる。

「何？ 一体、何なのよ？」

両手で胸を押さえながら、女が男に詰め寄った。

「あ、ああ。ここ曲がったら、目の前に大きな犬がいたんだよ。そんで、慌ててブレーキ踏んだんだけど……」

「轢いちゃった、の？」

「いや、でも。わかんねえよ」

男の手がノロノロとシートベルトを外す。

「ちよつと後ろ回って見てくるわ。やっぱ、轢いてたりすつとマズイしな。ちよつと待っててくれよ」

車内に女を残してドアを開けると、男は後方へ回って確認しに行く。

ハイ・ビームに照らされて、シンと静まり返った家並みが、白々と浮かび上がっている。ただ自分の鼓動と息遣いだけが、閉ざされた狭い空間に響いている。

「お、遅いな智司^{さとし}。何してんだろ……」

小声で呟いたつもりだったが、想像以上に大きく聞こえる。車の後ろに回ったきり、相手の戻って来る気配はない。

不安を紛らわそうと、カーラジオのボリュームを上げようとして、女はふと疑問を抱いた。

静かだ。静か過ぎる。行き交う人影もない。先ほどのブレーキに対しても、何の反応もないのだ。交通量の多い町中での道ではない。それこそ文字通り、他人の家の玄関先なのだ。まだ家々の窓には明かりが灯っている。何らかのリアクションがあつて、然るべきだ。

「やあよお。智司、早く戻ってきてよお」

両手で己の肩を抱くと、震えているのが良く分かる。

ピシヤ

まるで雨がフロントガラスを叩くかのような音に、女は飛び上がって反応した。

ガラスの上部に数ヶ所、水滴が落ちている。雨にしては、変な降り方だ。ガラスを伝いながら、水滴が流れてくる。

ゆるやかに、ネットりと。

それが雨であるうはずない。なぜなら、雨には「色」がないからである。ましてや赤い雨など存在するはずがない。

ドンッ！

ボンネットの上に、丸いボールのような物体が落ちてきた。ボールは周囲に闇色の飛沫しぶきを撒き散らし、ボンネットの上を飛び跳ねた。

「ひっ　　！！」

ゴロリと転がったボール。生首の見開かれた瞳と女の視線がモロに合った。悲鳴をあげようとする声帯と、深く息を吸い込もうとする気管の別々の動きによって、自分の声とは思えない、かすれた声が喉に引むしつ掛かっている。

半分引きむしるようにしてシートベルトを外し、車外へと転がり出る。

「あ、ああああ、さ　さとさとと　さささ、さといいいい
ヒイイ　　！！」

精神に異常をきたしたかのように、意味を成さない言葉をわめきながら、少しでも車から　男の生首から　遠ざかるうとする。腰が抜けているために、全力で進んでいるにもかかわらず、ちつとも前に進まない。

不意に背後で唸うなり声が沸き上がる。それは新鮮な獲物を見つけた肉食獣の歡喜の唸り。

「ヒイヒアアアあああ　　！！」

顔中を涙と脂汗よだれと涎で汚しながら、爪が剥がれるのも構わず、四つん這いになって必死で逃げる。

嫌っ！　イヤアアッ！　来ないでえ、嫌よお！　助けて助けて誰かあああっ！！

叫び声を上げようとした女の背中に、ズンッ、と獣の体重がかかる。耳元に、生臭い息が触れる。体中の毛が逆立った。

「いやああああ　　っ!」

最後に女の口から出た意味のある言葉も、唐突に終わりを告げた。

『神』についての考察（前書き）

「神」とは何ぞや？ 俺の疑問に誰も答えてはくれなかったんだ。

『神』についての考察

「どうもー。ありがとうございましたあ！」

締め切り二日遅れの原稿を抱え、ホッとした表所で帰っていく担当者を見送った後、徹夜明けの頭をカシカシと掻きながら、クツシヨンに腰を降ろす。

「伊津留、お疲れさん」

シェリ・ルーがねぎらいの言葉をかけながら、半分使い物にならない俺の前に昼食を並べていく。

正体不明の俺の同居人、シェリ・ルー。以前はどこで何をしていたのか知らんけど、作る料理は激ウマ！ いつの間にか、我が家のおさんどん《……》と化している。

しかし、テーブルに並んだ皿の数にも関わらず、俺の仏頂面が直らないのに気がつくと、

「いゝづゝるゝ。消化に悪いから、メシ時に新聞読むのやめとけよ。それでなくても、この二日間まともに食事してないんだから」

「んー。ゴメンなさい」

新聞を床の上に放り出すと、クッションにもたれながら卵焼きをひと切れ頬張る。ホコホコと湯気を立てている味噌汁をすすりながら、テレビのスイッチを入れてみる。

どうにも気になって、落ち着いてメシも食べねえ。

シェラが何か言いたそうに口を開くが、俺に無視されて諦める。

『謎の大型獣について、動物園などから逃げ出したオオカミやライオンなどではないかという声も挙がっていますが、これまでにいずれの動物園からもそのような届けは出されておりません。警察からは夜間パトロールと大型獣の搜索をより一層強化する方針ですが、市民の方々も、夜間の外出は極力控えて欲しいというコメントが発表されました』

画面の中で綺麗に着飾ってすまし顔の女子アナが、淡々とニュー

スを読み上げる。

「まったくよお。「私には関係ないわ」ってな顔しやがって。うー。ムカムカ……。腹が立つからチャンネル替えてやる。」

くわえ箸でリモコンを操作する俺を見て

「おーい、伊津留。お行儀、おぎょーぎ」

「……こいつ、変なトコにうつさいんだよなあ。妙にババ臭かったりするのだ。」

「ヘイヘイ」

箸を置こうとした瞬間、CMを流していたチャンネルから、パツと画面が替わった。

『これが送られてきた映像です』

嫌味なくらいカッチリと髪を分けた男性アナウンサーが、カメラに向かってそう言うと同時に、VTRに切り替わる。

「う、わ……」

「ひで……」

俺とシエラ、同時に呟いてしまった。

画面上に映し出されたのは、以前から不穏な噂の絶えなかった某国の映像だ。あちこちで鳴り渡る爆音。破壊し尽くされた街並み。瓦礫の下から運び出される怪我人と、それを見つめる生気のない瞳

をした人々。罪もなく傷付けられていく子供達の横で、誇らしげに機関銃を抱える少年兵。

実家にいる俺の弟とたいして変わらないくらいだ。そう考えたら、見てんのが堪らなく辛くなってきた。

プツ　ツン

テレビをOFFにすると、漬物を口に放り込んで必要以上に大きな音を立てて噛み締めた。

「なあ、シエリ・ルー。お前、考えた事ねえか？」

「何を？」

熱めのお茶を入れながら、シエリ・ルーが応える。俺は食べ終えた食器を重ねて下げると、湯呑みを受け取りながら続ける。

「俺はずーっと考えてたんだ。もしも『人間』を造ったのが、聖書にある通り“神”なんだとしたら。そしてその神が、本当に全知全能なんだとしたら。どうして“神”は人間に『争い』なんてモノを与えたのかってな。そもそも戦争の大半は、宗教が原因じゃねえか」
シエラは湯呑みを両手でくるんで、何事か考え込んでいる。俺はひと口お茶をすすると、

「第一さ、人間ってのは“神”の似姿なんだろう？ だったらさ、“神”の分身ともいえる人間にだぜ？ 何で『争い』とか『憎しみ』なんて心があんだよ。わかんねーんだよなあ」

疑問符の連発である。この疑問は俺にとって何度も繰り返され、そして解答を得られぬまま、今日を迎えている。

そう。誰にも解答を出す事など出来ない問いなのかも知れない。

でも、もしかしたら。こいつなら、シエラなら解答を見つけてくれるかも知れない。そんな想いがあつた。

例え見つけられなくても、俺の考えを理解してくれるはずだという、何の根拠もない確信めいたものがあつた。

だいぶぬるくなつたお茶を口元に運びながら、逆にシエラが俺に問いかけてくる。

「なあ、伊津留。“天国”ってのはさ、限られた選ばれた奴にしか行けない場所だと思うか？」

信じる者は救われる。それは俺の一番嫌いな考え方、思想だ。

信じよ、さらば救われん。裏をかえせば、信じる者しか救われない。極端な発想かもしれないが、俺にはセコく感じられて仕方がない。

お前は私を信じない。だから私はお前を救わない。俺の事を信じてる奴だけついて来い。それ以外の奴等は、勝手に死にやがれ。やれやれって感じだぜ。結構、自分勝手な言い草に聞こえる。本当は違う解釈があるのかもしれない。でも、俺が今まで出会ったキリスト教関係者の皆さんは、納得できる解釈を提示してくれなかった。

本当は彼らも分かっているのかも知れない。

「俺は別に無神論者って訳じゃねーし、宗教嫌いって訳でもねえ。アンチ・キリスト派を気取っているつもりもないしな。一応これでも、実家の関係で仏教徒だったりするし。けど、選ばれた者にしかってーのが、どうしても納得いかなえ。要するに、最終的には“神”の好みの問題になっちまうようだな。“天国の門”をくぐる人間を一人でも拒絶した時点で、それは“神”を名乗る資格を失うと、俺は思う。まあ、あくまでも俺個人の意見だから、クリスチャンの人間が聞いたら激怒するかもしれんけどな」

言いたい事は言った。胡坐を組んだ膝に頬杖をつき、シェリ・ルに眼をやる。すっかり冷めてしまったお茶を飲み干すと、シェラは湯呑みを掌に打ち付け、ニヤツと笑う。

「うん。俺もまったく同感だ」

おい……。それだけかよ？なんか、肩透かしくらったみたいだな。しかし、それ以上シェラは何も言う気はないらしい。ちえっ。がっかりだ。

テーブルの上の食器を片付け、キッチンから聞こえてくる水音を聞いていたら、ドバツと眠気が押し寄せてきた。大アクビをしながら、キッチンに向かって声を掛ける。

「ヒエア〜。あふっ。お前、今日も出掛けんのか？」

「いんや。今日は出掛けなくて、うちにいるよ」

水の音にかき消されないように、少しばかり張り上げたシェリ・ルの返事が響く。

「それじゃあよ。俺、ちっと寝るわ。今日は外でメシ食って、真砂んトコ行こうぜ」

水音が止み、キッチンからシェラが顔を出した。

「ああ、OK。伊津留が寝てる間に、洗濯物終わらせとくわ。しかし、今メシ食い終わったのに、もう次のメシの話か？」

皆さんもお気付きの事と思うが、我が家の家事というものは、今や全てシェラを中心に回っている。決して決して、俺が強制してい

る訳ではないのだ。ぜえーんぜん押し付けたりしている訳じゃないんだ（何で俺、言い訳してんだろ？ しかも必死に）。これはあくまでも、奴が自主的にやってくれている事なのだ。ま、俺がやるよりも数段手際がいいので、任せっぱなしになってんのも、また事実である。

ノタクタとロフトに上がると、布団の中に潜り込む。ゴソゴソ。この布団だってシエラがこまめに干してくれているから、いつもフツカフカだ。まったく。あいつが来てからの方が、信じられないくらい経済的なのだ。すでに俺ん家は、シエリ・ルーなしではやっていけなくなっている。ああ。トホホ。

洗濯機のコウンゴウンいう音を聞いているうちに、大挙してやってきた睡魔の波に呑み込まれてしまう。

おーい、シエラあ。色物の洗濯、別々にしてなあ……。

シェラの本音と俺のリビドー（前書き）

垣間見たシェリ・ルーの本音。そして理解してしまった、自分の本音。

参ったな。俺ってばマジで？

シェラの本音と俺のリビドー

「あ、そーだ。ちよつくら本屋に寄りたんだけど、いいか？」

あの後、五時間程眠った俺は、必要以上に元気を取り戻していた。
「うを？ ああ、構わんよ」

木曜日の午後八時。街がこれから活気付き、美しく化粧を施す時間。いつもなら通りにはまだ人が溢れ、行き交う車のテール・ランプが赤い列をなしているはずなのに。妙に閑散としている街中を、俺達二人は歩いて行く。

やっぱり「謎の猛獣」事件の影響が大きいのだ。すれ違う人々は、一様に不安の表情を浮かべ、少しでも周囲に人がいる間に家に、目的地に辿り着こうとしている。塾帰りの小・中学生も、遊びに繰り出す高校生、コンパに目のない大学生。いや、学生だけじゃない。人目をはばからず、自分達の世界に没入するための場所へと急ぐカップルも、仕事の憂さを晴らしに赤ちょうちんの暖簾をくぐるサラリーマンも、めっきり数が減っている。深夜十一時まで営業している近所の本屋も、ここントコ早仕舞いだ。まあ、営業してても客が来ないことにはねえ。仕方ないよな……。

「エート。参考書、自然科学、経済、歴史、資格に興味つと。あ、これだろー。それから」

小説の資料である地図と、自分用の文庫本を二冊。

おや？ シェラはどこじゃ？ 店内をぐるうりと見回す。あ、あった。……をい。料理本の棚の前かよ……。

おそらく本人は気がついていないだろう。一心に本を眺めている自分が、店内の注目を集めている。なあんてこたあね。ま、いいや別に。ん？

視線を感じる。連れと違って、特に目立つ事はないはずだ。何だろっ？ 気のせいかしらん？

努めてさりげなく店内を見回す。

視線の主もシエラに劣らず、派手派手な奴でやんの。肩にかかる金髪を斜めにカット（クレオパトラカットって奴？）し、緑色の瞳でジツと俺を睨み付けている。うう。視線が痛い。ちょうど俺の鎖骨の辺りに、相手の視線がビシビシと刺さる。人の視線に何らかの物理的な力があるとすれば、間違いなく俺の体には穴が開いている。それ程、あからさまに“悪意”ってモンを人に遠慮なくぶつけてくればやる。

側の宗教書の棚の前に立つと、適当な一冊を抜き出して広げながら、体の位置を変えてみる。相手に対して、俺の横顔が見えるようにして立つ。そして大きく息を吸い込むと、ツイッと相手の方へ顔を向ける。デッハデーハーな金髪の兄ちゃんは、俺と目が合うと弾かれたように視線を外し、そのまま店から出て行ってしまった。何だったんだよ、マジでえ……。ホーツと息を吐き、手に取った本に視線を落とす。『天使と悪魔の系譜』 「アズラエル」 そうだ。シェリ・ルーは俺と初めて会った夢人中（なのか？）で、確かにそう言った。その言葉の意味は「死の天使」だったはず。

どっ
えええええ
！

「お、おお。会計してくんよ」

「さてと、メシにしようかね」

45

の視線が一点に集中した。すなわち、シェリ・ルーこと我が相棒殿に。レジカウターの奥ではウエイトレスのお姉様方が、熾烈な「オーダーを取りに行くのは私よ」合戦を繰り広げている。こりゃあ、しまったぜなあ。今度から外食ん時は、気いつけんと……。テールについて煙草を出していると、やっとの事でその資格を獲得したのであるう、目をハートにしたウエイトレスがサービス過剰な笑顔でやってくる。連れの俺の方なんぞ、完全無視だもんねえ。まあ、しょうがねえよなあ。その気持ちはよく分かる。……けど、エプロン破れてっぞ。

名残惜し気に彼女がテーブルを去ると、煙草をくわえて苦笑して見せる。

「お前みたいに顔のイイ奴は、女に不自由しねえな。羨ましいこつて」

上着のポケットから煙草を取り出していたシェラは、皮肉っぽく眼を光らせて答える。

「羨む事なんかないさ。上辺に魅かれてやってくる、中身の見えないう連中が多すぎるだけだよ」

「そんな、誘蛾灯に集まる蛾みたいに。そこまで言っちゃったら、身も蓋もないだろうによ」

「似たようなモンさ。顔と中身が比例するなんて誰が決めたんだ？ 顔がキレイだから、中身までもキレイとは限らない。天使の顔した悪魔がいたって、ちっとも不思議じゃない。でも、それを見ない奴が多すぎる。それだけの事さ」

煙をフツと吐き出し、俺の方へ視線を流す。

「俺もそうかも知れないぜ。どうする？」

ゴクリと喉が鳴る。正直言って、シェラの話の半分も耳に入っていない。背筋にゾクゾクくる。

体中に鳥肌が立つほど、凄絶な色気が漂う。性別を超越した、純粹な“美”がここにある。知らず知らず呼吸が速くなる。

「かまわねえよ。お前が何者だったって、俺は一緒にいる事を

選んだんだから」

上の空状態だ。自分が何を言っているのかさえ、よく分かっていない。ただ、今ここで、自分を信じている事の証を、一緒に在る事の証を示せとシェラに言われたら、俺は迷わず自分の喉首を掻っ切っていただろう。己の命を証とするために。それほどまでに、この時の俺はシェラの全部に魅かれていた。

短くなった煙草を灰皿でもみ消すと、前髪をかき上げ、シェラはポツリと呟く。

「……俺は、この顔が嫌いだ」

話題が日常的なモノに移ると同時に、俺を縛り付けていた鎖が切れたように、思考回路が正常に戻る。

「そおかあ？」

努めて、バカ明るい声を出す。氷の溶けてしまった水に口をつけて、知らないうちに渴いていた喉を潤す。

「俺は好きだぞ、お前の顔。いいじゃねえか。第一、みつともねえぐらいブ男で、自分の顔が嫌いだってんなら分かるけど、お前みたいに顔が整ってる奴が言くと、俺を含めて十人並みの連中は自殺するしかないぞ」

新しい煙草に火を点ける。

「この顔、伊津留は気に入ってるのか？」

覗き込むように俺に向けられた瞳には、先程の剣呑な光はない。

「おお。好きだぜ」

念のために言っておこう。俺はゲイでもなければ、バイでもない。女の子大好きな、三十歳の健全な男なのよ。夢だって希望だってある。結婚願望だってあるんだ。なのに。

ある意味、俺は完全にシェラに惚れていた。例えこいつが妖怪だったとしても、天使でも悪魔でも　そう、死神だったとしても構うものか。シェラが何者だったとしても、俺はシェラと一緒に在る事を選んだんだから。

「お待たせいたしました」

タイミングよくウエイトレスが料理を持ってやってくる。くうー。
腹が悲鳴をあげとる。

「さあて。不毛な会話はやめて、人間の基本的欲望を満たすとしま
しょうか」

「だな。消化に悪い話は止めよう」

ニヤリと笑うと、互いの皿に取り組む。うー。しかし。

「こういう店に来て、こういう事を言うのもアレだけどさあ」

フォークの肉を口へ運びながら、声を潜めて言う。

「やっぱ、シエラの方が美味いわ」

闖入者もしくは敵対者（前書き）

招かれざる闖入者、もしくは敵対者。何モンだよ、お前。
腹立つなあゝ！

闖入者もしくは敵対者

相変わらず、相棒に注がれる店内の視線は熱い。が、ソレを無視するコツも掴めた。

ところがっ！　ところがなのだっ！

「！」

不意に緊張した俺を見て、シエラが不思議そうに眉を引き上げる。

「何？　どうかした？」

「あ、いや、何でもない。うん。気のせいだった」

なるべく軽薄そうな返事をするが、神経はある方向に集中している。皿の中身はあらかた片付いている。食後のコーヒーをすすりながら、煙草の箱を引き寄せた。

ん？　やけに軽い。によるろ　ナイス。空だぜ。

「つと、煙草買ってくるわ」

あることが気になっている俺は、レジカウンター奥の自販機スペースへ急ぐ。小銭をスリットに落とし、銘柄のボタンをプッシュする。煙草を取り出し口から取るうと身をかめながら、全神経は背後に集中している。

「何か言いたい事があんなら、サッサとしゃべって、どっかに行っちゃまってくれよ」

振り向きながら、かなり不機嫌な声になるのを抑えられない。抑えるつもりもない。それもそのはず。俺の後ろで腕を組んで立っているには、先程の本屋で思いっきりガン飛ばしてくれた、あの派手兄ちゃんだ。人がメシ食ってるのに、視界に入りにくい隅のテーブルで、またまた俺達にガンくれてんだわ。

あーったく。尋ねてんのは俺なのに、どうしてだか相手の方が態度がデカイ。なまじ顔がいいだけに、むしように腹が立つ。

「何だよ。用がねえんなら行くからな」

イライラと口を開いたとき、相手がようやく声を発した。

「あそこにいるのは、お前の連れか？」

すっげーエラソーに言う。んだ、しゃべれんじゃん。日本語わかんねえのかと思って、一瞬心配してソンしたぞ。

「俺の連れだよ。それがどうした？」

そもそも連れでなければ、一緒のテーブルにいるはずがないだろう。俺、相席嫌いだし。金髪兄ちゃんは緑色の目を細め、ジロジロと俺の事を見ている。否、これは「見る」なんてモンじゃないわ。「ねめつける」と言った方がより正確だ。無遠慮に視線が突き刺さる。

「ふん。何を好き好んで、このような下賤な輩とげせん やから」

思いつ切り人を見下した言葉に、俺の頭は瞬間湯沸かし器になる（簡単に言えば、ブッチギレそうになったという事よ）。怒りの余り声も出ない俺を鼻先で嘲笑すると、またまたエラソーにそっくり返り、高飛車に言い放った。

「いいか、良く聞け。やつは災厄を振り撒く者だ。側にいる者全てに、不幸が舞い降りるだろう。今のうちに縁を切ることだな。まあ、貴様の生命など、どうなったところで気にもならんがな」

超ムカつく野郎だなあ。

ブツツンしそうになる自分を抑え、深呼吸する。ここで相手が思っている通りの行動なんて、意地でもとってやるもんか。

「おい」

言うだけ言った金髪兄ちゃんは、俺に背を向けて歩き出そうとしている。その足を止めさせたくて、言ってみる。

「ご忠告、ありがとよ。けどな、どこの馬の骨が分かりもしない他人に『あなたは不幸になりますから、相棒と別れた方がいいですよ』とか言われて、『はい、そうします。ありがとうございました』なんて奴は、いないんじゃないのかねえ？」

手の中の煙草の箱をポンと弾ませる。

「災厄？ 不幸？ 結構なこっちゃねえか。平々凡々な生活は、こっちからお断りだ。そんなんであいつと一緒にいられんならよ」

「愚かな。すでに魅入られていたか」

片頬を歪めて憎憎しげに嘲笑うのを見ながら、こちらも不敵に笑ってやる。

「そつからよ。あんたがいくらギャンギャン吠えても、せいぜい、女を取られた男が嫌がらせしてるようにしか見えないぜ。無愛想な金髪兄ちゃんよ。シエラの方がよっぽど、いい男だね」

左手の中指を立てて、舌を出してやる。うーん、我ながら低次元な……。良い子の皆は、真似しないようにね。

しかし、その低次元さゆえに相手のプライドに効いたらしい。不遜な光を浮かべていた瞳が、馬鹿にされたとわかった途端、怒りにギラツと燃えた。体ごと俺の方へ向き直ると、右手の人差し指を突きつけ、

「口を慎め、異端者が！　そこまで言うのなら、覚悟は出来ておるのだろ。その身に父なる神の怒りを受けるが良い！」

そう吐き捨てると、くるりと踵かかとを返し、自販機スペースを出て行った。何だよ「父なる神の怒り」って。ディーブなカルト関係者か？

はあ~~~~ふう~~~~。その場で数回、深呼吸を繰り返す。待たせているシエラに、時間のかかった訳を何と言いつくすか？

テーブルに戻るまでに、さりげなく店内をチェックする。思った通り、いけすかねえ兄ちゃんの姿はない。ケツ！

「よっ。お待たせしたね」

テーブルに頬杖をついて窓の外を眺めていたシエラが、チラツと視線を俺に戻す。

「随分、時間がかかったな」

「そ、そうなんだよ。自販機の前まで行ったら小銭が無くて、札を使おうと思ったら、デカイのしかなくてな。レジで両替してもらったらよ、お前の事をしつこく聞かれてな」

焦りまくりながらも、必死で言い訳する。何だか、浮気がばれそうな亭主みたいじゃねーか、これじゃ……。自分でもかなり情けなく感じている俺を見て笑ながら

「いいよ。分かったから、そろそろ行こうか。真砂んトコに寄るんだろ？」

上着を手に取ると立ち上がる。それだけで、周囲からホウと、熱いため息が漏れる。マジかよ……。

伝票を掴んでレジへ向かいながら、ついてくるシェリ・ルーに警告。

「先に外で待つてろよ」

「？ 何で？」

心底から不思議そうな相棒に、

「お前の顔に見惚れて、会計に時間がかかるからだ」と、懇切丁寧に説明してやる。

眉をヒョイと持ち上げて肩をすくめ一足先に外へ出る相棒に、店内中の羨望と憧憬の眼差しが送られる。会計のためにレジ前に残った俺には、嫉妬と疑問、猜疑の渦巻く凶悪な視線が容赦なく注がれる。ホント、人間て感情の動物やね（そりゃ、女か……）。

財布をしまいながら、植え込みの側で煙草をくわえているシェリ・ルーに手を振る。夜の闇の中、そこだけ輝いているかのような白い美貌に、フウツと笑みが浮く。あうっ……。これはまた、強烈な爆走しそうになる心臓と暴走しそうになる理性をなだめつつ、ギクシャクと歩を進める。

これまでの経緯から、何とか動きが止まって見入ってしまう事はなくなっただが 恐るべし、シェラの微笑。

ちようど駐車場から歩いて来たカップルの女性が、急に胸を押さえて座り込んでしまった。病気ではない。見れば分かる。……いや、これもある意味では、一種の病気かもしれない。シェラの笑みを、まともに目撃してしまったらしい。街灯の明かりを受けて、我が相棒の顔容は妖しく光って見える。営業妨害で訴えられかねない美貌の主を、なかば引きずるようにしてその場を去る。

今夜あの場に居合わせたカップルのうち、一体、何組が破滅の道を辿るのだろうか？ ご愁傷様です。 合掌。言っとくけど、俺の

せいじゃないからな。

そろそろ十時になるつかという街並みを、二人でポテポテと歩いて行く。上弦の月が、天空から地上を穏やかに照らしていた。

しかし、頭くんげなあ。マジで何モンだったんだ、あの金髪野郎。なあにが『下賤の輩』なんだよ、失礼な奴め。『貴様の生命など知らん』とかぬかすんなら、何しに俺の前に現れたんだよなあ？ 馬鹿じゃねえの？

怒りに任せて自分の世界に入り込んでいた俺は、シエラがいつもの路地を通り過ぎた事に、まったく気付いていなかった。

真砂の経営する“仮面舞踏会”へ行くのに使う薄暗い路地は、そこだけ別の世界のような雰囲気がある。どこか、この世でない、別の空間への入り口のような気がして、密かに俺のお気に入りであったりする。

ブツブツと独りごちながら、何も考えないまま路地へ入り込もうとする。

「おい、伊津留ってばよ！」

先程から呼びかけていたらしいシエラの声に、意識が浮上しかかる。

「うによ？」

「妙な返事してんなよ……。今日は、そっちじゃないんだ」

シエラが路地から五・六歩離れた所で、俺の事を呼んでいる。

「何で？ こっちの方が近いじゃんよ」

親指で通りの奥を指して、キョトンとして答えた俺に、シエラが首を振って言う。

「変なんだよ、そっちの道。だから、こっちの道から行くんだ。わざわざ、厄介事に首を突っ込む事もないだろ？」

「ふうん。変なんだ」

「そう。変なんだよ」

スゲー、不毛な会話。

「わあっ たよ」

ポケットから手を抜き出した拍子に、中からライターが飛び出した。

「おっ と」

カッンと地面で硬い音を響かせ、路地の方へと跳ねていく。拾おうとして路地へ足を踏み出した俺を見て、シエラが焦って叫んだ。

「待てっ！ 駄目だ、馬鹿！」

現出した悪夢（前書き）

俺達の目の前にも、とうとう形になった悪夢が。
俺ってば、結構ビクンチ！

現出した悪夢

相棒の制止の声が届く前に、俺は路地へ入り込んでいた。ライタ
ーを拾い上げ、

「シエラ、テメー、俺を馬鹿って言っただな」

振り向こうとした俺に足に、何かが当たった。

「？」

何気なく視線を向けて、俺はエラく後悔する羽目になる。俺に足
に当たっているのは、靴を履いたままの、男物の右足。

自分の足は左右とも、ここに揃っている。シエリ・ルーので足で
もなかるうなあ。奴の足なら、もっとキレイなはずだ。……見た事
はないが。

じゃ、一体、誰の足なんだ？ それに何だってこんなトコに、片
方だけ落つこちてんだよ？ 左足だけじゃ不便だろうに。

そこまで考えたとき、俺の思考回路は本人の意志を無視してその
機能を停止した。脳は目から入ってきた情報をそのまま受け取る。
思考回路を介さず、原始的な脳が認識する。

人間の足は取り外し不可なはずである。ましてや、こんな場所に
片足だけ……。よく見れば（見なくていいっ！）付け根の部分か
ら引き千切られたように、肉と皮膚が大きく爆ぜている。飛び散つ
た血痕が黒々しい。

「うっ！！」

ようやく思考が正常に作動し始めたのだろう。胃から急激な勢い
で逆流してきた温かいモノが、喉元までせり上がって来る。くるり
と背を向け、体を丸めて激しく嘔吐する。

「大丈夫か、伊津留！」

駆け寄ってきたシエラが、俺の背中をさすってくれる。周囲に吐
瀉物の異臭が漂った。

「げえっ げほっげほっ、ごほっ」

胃の内容物は、あらかた出てしまった。口の周りについた汚れを、ハンカチを引っ張り出して拭う。

「げほっ、うん。大丈夫だ」

くそっ。涙目になってやがる。空気を求めて喘ぐ肺に、深呼吸して酸素を送ってやる。空気中に溶けていた甘い血臭が、呼気に伴い肺の中に入り込む。それに反応しそうになる胃をなだめながら、シエラに頼む。

「悪い、シエラ。その足を何とかしてくれ」

「ああ、分かった」

シエラは着ていたジャケットを脱ぐと、落ちているその足にかけて視界から隠す。胃をさすり、シエラの手にすりつくようにして立ち上がる。こいつの言ってた『変な』ってのはコレの事だったんか？ しかし、他の部分はどうしたんだ？ まさか、帰ったわけじゃあるまい。危険な好奇心が頭をもたげる。

俺の顔を覗き込んでいたシエラが、ハッとして体を硬くした。

「伊津留 動けるか？」

見上げたシエラの色の薄い瞳が、炯炯^{けいけい}と光を放っている。ライト・ブラウンの長い髪が、風もないのにザワリと揺れた。

「無理だ っても、意味ねえんだろ？」

シエリ・ルーの身体から発せられる、圧倒的な迫力。普段のお茶らけた姿からは、想像もできない威圧感、存在感。

路地の奥、街灯の明かりの届かぬ先から、低い唸り声が聞こえてくる。まるで、食事時を邪魔された猫のような。しかも、その猫ときたら大きさが、トラかライオンぐらいありそう。この声からすると。

「おい。これって。もしかして、コレが例のかよ？」

笑いそうになる膝に力を入れて、とにかく一人で立ってみる。いざという時に、シエラにしがみついたままじゃみつともないし、足手まといになっちまう。そんな情けない羽目に陥るのだけは、絶対に避けたい。

「ああ。そうらしいな」

金色に光る視線を唸り声の方へ向けながら、短くシエラが答える。
闇が。街灯に照らされている光の輪の外、俺達を取り巻く闇が凝った。

「あ、あいつかよ……？」

低く太く唸り声を発しながら、ドロ色の毛皮を波打たせて、巨大な獣が姿を現す。

視線の高さが、そう大して変わらない。この世の一体どこを探せば、こんなデカイ動物がいるってんだよお！？

大きく裂けた口から、並んだ牙が覗く。

「ちくしょー！ テメーかよ、今まで人間を襲ってやがったんは！」
俺の声に反応してか、「そいつ」と目が合う。

うつ、ヤダなあ……。

瞬間、「そいつ」が笑った気がした。しかも、「ニタア」という嫌いな嗤いだ。慌てて視線を逸らそうとする。逸らそうとする。

そらそうと……。

でーっ！ 何でだよおおお！？

見えない手で頭を挟みつけられているかのように、視線を逸らす事が出来ない。いや、頭だけじゃねえ。全身がまるで金縛りにでもあつたみたいに、ピクリとも動かない。

「そいつ」の嗤いが、さらに広がった。唾液の溢れた口の中で、真っ赤な舌が踊る。まるでそれ自体に生命があるかのように。くそー！
！ こんちくしょー！ 動け動けよ動けええ！ 馬つ鹿野郎おお！

自分の身体で唯一本人の希望通りになるのが、心の中で叫び、罵倒する事。なんて、なんて、救われねーじゃねーかよおおっ！

そんな俺を面白そうに見ながら、「そいつ」が近寄ってくる。獣独特の歩調で、ノソリノソリと、しかし確実に。

ああああ……。視界一杯に、黄色く濁った瞳が広がる。

食イタイ

喰ライ尽クシテヤル

強烈な飢え。全てを喰らい尽くしても尚、やむ事のない飢餓感。

憎イ憎イ憎イ憎イ……

ナゼ私ガ？ 私ダケ、不公平ダワ

ドウシテ俺ナンド？ アイツノ方ガ、アイツノ方ガ……

オオ、呪ワシイゾオオ

死ンデシマエ、死ネ死ネ死ネ……

殺シテヤル、アンナ奴

死ニタクナイ

無限とも思える、感情の激流。押し流されてしまいそうな「憎悪」、触れれば切れてしまいそうな「殺意」「呪詛」「絶望」……。ありとあらゆる「負」の感情。

ぱぁんっ！

景気のいい音が響き、頬がジンジンと痛み出す。

「伊津留っ！ 気がついたかよっ！？」

殴られた頬に手を当てて、コクコクと首を振る。しかし、イタヒ……。

悔しそうに眼を細める「そいつ」との距離は、いつの間にか半分に切っている。

「馬鹿が。あいつの技にはまって、お前、自分から食われに行くトコだったんだよ！」

シエラが激昂しながら怒鳴りつけてくる。

「俺の後ろにいる。危なっかしくてたまんねえ」

手荒くシエラの背後に押しやられる。思っていたほど、時間は経過していないらしい。ほんの数秒の間の出来事。獲物自らが食われに来るのを待っていた獣は、街灯の明かりに全身をさらす。光は「そいつ」にとっては「得意ではない」程度の事らしい。今まで動かなかったのは、ただ単に面倒だっただけのようだ。

目をつけていた餌（えっ？ 俺かっ？）を横取りされて、そうとう頭にきているのだらう。不機嫌そうな唸り声が徐々に高くなっていく。それに合わせて、太い尻尾がクネクネと気味の悪いダンスを

踊る。全身を覆う泥色の毛皮の中、尾だけがヌメツと光っている。先端が持ち上がり、パクリと口を開ける。

尾？ お？ おおおっ？ ありゃあ、尻尾なんかじゃねえぞ！
パツクリと開いた口からは、赤い舌がのぞいている。まるで地獄の淵から漏れる炎のようだ。それは俺の腕ほどもあるうかという、巨大な大蛇。

なぜだああ！ この世の生物学的進化論ってモンを、完全に無視してんぞ、テメー！

裂けた口をひときわ大きく開けて、蛇が鋭く威嚇音を発する。その瞬間、あらかじめ決められていた合図のように、「そいつ」が飛び掛ってきた。

すくんでしまった俺の胸倉を掴んで、力任せに前方へ投げ飛ばしたシエラが、相手から目を離さずに怒鳴った。

「伊津留。先に行つて、路地から抜け出せるかどうか、試してみろ！」

その声に尻を蹴飛ばされるように、俺は路地の奥へと駆け込む。ここを曲がれば。道を通り向けようとした瞬間、すごい勢いで何かに弾き飛ばされる。

「つてー。んでだよお！ 何で出られねえんだよ、この野郎！」

ばんっ！ と両手を何も無い空間へ叩きつける。見えない壁となつた空間は、断固として俺を拒んでいる。

「おい、シエラ！ どうなつてん」

わめきながら振り返つた俺の目に飛び込んできたのは、朱に染まつた肩を押さえ、しゃがみこんだシエラの姿。

奴は、シエラと俺の間にいる。逃げられないのを知っているのか、弱っている方を先に片付けてしまおうと決めたらしい。

あの蛇が厄介だ。でも、何とかせんと……。何とかなるのか？

キョロキョロと周囲を見回し、転がっているビール瓶を発見した。それを拾い上げると、いきなり相手にブン投げる。と同時にダッシュ。

結構な勢いで飛ぶビール瓶を、空中で器用に蛇がよけている。その間に俺は自己最高記録を更新すべく、全力で奴の脇を走り抜け、相棒の許へ辿り着いた。

日常の崩壊……寸前？（前書き）

俺の頭は理解能力を超えた出来事の連続にパンク寸前！
誰か、俺を助けてくれ！！

日常の崩壊……寸前？

「シエラッ！ お前、怪我」

側に膝をついた俺を見て、シエラが怒声を上げる。

「馬鹿っ！ 何で戻ってきたんだよっ！？ お前だけでも逃げてくれりゃあ良かったのに」

むっ。おめえ、また俺の事、馬鹿呼ばわりしやがったな？

「人の事だと思つて、馬鹿馬鹿言つてんじゃねーぞ、この馬鹿！ 見えねえ壁があつて、その向こうにや行けねえんだよ！」

思わず、シエラの胸倉を掴みそうになつていた両手を握り締める
と、ジリジリと近づいてくる奴をにらみつける。

「もしも何もなくなつたつてな、友達置いて俺一人だけで逃げるなんて、出来るはずねえだろうがっ！」

「悪い。サンキュ」

しかし、この状況を何とか打開しなければ、話が先へ進まない。

唾液と唸り声をこぼしながら、一步一步近づいてくる“死”の姿くつそー。せつかく生き返ったんだ。こんなトコロで死んで堪るか！

「おお。死んでなんかやるもんか」

そう言葉に出した途端、バクバクいつてる心臓とは別に、自分の内部で脈打つモノが生まれた。

死ぬもんか、死ぬもんか、死ぬもんか。感情と共に、圧力が高まっっていく。

「ふざけるな！ 貴様みたいな、訳の分からねえ奴に、くれてやる生命はねえっ！」

限界点まで達した圧力は、純粋な「力」となつて暴れ狂う。俺をぶち壊して飛び出そうと、熱を持って高まる圧力は膨れ上がり、とどまる気配はない。ふらついて思わず体を支えようとした手が、シエラの体に触れた。その瞬間、まるで電流のように、俺の心を得体の知れない痺れが疾走った。

一気に背骨に沿って駆け上がり、額の一転に集中する。あの、ナ
ンとかチャクラ、「第三の眼」のある部分だ。凄まじい勢いの「力」
と「熱」が、俺の額に集まっている。

負けたくない。死にたくないと繰り返す心が、奴をにらみつける
目の前が、真っ白に弾け飛んだ。

ああ。もう駄目だ。抑え切れねえ。

「う、おおおおお」

喉が張り裂ける程の叫びがほとばしる。「力」と「熱」の奔流が、
額を突き破って溢れ出る。

白く霞んだ俺の視界に、自由になった「力の矢」が真っ直ぐ伸び
上がり、空中の壁を貫いて飛び去るのが見えた。壁は貫かれた部分
から亀裂を生じ、粉々に砕けて消滅する。

「見えない壁」であるにも関わらず、それが消え去ったのを感じ
る事ができた。なぜか俺には、感じ取ることが出来たのである。

「結果が、開いた」

シェラの内部から何かが俺に流れ込んできたのと同じように、俺
の内部から何かがシェラに流れ込んだのだろう。シェラの髪と瞳
が、本来の色を取り戻して輝いている。

この路地一体を閉じていたはずの結果が破れた事により、己の不
利を悟ったのだろう。怒りで体毛を逆立てながら、ダツと地面を蹴
り付け、妖獣が迫ってくる。

立ち上がろうとした膝が、情けなくも砕けた。ゲツ！ どうすん
だよ。もお、体が動かねえじゃねえか！

不意にシェラが動いた。左肩の怪我を押さえていた右手を離すと、
目の前で何かの形を描く。血まみれの右手が動いた跡に、ほの蒼い
光の残像が灯る。

「ふっ！」

鋭く、短く息を吐くと、人差し指に中指を揃えた右手を突き出す。
空中に描かれた印がシェラの指の軌跡を辿り、妖獣に絡みついた。

「ぎゃおんっ！！」

網のように広がった輝く模様が、妖獣の身体を捕縛している。

「ぐるる……」

狂ったように頭を振り回し、何とか自由になろうともがく獣を、俺は呆然と見ていた。

んだ？ 一体、今、何が起こったんだ？ どうしたんだ？

シェリ・ルーは銀の髪を振り立て、金の瞳を天に向けて叫んだ。

「真砂お！ 聞こえてるんなら、来てくれ！ 俺達はここだ！」

俺は一瞬、怪我のせいかなんかで、シェラがおかしくなったのかと思った。悪いけど、マジでそう思ってしまったのだ。いくら近いとは言っても、声が届く距離じゃない事は確かだ。しかし、俺にはそれ以上のことを考えている暇はなかった。なぜならば。

奴がシェラの戒めを解いちゃったからだ。こいつ スゴすぎだぜ。

「伊津留！ 手を伸ばしてっ！ 上です！」

頭上から、どうしたわけか真砂の声が降ってくる。深く考える以前に、身体が言葉に勝手に反応した。虚空へ向かって伸ばした腕を、誰かの力強い腕が掴んだ。体を引き上げられる、ぐんっ、という上昇感。

「今晚は。いい月だね、伊津留」

真砂がいる……空中に……浮いている……俺の目の前に……ちなみに、俺も。

俺も？ 余計な事を考えてしまった俺は、ヒョイと下を見てしまった。

「どっ、ああああっ！」

「駄目ですよ、暴れないで！ あいつの鼻先に落としちゃうかもしれませんよ」

もちろん「あいつ」とは例の妖獣の事だ。真砂の腕にヒシッとしがみつくと、涙目で首を縦に振って見せた。

「よし。今のうちに、店の方へ避難しましょう」

バサッ。ピンと張った布を振ったような、風を叩く音がすぐ側で

聞こえる。

再度、俺は真砂を見上げて目を剥いた。

「ま、真砂」

「はい、なんでしよう？」

バサツ、バフツ。

規則正しく夜空を打ち付けているのは……。

「あんた、それ。翼……なのか？」

「ええ、そうですよ」

もしもし？ ニツコリと笑っている場合か？　なんでしようじゃないだろ？　そうですよぢやねえだろ？？

広がる夜空の闇よりもなお深い。漆黒の翼、蝙蝠こつもじの羽。力強く羽ばたく巨大な翼は、俺達二人分の体重をしっかりと支えている。

何か言いたそうに口を開いた俺を見て、

「質問は後で。今は問答している場合ではないと思っているんですが」

「……はい。その通りです」

不承不承ではあったが、口を閉じる。確かに、そんな場合じゃないですね。何といっても空の上だし。奴の上だし。

しかし、何かが。えつとお　何だっけか？　おあつ！

「まさごまさご、真砂！」

「一回呼べば、分かりますよ。何ですか？」

真砂に抱きかかえられた、かなりカッコ悪い姿で俺は喚く。

「シエラは？　あいつはどーすんだ？」

雄雄しく上下する翼が大気を打つたびに、グンツと体が前進する。「大丈夫ですよ。後からちゃんと来ますから。それにいくら何でも二人抱えては飛べません」

黒のスラックスと白いドレスシャツ、アスコット・タイの美青年が空を飛ぶ。長めの髪を風に流し、闇より黒い蝙蝠の翼で。

「だって、あいつ怪我して」

「大丈夫ですから。よっぽどの怪我じゃない限り、ちゃんと店まで

来ます」

そこまで言い切られちゃうと、後が続かないよなあ……。

やっと口をつぐんだ俺を連れて、真砂は空を急ぐ。どこをどう辿ったのか、よく覚えていない。俺ってば、気が動転してたしね。気付いた時には店の前だった。勧められるままに店内へ入り、カウンターへ座ると、奥でコーヒーを淹れ始めた真砂の手元をボーッと見ていた。思考がまとまらない。

カチャ……ン。

ただ消費する事を目的としているかのように、何本目かの煙草をくわえた俺の目の前に、真砂がカフェ・オ・レのカップを置いた。

「あ。サンキュ」

火の点いていない煙草を灰皿に置き、カップに口をつける。いつもより甘めだ。

昼間はほとんど客の入らない喫茶店だが、夜ともなれば話は違ってくるようだ。奥のテーブルから順に埋まっていくのか、店には結構な客がいた。特に騒ぐでもなく、静かに酒を飲んでいる客の姿が、この「仮面舞踏会」という店にふさわしい。

「伊津留？」

「ん？」

再度、煙草の消費を開始した俺に、真砂が声をかけてくる。質問したいことは山ほどあった。けど、何から聞いているのか、よく分からん。

「んな、真砂」

カウンターを回って、隣のストूलへ腰掛けた真砂に声をかける。

「この店ってばさ、“どこに”あるんだろう？」

とりあえずは、無難なトコから攻めていこう。いきなり本題には入りづらい……。

自分はウィスキーの入ったグラスを片手に、“ジョーカー”に火を点けた真砂は、深いため息と一緒に煙を吐く。

私の店は『こちら』と『あちら』の狭間。どこでもあり、どこでもない場所に存在しているんですよ」

はい？ 何ですか？ 聞かなきゃ良かった。俺の顔を見て、ちっとも理解できていないのを察した真砂が、噛み砕いてくれる。

「つまりね。伊津留が普段、日常生活をしている空間と、この店の
ある空間は別々なんです。縦横に広がる無限のパラレル・ワールド
の全部に存在し、それと同時に、全部に属さない所なんですよ、こ
こは」

「だって、初めて来た時に、女の子が来たじゃん。あれは？」

「彼女が、この店の存在を望んだから。心をなくさめる場所が必要
だったからです」

楽しい時、満たされている時には見つからない。でも悲しい
時、寂しい時にはすぐに見つかる。そういう店なんです。

あの時に真砂が言った言葉の意味がやっと、俺にも分かった気が
した。

「でも、俺とシェラは何でもないのに来れてるぞ？」

それでも食い下がる。しつこいのだけが、取り得なんだから。：

でも、嫌われるんだよねあ、コレ。

「それはシェラがいたからですよ」

うつ。気がついてはいたけど、こうはつきりと言われちゃうと、
ちっとシヨックだいな。

「なら、普通の『人間』は来れない訳？」

「ええ。特別な時以外は」

「俺も普通なんですけど？」

「伊津留は大丈夫ですよ。安心してください」

安心ねえ……。俺は店の奥をクイツと右手の親指で示した。

「んじゃ、あつちの客は？ 普通じゃない訳？」

時空の迷子たち（前書き）

少しずつ明かされていく、不思議な物語。
どこまで信じればいいんだろう？

時空の迷子たち

真砂はちらつと視線を流し、真面目な顔をして俺の方を向いた。

「お話するのは構わないんですが、聞くからには、信じてもらわなくてはいいけません。今から話す事を、信じきる自信がありますか？」
自分の話す事を無条件で、何も言わずに信じる。それが出来なければ、教えるわけにはいかないと言う。

「彼らは、大切な私のお客様です。客の事を安易な好奇心だけで探られる訳にはいかないですよ、私の立場として」

それはそうだ。もつともな話である。俺だって、本も読んだ事ないのに、モノカキだというだけで近寄ってくる連中は、大嫌いだ。

しかし、ここまで関わった以上、『やっぱ、やゝめた』ってのはただけねえよなあ。

「信じるよ」

毒を喰らわば皿まで。シエラの事を知りたければ、真砂の、この連中の話を信じなければ。根拠はないが、この直感の外れない。静かに俺を見ていた真砂がただひと言、わかりました、とだけ答えた。その頃になると、店内もやや活気付いてきている。顔見知りに声を掛け、酒を勧めて話し込む客が増えた。

「いいですか、伊津留。これから言う事を、絶対に笑わないで聞いてください。もしもあなたが『そんなの嘘だ』と思った瞬間に、この店はあなたを『排斥』します。今後二度と、この店を見つける事は出来ません」

そう言いおくと、一番奥のテーブルを真砂は指差した。

「隅のテーブルに、サングラスをかけた青年がいるでしょう？」

店の中の一帯薄暗い場所に「彼」はいた。こんな夜に、しかも店内でサングラスとは、目が悪いのか？

「彼は“バジリスク”です」

バジリスク　王冠を持つトカゲ。蛇族の王とも言われる伝説の

生き物。雄鶏の産んだ卵をヒキガエルが温めると、この生物が孵るとされている。視線が合うと石になり、その毒は岩盤にさえ穴を穿つ。

仮にも、ファンタジー小説を書くかという小説家のハシクレである。ある程度の知識はあるのだ。

だが、しかし “バジリスク” う？ いや、いかんいかん。「排斥」されてしまう。つまりは、この店への永久出入り禁止を申し渡される事になる。そいつは嫌だ。やはり、「石化」を防止するためのサングラスなんだろうか？

「そっちの彼女はバンシー、もう一人はセイレーンです」

茶色のワンピースを着た髪の高い沈んだ表情の女性と、派手な化粧の女性が話し込んでいる。

バンシー。死者が出る夜に、いずこからともなく聞こえる女の泣き声。その親族に替わって悲しみの声をあげる妖精。そしてセイレーン。海に棲まう魔女。甘美な歌声で船乗り達を惑わし、海中へと引きずり込む女怪。

「左目を前髪で隠している男性は“邪眼”。ボトル三本目に掛かっている彼は“狼男”です」

あ、頭の中が、グールグル。

「危なくないのか？」

真砂は少し暗い目を見ると、

「ええ。例えば、あの“バジリスク”の彼ですが 昔、一人の女性と恋に落ちました。しかし、彼女は彼の瞳を見て石になってしまったのです。悲しみにくれた彼は、その時に自らの両眼を潰してしまいました」

フィルターぎりぎりまで短くなったジョーカーをもみ消し、次の一本をくわえる。

「ほい」

「ああ、どうも」

真砂の煙草に火を点けると、自分もキャビンに火を点ける。

「バンシーは開発によって森を追われ、彷徨っているうちに戦場に出てしまったんです。堪りませんよね。死人の出ない夜はないんですから」

バンシーが泣くから、人が死ぬのではない。人が死ぬからバンシーが泣くのだ。この妖精はその不吉な使命とは別に、心優しく大人しい妖精なのだ。近く死者の出る事を予知し、常に闇の中に姿を現す。

そんな妖精が戦場へ迷い出たら……。人の死なない夜はない。狂ったように泣き叫びながら、バンシーは必死に探したに違いない。噎れた喉を潤し、迷い疲れた足を休める事が出来る場所を。何より、死者の気配のない場所を。

「セイレーンはご存知の通り『海の魔女』です。が、今の海のどこに一体、彼女達が棲むことが出来る場所があるのでしょうか？ 清浄だった海は汚され、掘り返され、埋め立てられていく。実験と称した核の使用で、彼女の仲間達は死んでいきました。座礁したタンカーから流れ出した重油に汚され、消えていった仲間もいたそうです。そして彼女は一人になってしまいました」

「探そうとはしないのか？」

聞き返した俺に、真砂は煙と一緒に答えた。

「皆、彼女の目の前で死んでしまったんです。探せばどこかにいるのかも知れません。でも、彼女は探さないでしょう。期待が大きい分だけ、失望した時の傷も深いのですから」

そりゃ、そうだろう。

「この店はね、行き場のない、帰る場所のない者達のためにあるんです。彼らも昼間は、人に混じって生きています。だけど夜だけは、本来の姿に戻るんです。だからこの店の名前は『仮面舞踏会』なんです」

仮面を被らなければ生きていけない彼らのための店。帰る場所はなく、行き着く場所もない。そして、彼らをそのような境遇に陥れた大筋の理由は「人間」という、巨大で貪欲な化け物だ。共存して

いたはずの彼らを「迷信」や「御伽噺」として闇の中へ退け、自分達だけが地上の覇者のような顔をしている。

真砂はストウールから立ち上がると、カウンターへ戻り棚から酒瓶を降ろす。

「何にしますか？」

「じゃ、モスコミュール」

そう強くないカクテルをオーダーして、煙草の消費を再開する。

遅い。仮面舞踏会に来てから、結構時間が経った。なのに。

「遅い……」

思わず呟いちまった。

ロング・グラスが目の前に置かれる。目に優しいグリーンのカクテルが落とされた店内の照明に映える。

顔を上げると、視界の隅で何かが動いた。何気なく視線を移動させると、カウンターの陰から一頭の大型犬が現れた。そのままヒヨイとストウールに飛び乗る。なかなか器用じゃんか。

室内の照明に銀色の毛並みが美しい。ハスキー犬かね？

俺がじつと見つめているのに気付くと、トパーズの瞳を煌めかせて振り向く。

「俺の顔に、何か付いてるかい？」

「あ、いや、別に」

慌てて返事をし、視線を逸らして一呼吸。え？ 何がどうだっつて？

首がモゲる程の勢いで振り向いた俺は、真砂から深皿に水をもらっている“犬”を見た。

「あ、あ、しゃ、しゃべった……？」

ぐりん、と目玉を動かして“犬”は俺を見ると、ばくんと口を開けた。

「しゃべっちゃ、悪いのか？」

別に「犬がしゃべってはいけない」という法律はない。従って、

俺の隣の腰掛けたこの犬が、鳴こうが喚こうが、何も悪いこともない。しゃべろうが、叫ぼうが、歌い出そうが、構うことはないのだ。だが、だが、なのだよ！ なぜだ！ なぜなんだ！

しばらくの間硬直してしまった俺は、ガラスの触れ合う音にハッと我に帰る。

「し、失礼。言葉を話す犬を見たのは、初めてだったものですから」

ギクシャクと言いつく俺に対して、その犬はこう宣下した。

「当たり前さ。話す犬がそこいら辺にゴロゴロしてたら、うるさくって堪らんぞ」

確かに、その通りだと思う。

深皿の水に口を（舌を？）つけながら

「あんた、名前は？」

「うー」。犬にあんた呼ばわりされてるしよお。悲しいなあ。

「萌木伊津留です」

「ほうん。俺はガル。ひとつ頭のケロベロスだ。よろしくな、新入りさん」

地獄の番犬ケロベロス。三つもしくは九つの頭を持つ、巨大な犬。その鋭利な牙で死者の魂を引き裂き、舌には猛毒を持つ植物が生えるという。

ぱぱぱつとフラッシュの如くに、言葉が脳の表面を駆けていく。

「不思議そうな顔してんナ。なんでケロベロスなのに頭が一つキリつきやねえのか、ってな」

トパーズの瞳を細めて、口を大きく開く。赤い舌がダラリと垂れ下がる。もしかして、笑ってるってやつか？

「普通、俺達の一族は複数の頭を持って生まれる。なのになんてか俺だけがひとつ頭のままで生まれてきしまったのさ」

深皿の水は飲み干したらしい。

「当然、群れの中にはいらねえ。居場所がないんさ。そこで、出てきちゃったんだわ」

店内をグルッと見回すと、鼻を突き出す。

「ここに集まってる連中だって、追い出されたり飛び出してきたり、迷い出しちゃったり色々さ、お前もなあ、真砂」

ガルのトパーズの瞳を追うように、俺も真砂に目をやる。

そりゃそうだよなあ。普通の何でもない奴が、こんな店やってらんないもんなあ。さっきだって、こう、翼出して

「真砂って、一体……？」

ガルの前の皿を持ち上げると、フワリと笑んだ真砂が逆に問いかけてきた。

「何に見えますか？」

黒の上下にアスコット・タイ。夜空を滑る漆黒の翼。ベタだな。

「もしかして、吸血鬼とか言っつてか？」

苦笑しながら、煙草をくわえる。

「はは。当たり前です」

事も無げに、あっさりと認めて下さる。「神秘」とか「不思議」とか、一切関係ねえっ！　って感じた。

俺はポカンと口を開けたまま、真砂を眺めていた。よっぽど間の抜けた顔をしていたんだろう。ガルが俺の腕を鼻先でつついてくれた。ハッと気がついて、口の端にぶら下がっていた煙草を慌ててくわえ直す。

左手が、無意識に頸部をなでていた。

「じゃあ、真砂も、その……吸う訳？　血」

恐る恐る尋ねる俺に、苦笑しながら真砂が答えようとした、その時。

ガロロロンッ　ガロンッ！

けたたましい音を立てて、ドアが開いた。店内の視線が、騒音の主に向けられる。

「よお。水、くんねえ？」

ドアにもたれて弱々しく笑っているのは、置き去りにしてきてし

まいったわが相棒、シェリ・ルーその人だった。

「何だ、伊津留。お前ってばシェリ・ルーの知り合いだったんか？」
カウンターにかけた前足にアゴを乗つけて、ガルが俺に話しかけてきた。

「ん。知り合いってか、何て言うのかね。一緒に住んでんよ。まあ、やつの大家さんてトコかな？」

氷が溶け出して薄くなってしまったモスコミュールを飲みながら、ガルに答えた。

「ホウ。あの真砂が珍しく『人間』なんぞをかまっているから、どんな奴なのかと思っていたが。なるほど、シェリ・ルーの知り合いだったとはね」

「ホウ。あの真砂が珍しく『人間』なんぞをかまっているから、どんな奴なのかと思っていたが。なるほど、シェリ・ルーの知り合いだったとはね」

キャビンをくわえて、ガルに視線だけを移しながら、いつの間にかタメ口になってしまっている俺は

「何？ 真砂って、普段『人間』相手にしてない訳？」

「昼間は別だぜ。でもよ、この店自体が人間の目には映りにくいんだ。夜になってから店に人間がやってきたことは、俺の知る限り、今夜が初めてだ」

ガルはクフウンと鼻を鳴らすと、シェラの手当てに忙しい真砂をチラッと見る。

「あんな、伊津留」

長くなつた灰を灰皿に落としながら顔を上げた俺に、ガルは続けて言う。

「真砂はよ、人の血なんか吸わないから安心しな。それに、たとえば奴に血を吸われたって、吸血鬼にはならねえよ」

え？ 何？ そんな事ってある訳？

「奴は吸血鬼の持つ属性を、何一つ持って生まれてこなかった。陽の下を歩いても塵にならない。血を吸っても、相手は吸血鬼にはならない。十字架もニンニクも効かない。まあ、心臓に杭を打たれても生きていられるかどうか、奴にも自信はないと思うけどな」

俺ってば思うのよねあ。吸血鬼じゃなくなつたって、心臓に杭打たれたら死んじゃうんじゃないだろうか？

「死ねない吸血鬼ってのも、寂しいモンだよなあ。真砂も俺も、自分の同族から弾き出されたんだ。『自分と違う』 それだけの理由で他者を追い詰めるのは、何も人間に限った事じゃねえ。その寂しさは……」

一瞬言葉を切ってから、俺の方を見る。

「シェリ・ルーも例外じゃない」

「ガルッ！」

傷を洗った水を取替えてきた真砂が、キツイ口調で話をさえぎる。

「ガル！ それはシェラの問題です！」

テーブルの上にアゴを乗せたまま、上目遣いに真砂を見ながら、ガルが口を開く。

「おおさ、こいつはシェリ・ルーと伊津留の問題だよ。けどなあ、誤魔化したままってのは、いかなもんかねえ？」

消毒したシェラの傷にガーゼを当てながら、真砂も負けてはいない。

「だからといって、あなたが勝手に話していい理由にはならないでしょう。私自身に事ならともかく。シェラにだって、都合というものはあるんですよ」

言うときゃあ言う奴だったのねえ、真砂ってば……。

「馬鹿か、オメーは？ 五百年も生きてて、脳みそ、干乾びてんじやねーの？」

ゲッ。ガルもキツイ事言うなあ……。

「いいか？ 伊津留は普通の人間だぞ？ 俺達と違って『寿命』つてもんに支配されてんだ。シェリ・ルーの都合なんぞに付き合ってたら、あつという間にジジイになっちまうよ」

言外に、シエラも人間以外の何かだとほめかしている。

「それによお。ここまで聞いちまってんのに、『ここまでの話、全部チャラね』ってやたら、伊津留の奴キレるぞ」

ああ、確かにその通りだ。これ以上ない程、好奇心刺激されてんのに『お預け』くらったら、店ん中で暴れるぜ、俺。

「伊津留はどうなんだよ？」

それまで口を閉ざしていた当の本人が、ようやつと話しかけてきた。

すっかり短くなっちまった煙草を灰皿に押し付けると、新しい一本に火を点ける。深く煙を吸い込むと、流れる紫煙ごしにシエラを見る。しかし、何本目だコレ？

「ここでお前さんの事を聞かなかつたら、多分この先ずっと、俺はお前に聞き出せないと思う。そしてお前も、今言わなかつたら、このままはぐらかす気にいるんだろ？」

トンツと灰皿の縁に煙草を当てて灰を落とす。

「そのうち、何も言わないまま、黙っていなくなるつもりでいるんだろ？」

シエラの肩がピクリと動く。左肩に巻いた包帯の白が目には痛い。

「ほらな。……話しちまえよ、シエラ。お前が何者だろうが、俺は一向に構わんさ。正体隠して、黙っていなくなるな」

シェリ・ルーの無事な方の肩をぽんぽんと叩き、真砂が静かに言う。

「シエラ。伊津留も、ああ言ってくれています。話してしまった方がいいかも知れませんか」

しばらくの間、周囲に沈黙が落ちる。

「あのな、伊津留」

「お？」

「もしも、俺が本当の事を話して、それで、俺の事が嫌になったら。そうしたら、遠慮しないで言ってくれよな。お前のトコロ、出て行くからさ」

あ、俺、イライラしてきた。残りのカクテルを一息で飲み干すと、少々力を入れてカウンターへ戻す。

ダンッ。

ゲッ。予定より力入れ過ぎちゃった。割れてないよな、グラス……？

「俺なあ、お前の事、スゲー好きだよ。何かもう、ずーっと前から付き合ってるみたいにな、シェラの事気に入ってるんさ。けどなあ、お前のそういう、ウツダウダしてるトコなあ、メチャメチャ嫌いなんだよ」

俺がいいって言ってるんだから、それでいいんだよ。いちいち悩む事あねえんだ。

想いをそのまま視線に乗せて。そして、静かにシェリ・ルーが語り出す。

「『アズラエル』って、知ってるか？」

ほほう。やはりそこから攻めてきましたか。

「少しはな。『死の天使』とか『沈黙の天使』とかってんだろ？」

煙草をもみ消す。今日は、もうヤメとこうか。

シェラはフィツと横を向くと、小さくこう言った。

「俺がその『アズラエル』なんだよ」

フウアサ。

優しく空気を震わせて、シェリ・ルーの背に華が咲いた。

力強く優美に風を伴うであろう、その華は 四葉しよつの翼。

雄雄しく羽ばたき見る者を魅了するその華は 鮮やかな紅。

「彼」は、闇の中に身を横たえていた。身体中がジクジクと、鈍く

痛みを訴えている。すでに大半の傷は塞がっているというのに。「彼」は不機嫌に唸りながら、闇の奥をにらみ付けている。しかし、その目には闇以外のモノが映っている。

思い出すのは数日前の出来事。「食事中」だった「彼」の目の前に、二人の人間が現れた。「彼」の脆弱な思考回路には、せいぜい楽しみが増えた程度の認識しかなかった。

しかしこの二人組みは、「彼」の「食事」の邪魔をした上に、「彼」が張り巡らせておいた結界を砕き、こともあるうに「彼」に傷まで負わせたのだ。

身体中の傷を塞ぐのに二日。千切れた尾を再生するのに一日。黒髪の間が逃げた後、銀色の髪をした奴が放った、強烈な光に焼かれた網膜の再生に二日。

その間、動き回る事も「食事」をする事も、「仕事」をする事も出来ない。空腹で目が眩む。飢えて怒りが燃え上がる。まるで数千の虫に、身内を食い荒らされているようだ。

もっと力が必要だ。もっともっと、強さが必要だ。知恵もつけないといけない。学習しなくては、奴等の裏をかくことは出来ない。憤怒の炎を瞳に浮かべながら、「彼」は思い描いていた。

銀の髪の男と黒い髪の男、二人の姿を。

眠れぬ夜の不思議な話（前書き）

シエリ・ルーの爆弾発言から一週間。

つかの間の平和は、これから来る嵐の前の静けさなのか？

眠れぬ夜の不思議な話

「うーみゅ……」

東の空が、わずかに色を変え始める時刻。アパートの周辺も、部屋の中も、まだ静かである。

時計の針は、午前四時五十分を指している。

くそっ！ いつもなら、こんな時間、布団に包まって夢中だぜえ、ちくしょーっ！！ 何が悲しくてこんな時間まで起きとかなあかんのやあああ！

腹の中で雄叫びをあげている俺は（さすがに、本当に叫ぶ勇氣はない）、別に突発性不眠症になって、眠れぬ夜を悶々と過ごしている訳ではない。

机の上に頬杖をつきながら、コーヒーの飲み過ぎでタポタポの腹と、万有引力の法則に従がって落ちてくる目蓋まぶたと闘いながら、無常^{まぶた}に時を刻み続ける時計に急かされてパソコン・モニターとにらみ合っているのだ。

眠れない事に関しては、不眠症と似たようなモンか……。いや、やっぱ違うか……。

どうも締め切り間近になると、俺の理性は荷物まとめて、トンズラこくらしい。

締め切りは刻一刻と迫っているのに、パソコンのモニターに映し出された文章は、夕辺打ち始めた時から比べて、進歩を見せた後がない。

まずい…… ひっじょう~~~~に、マズイ！

アップは明日の十時だぞ（本当は、今日の十時だった）。担当さん拌み倒して、せつかく延ばしてもらったのに、意味がないいい！ ヒイイイ！！

机の上に放り出してあったキャビンの箱を引き寄せると、一本抜き出す。を？ 最後の一本だ。しゃーねーなあ。

煙草に火を点けると、パソコンの電源をOFFにして立ち上がる（いっぺん、電源を入れたまま出掛けたら、しこたま怒られた）。どうせ、座ってても何も出てこないんだ。気分転換を兼ねて、煙草を買いに行つてこよう。椅子に引つ掛けてあつたジャケットを片手に、玄関へ向う。少しばかり立て付けの悪いドアを、なるべく静かに開けて外へ出る。しーっ、うるさいよ、ドア。もちろん、眠っているシェラを起こさないようにとの、心配りからだ。

ちなみに俺が徹夜で仕事をする時は、奴は俺の代わりにロフトで眠る。普段はリビングのソファ―ベッドで寝ているのだが、俺が無理やりに移らせた。いくらなんでも、夜っぴいて灯っているスタンドと、神経を逆なでするキーボードのクリック音の傍らで眠らせるのは気が引ける。これでも同居人には気を使っているのだ。

ドアに鍵を掛け、まだまだ暗い通りへ出た俺は、ブルツと体を震わせた。表は結構冷えている。せっかく外へ出たんだ。予定変更。自販機やめて、コンビニにしよう。おっ買物、お買物！
自己主張を続ける自販機を無視して、近所のコンビニへと足を向ける。

「はーう。平和だねえ」

煙草の煙を吐き出しながら、ぼつりと呟いてみる。声は静かな通りに吸い込まれていった。

衝撃の事実！

『俺って、実は天使なの！』発言をシェリ・ルーがブチかましてから、早くも一週間が経過した。

目の前に広げられた翼は四葉、いずれも鮮やかな紅。

この色は、俺に下された罪の色だ。

シェラはそう言つて、顔を伏せた。どうやら本人は、気に入っていないらしい。

ふうん。綺麗じゃん。

俺は珍しく、漢字で発音してやった。

キ……レイ？ この翼が？

信じられない事を聞いた、とても言うようにシェリ・ルーは目を見開いている。

なあ、シエラ。お前はその羽が嫌いみたいだけだな。どんなにお前が嫌がっても、そいつはお前の背中についてんだ。取っちなう訳にはいかないんだろうが？　したら、諦めて認めちまった方が楽だぜ。この翼も自分の一部だって。

何か、スッゲー恥ずかしい説教してる、俺。でも、マジでシエラの翼は綺麗だと思ったんだ。

コンビにのドアをくぐり、かごを片手に店内を物色する。

この一週間、例の「謎の大型獣事件」がなかったためか、こんな時間にも関わらず、チラホラと人影がある。

かなり傷を負ったはずだから、しばらくは動けないと思う。まあ、あくまでも希望だけだな。

結局、相手を仕留めることは出来なかったが、しばらくの間、再起不能にするくらいは出来たという事である。あんなゴツイ奴とやりあったのだ。それだけでも、大したものと言わねばなるまい。事実、シエラだってあれだけの傷を負ったのだ。ちよつとやそつとの事では、倒すのは難しいだろう。

あれもケロベロスの仲間だったりするのか？

尋ねた瞬間、両肩にズシツと重しがかかった。お、重い……。

お前、俺にケンカ売ってんのか？　あ？　買うぞ、そのケンカ。耳元で、ハアアアと怒りの息遣い。

俺達ケロベロスは、誇り高い一族だぞ。まかり間違っても、人間なんぞ喰うかつっ！

思いつき怒鳴られてしまい、ひたすらに謝り続けたんだ。

せんべいにチョコレート。そういや、朝飯までまだ時間があるなよし、おにぎり買おう、おにぎり。かごに商品を放り込むと、レジへ向う。そうそう、忘れちゃいけない。レジの横に置いてある、五箱入りのキャビンを手を取った。

「いっちらしゃいませ」

バーコード・スキャナーを手にした、愛想のいい兄ちゃんが立っている。ジーンズの尻ポケットから財布を出していると、声をかけられた。

「あれ？ 伊津留さん？」

「んあ？」

顔を上げると、レジの兄ちゃんと目が合った。

「やっぱ、伊津留さんだ」

兄ちゃん、人の良さそうな顔でニパニパ笑っている。 誰だっ

け？ 自慢じゃないが、俺は人の顔と名前を覚えるのが苦手なのだ。

「 お、真砂んトコの」

そーか、そーだ。『仮面舞踏会』の客で、確か狐の妖怪（あの店は、東西入り混じってんですわ）とか言ってたっけ。

「どうしたんですか、こんな時間に？」

レジには、俺以外に客はいない。会計を済ませて、財布をしまいながら世間話なんぞしてみる。

「彼女とケンカして、部屋を追い出されたとか？」

「こらこら。」

「馬鹿者。仕事だよ、仕事。徹夜明けの買出しさ」

妖怪が二四時間営業コンビニの深夜アルバイト。情けない話だが、これが現実。この世界で生活する者には、人間だろうが妖怪だろうが、「金」という必要不可欠なアイテムと、住むべき場所が等しく要求されるのだ。

もはや、夜の闇に紛れて などという、古き良き時代は去った。人間にはより快適に。それ以外の者ののは、より過酷な条件を提供する。そういう世界になってしまったのだ。

他愛のない世間話をしてから、レジを離れる。その背中に声が掛けられた。

「ああ、そうだ。シェリ・ルーに言っといってください。例の件、動き出したら知らせますからって」

俺は右手を挙げて応えようと、コンビニを後にした。買ったばかり

の缶コーヒーを開けると、一口飲んで両手を暖める。

結局のところ、『アズラエル』って何なんだよ？

俺の問いに視線を落とし、緋色に輝く翼をたたむ。

人間に“死”を運ぶ者。天界に居ます者にして、もつとも“魔”に近い者。もつとも忌むべき災厄の種子……。

ものスゲー言われようだよなあ。仮にも「天使」なんだぜ？ 初めて真砂に会った時、なんで奴があんなに“天使”にこだわっていたのか、ようやく分かった。

そんで？ なんで人間界にいるんだよ？ 天使なんだから、天界とやらにいるんじゃないのかよ？

一番気になっていたのは、そこんトコだ。シエラは、俺が死にかけていた時「事情があつて」と言った。その事情については、何一つ聞かされていない。

そこまでは……。あまり深入りしないほうがいいだろう？

飲み終わった缶を袋にしまいなおすと、静かにドアを開けた。シエラはまだ眠っているらしい。ガサガサとうるさいビニール袋をテーブルに置くと、お握りのパックを引っ張り出す。このビニールの音って、すっごい響くのな。あ、忘れないうちに、空き缶は捨てなくては。分別、分別。ちゃんと捨てないと、絶対、やり直させられるんだ。

パソコンの脇に置いてあったカップを覗き、底の方で冷たくなっているコーヒーを飲み干すと、新しく淹れ直す。

どうせここまで関わっちまったんだ。今さら、隠し事はなしにしようぜ。

俺の言葉に、シエラは眉根を寄せた。まだなにやら悩んでいるらしい。その迷いを断ち切ることが出来るナイフを、おそらく俺は隠し持っている。

なあ、シエラ。お前さあ、金髪をこころへんで、こう（肩の辺りで手を動かし）ナナメにカットした、緑色の眼えした、むっちゃくちやタカビーで、ど派手な兄ちゃん知ってるか？

いちいち強調してやる。いきなりの事だったので、しばし戸惑うシエリ・ルー！。

え？ あ、ああ。知ってる。

ツナのお握りを頬張りながら、パソコンのスイッチをONにする。「やっぱ、お握りにはお茶ですかねえ？」

ぶつぶつ言いながら、コーヒーを一口すすり、ディスプレイに目をやる。

そいつの名前、何てーの？

まだよく事情の飲み込めていないシエラは、不思議そうな顔をしながら答えた。

第五天の天使長サンダルフォンの部下で、マオン権天使のアフィエル
だけど？

何か、とつてもマニアックな解答なんですけど？ マオン？ サ
ンダルフォン？ どうかの携帯電話会社か？ プリンなんだってえ？
とツ散らかった資料の山を揃えなおし、ディスプレイに向う。

あ、それはおいおい説明するけど……って、ええええ！？ 何で
伊津留がアフィエルの事知ってるんだよ！？

遅い……遅すぎるよ、シエリ・ルー君。君、反応が鈍いね。やれ
やれ。

会ったんだよ。ま、正確には、脅されたんだけどね。

「よし、とにかく設定いつてるトコまで、気張って書きちまおう」
時計は五時四十分を指している。何とかせねば。

会った？ アフィエルに？ 何か言われただろ？ 変な事言わ
れたろ？

興奮しまくりのシエラを静かにさせると。

お前、野郎の事知ってるみたいだから言うけど、俺がお前の事
『何も聞いてません。ボク、何も知りません』つつって、素直に認
めてくれると思うか？

さすがに、シエラも理解したようだ。そうなのだ。そうせ信じる
ような奴じゃないんだから、こちらが内容を知っていた方が、動き

やすい事だつてあるのだ。

やつとの事で、シェリ・ルーが口を開く。

天から追われた時に、大天使ウリエルに半分に割かれた、俺の半身を捜しに……。

「シェラの半身か……」

俺は呟いて、煙草に火を点けた。

気の遠くなるほど昔、天を追われたシェリ・ルーは、自分の半身を捜し求めて地上を彷徨^{さまよ}っていた。幾度かは見つけ出したらしい。引き裂かれた己の半身を。ある時は樹木に宿り、ある時は岩に封じられ。人として生まれていた事もあったという。

しかし、生きている時間が違い過ぎる。シェラに、厳密な意味での「寿命」は存在しない。目の前で、自分を置いて消えていく“生命”という名の灯火。その度にこいつは、あてもなく地上を流離う。だがその半身の魂も、ここ数百年の間、転生していないのだという。捜し疲れて、中有（あの世とこの世の間）……だとかで休んでいた時に、俺と出会ったらしい。

考えてみりゃ、こいつの人生（天使生……？）淋し過ぎるかもな。

カコツ カコカコ カカカコツ カコツ

単調なキーボードのクリック音に乗せて、俺の思考が流れていく。

恋慕と嫉妬の狭間（前書き）

忘れていたはずの心の痛み。

どうして、お前の隣にいるのは俺じゃないんだ！？

恋慕と嫉妬の狭間

トゥツ……トゥルルルツ　トゥルルルツ……

静かな空間を電話の呼び出し音が鋭く切り裂く。夜間モードなので音は控えめだが、俺の考え事を中断させ、驚かせるには十分だ。誰だ？　こんな非常識な時間に電話なんぞしてくる無礼な奴は？

ハッ、ま、まさか、担当様ではあるまいか？

「はい、萌木です」

「」

をい！　こんな時間にイタズラ電話ぢゃねーだーろーなー？

「もしもし？」

「伊津っちゃん？」

棘を含んだ俺に言葉に、受話器の向こうから、消えてしまいそうな返事があつた。この声は……この呼び方は……。

「もしもし？　美緒？　ネコちゃんか？」

頭の中に女友達の顔が浮かんた。

「どうしよお、伊津っちゃん。助けてよお。もう、分かんないよお
お」

本橋美緒。俺の中学校時代の片思いの相手である。

「どうしたんだよ？　落ち着いて話してみる。今、どこにいるんだ
？」

電話の向こうで、彼女の細い鳴き声が聞こえる。

「今、今ね。××総合病院にいるの。どうしよ。一人が、一人が
死んじやうう」

上で、シェラの起きた気配がする。

「病院？　ひとりか？　泣いてちゃ分かんないだろ？　とにかく、
そこにいろ。今から行くから。××総合病院だな？」

シェラが不安そうに見つめる中、彼女がうなずいているのが伝わる。電話を切ると、シェラを振り返る。

「悪い。病院行ってくる。事と次第によっちゃ、彼女連れてくるから。何か軽いモン作つといてくれるか？」

「大丈夫か？ お前、徹夜明けだろ？ ついて行こうか？」

「ん、大丈夫だ」

すっかり冷たくなってしまうたジャケットに腕を通すと、財布と煙草を突っ込んで車のキーを取り上げる。

普段、移動にはバイクを使っていたのだが、例の事故でおしゃかにしてからは、車を使っている。どっちにしたって、美緒を乗せてくるんだつたら、バイクじゃ無理だし。

「じゃ、行ってくるから」

慌しくドアを閉めると、駐車場へ向う。

倉田一人。通称ひとり美緒の婚約者で、来年の春には挙式予定だ。そして、その事を考えるといまだに胸が痛む。忘れられない自分がいる。

まだまだ空いている道路に、ヘッドライトの反射が白々として、俺の気持ちを逸らせる。ステアリングをきる手が震える。煙草に火を点けて、深く吸い込む。

落ち着け、落ち着け。俺が事故つたら意味がない。落ち着いてくそっ！

××総合病院は、事故つた俺が目覚めた場所だ。エンジンを切るのももどかしく、病院内へ駆け込む。待合室の椅子に腰掛けていた女性が、俺の足音にパツと顔を上げた。美緒だ。

「来てくれたんだ、伊津っちゃん」

真っ赤に目を腫らした美緒がしがみついてくる。明るくて、クルクルと表情の変わるその顔は、今はやつれて血の気が無い。

「ひとりは？」

震える肩を抱きしめながら、美緒に尋ねる。

「今、手術中なの。伊津っちゃん、一人が死んじゃったら私、どうしょお」

不安気な瞳が見上げてくる。俺は自分の胸に美緒の顔を押し付け

ると、そつと髪を撫でた。棘が刺さったままの胸に。

お前は俺の胸の中で、奴の心配をする、俺の胸で泣きながら、他の男の名前を呼ぶんだ。俺の心のどこかに、昏い炎が灯ったような気がした。「嫉妬」という名の炎が。

言葉にならなかつた想い。告げられずに終わった恋。「好きだ」と言えずに、彼女の前から去ったのは俺。逃げ出したのは俺の方だ。俺に二人の事をとやかく言う権利は無い。

諦められた、と 忘れられたと思っていたのだ。今までは。

だが、現実は何？ こんなにも、彼女が愛しい。こんな状況でなければ、俺は躊躇わずに美緒をかつさらっていただろう。

なぜ奴なんだ？ 筋違いだとは思う。逃げ出したのは、自分なのに。だけど止まらない。止められない。なぜ？ なぜ、俺ではなく、お前の隣にいるのは奴なんだ！？

「伊津つちゃ ん？」

黙り込んでしまった俺を美緒が覗き込んでいる。

「あ、ああ。何でもない」

彼女の肩に手をかけながら、手術室へと向う。今は美緒に顔を見られたくない。恐らく俺は、とても醜い顔をしている。最高に浅ましい顔をしているはずだ。そんな顔を、彼女にだけは見られたくない。

「一体、何だつてひとりか？」

「先生の話では、大型の動物に襲われたんだろうつて。私もまだ、一人に会ってないの」

夜中に連絡をもらって駆け付けた時には、もうすでに手術は始まっていたのだと言う。

倉田家の家族は来ていない。彼の両親は、一人が高校生の時に、事故で亡くなっている。親戚は、北海道に伯父夫婦がいるだけだと聞いたことがある。

自分だけで、手術が終わるのを待っていた美緒は、消える気配のない「手術中」のランプに耐え切れず、俺の所に電話を入れてきた

のだ。

何を話すでもなく、病院に着いてから一時間が経過した。

“大型の動物”による怪我。思い当たるのは、あの“妖獣”しかない。だとしたら、もう動ける程に回復したというのか？ 信じられない回復力だ。そんな奴を滅ぼす事は可能なのか？

不幸にも一人は、その復帰第一号の犠牲者になってしまった訳だ。うつむいて考え込んでいた俺は、横に座っていた美緒の緊張した気配に、顔を上げた。「手術中」のランプが消えている。

やがて扉が開くと、ストレッチャーに乗せられた一人が運び出される。

「あ、かず……ひと」

追いかけて行こうとする美緒を押し止めると、出てきた医者に礼を言い、手早く事情を説明して容体を尋ねる。

「発見が早かったのが幸いしたようです。大型肉食獣の爪と牙のように鋭利な刃物で背中を数ヶ所、挟えくられていますし、脇腹には内臓にまで達する傷もありましたが、生命は取り留めました」

今まで“妖獣”に襲われて助かった者は、皆無である。まだ、本調子ではないのか？ だとしたら、本当に運が良かったな、一人。いや、こんな目に遭ってしまつて、運が悪かったと言うべきか……。

今後の治療とリハビリについて簡単に説明を受け、何かあった時のために名刺を渡す。再度、礼を述べると、所在無げに立っている美緒の腕を引つ張つて歩き出す。

「ち、ちよつと、伊津つちゃん？ 私、一人の所に行かなくちゃ

」

ゴチャゴチャ言っている美緒に、

「もう、俺達ができる事はねえぞ。病室はちゃんと聞いたし、面会謝絶だ。ついでに言うなら、ここは完全介護だしな」

美緒が恨めしそうな顔をして俺を見る。

「駄目だ。お前も休まなくちゃ、倒れちまうよ。ひとりの意識が戻った時に、お前が倒れたなんてバレたら、あいつ、這つてでも俺の

事殴りに来るぞ」

心の裡を隠しながら、もっともらしい事を言つてのける、お前が一人の側にいるのが、嫌なんだよ！

「俺んトコの同居人が、メシ作つて待つてるからさ。何かあったらうちに連絡が来るように、先生にも話しつけたし。ネコの家にも連絡しとかねえと、心配してんぞ」

俺の言葉に微笑みながら、美緒が答える。

「変わつてないね、伊津っちゃん、中学の時から、女の子には優しくかつたんだよね」

バカ。女の子に優しくかつたんじゃねえ。俺は、美緒、お前にだけ優しくしたかつたんだ。

美緒の手を握つたまま、愛車へ向う。

時計を見ると、そろそろ八時になろうかというところだ。

「んあ、行こうか」

車の増え始めた道を走り出す。

「ありがとね、伊津っちゃん。誰かに助けてもらいたいと思った時、伊津っちゃんしか思い浮かばなかったの」

信号待ちの間に美緒が呟く。

「伊津っちゃんには迷惑だったかも知れないけど、私、伊津っちゃんがいてくれて、すごく助かったから」

うつむいている彼女の頭をポンと叩くと、アクセルを踏み込んでいく。

「覚えててくれて、嬉しいよ」

アパートの裏の駐車場に車を止めると、美緒を部屋へ案内する。

「あ、そうだ。今のうちに言っとくけど、うちの同居人、壮絶に顔が良いんだわ。あんまし、まともに見ないほうがいいぞ」

とりあえず、警告だけはしておく。

「え？　もしかして、伊津っちゃんの彼女？　だったら悪いなあ」
ちっがあ　うつっ！　断じて、そんなんじゃないっつ　と思

いたい（こら！）。

まあ、他の事に気が回るようになっただけ、良しとおかうか。

「……ただいま」

ドアを開けて、美緒を促す。

「あ、お帰りい」

奥からシエラが返事をする。

「ん。彼女が、本橋美緒。俺の中学時代の同級生。んで、コッチが
おい？」

顔を出したシエラにペコリとお辞儀をして、顔を上げた美緒の動きが停止した。

「もしもし？ 美緒？」

最悪の状況を想像しながら、呼びかける。ギギギと音がしそうな動作で、美緒がゆっくりと振り返った。

「伊津っちゃんって、ゲイだったんだ……？」

だああああああ！！ 違うって言ってるんだろおおっ！！

無自覚の醜さと自覚した醜さ（前書き）

俺は何を望んでいるのだろうか？

何を願ったのだろうか？

自覚しなかった自分の弱さと、知ってしまった自分の醜さ……。

無自覚の醜さと自覚した醜さ

「そうそう、よろしくね。俺、伊津留の『彼女』で、シエリ・ルー
って言います」

だあああああ　　！

頭を抱える俺をよそに、ニコパツと笑ったシエラが答えている。
くおらあつ！　お前ら楽しいか？　俺をからかって、そんなに楽
しいか？

俺の全身から立ち昇る殺気に反応したのか、慌ててシエラが手を
振った。

「とまあ、冗談は置いといて。お腹空いてない？　サンドイッチと
コーンスープ出来てるから、一緒に。ね？」

そうだよ。玄関先で漫才やってる場合じゃないだろ？

ようやく部屋に上がり、ソファーに美緒を座らせて電話の子機を
持ってくる。

「先に電話しちゃいなよ。俺ン家にいるって、言っていないから」

「うん」

子機を手に取ると、自宅の番号をプッシュする。

ピポ　パ　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル

「あ、もしもし？　お母さん？　うん、あたし。今、伊津っちゃん
の所」

美緒や一人は、学生時代よくうちの実家に遊びに来た。彼女の両
親も、俺の事は良く知っている。

「あのね、お母さんが代わってって」

彼女から子機を受け取ると

「もしもし、萌木です。ご無沙汰しております。　　ええ。今回は、

大変な事に　　」

医者から説明された事を、手短に伝える。うちで朝食を摂り、少
し休ませてから帰宅させると言くと、よろしく願いしますと返事

があり、電話は切れた。

子機を元の場所に戻すと、シェラが温め直してくれたコーンポタージユの鍋を持ってくる。マグカップに注ぎ分け美緒に渡すと、彼女は両手で包んで、ホウツと息をついた。

俺がサンドイッチに手を伸ばすと、すかさずシェラに手の甲をはたかれた。

「だめ。お客さんが先でしょう」

皿を美緒の方へ押しやる。

えーっ。俺も腹減ってるんですけど。ぶーぶー。

「伊津留は、おにぎり食べたでしょ？」

食ったけどおお。でもおお。

「本橋さんは、何も食べてないんだよ」

うっ。はい、分かりました。

俺達のやり取りを見ていた美緒が、堪らずにクスクス笑い出した。笑うゆとりが出てきたのは有り難い事だが、笑われた俺の立場がな
い……。

まあ、しかし。気分もほぐれたのか、シェラの作ったサンドイッチを食べ終わると、美緒はソファアの上でうつらうつらし始めた。緊張が解けて、疲れが一気に出たのだろう。

「ほら、ココにクッションあるから。いいから、横になって。少し眠っとけ。後で送って行つてやるから」

起きていようとする彼女を無理やり寝かしつけ、毛布をかけてやる。すぐに規則正しい寝息が聞こえてくる。

「まあ、当たり前だけど、よっぱど気を張ってたんだな」

シェラを手伝って食器類をキッチンへ運ぶ。たまにはやらないとね、手伝い。

「そうだな。そういう伊津留も疲れてんじゃないのか？ 徹夜明けでバタバタして」

「ん、まあな」

美緒をリビングで寝かしちまったからな。仕事の続きが出来んの

よ。

「今のうちに、お前も少し休んどけよ。それで車に乗ったら、確実に事故るぞ」

うむ。少々、頭がボーっとしている。もう二度と事故りたくないからな。ここは、お言葉に甘えさせていたどころ。

「んじゃ、悪い。上で少し眠らせてもらうわ。美緒が起きたら、起こしてくれよ」

自分で思っていたのより、はるかに疲れていたようだ。ロフトに上がり、シエラの布団にもぐり込むと、そのままストーンと眠りに落ちてしまった。

フツと何かの気配で眼を開く。視界が真っ白だ。俺はたった一人で、真っ白な霧の中に立っている。

“夢か？”

ぐるりと周りを眺め回す。何の変化もない。仕方ないな。少し動いてみよう。

特にこれといった方向もない。適当な方へ向って歩き出した。

“おいおいおい。俺ってば、また死に掛けてるんじゃないーなー？”

以前「死に掛けた」時と状況が良く似ている。

“勘弁してくれよお。あんな体験、一回やりゃあ上等だぜ”

身体にまとわり付く霧を掻き分けながら歩いていくと、不意に人影が出現する。

“美緒か……”

乳白色の闇の中に浮かび上がったのは、微笑んでいる美緒の姿。

“あのね、伊津っちゃん”

世にも幸せそうな笑顔で俺を呼ぶ。両手を広げて俺が一步を踏み出した瞬間。

“私ね、結婚するの。伊津っちゃんには、一番に知らせたくて”

俺の身体が凍りついた。

一点の邪気もない笑顔。彼女は弾む足取りで、俺の横を通り過ぎる。

“美緒！”

無理やり振り返ると、そこには一人が立っている。そして、その腕を抱いて幸せそうに笑っている美緒。

“伊津っちゃん、私、幸せになるから”

“悪いな、伊津留。俺のほうに先に結婚するらしい。こいつの事、幸せにしたいんだ”

そう。過去に見た光景を、俺は追体験しているんだ。

あの時、俺は二人に「おめでとう」と言った。でも、その言葉の裏に隠されていた思いは？

“嫌だ！”

叫びが口を突いて出た。

“行くな、美緒。ここにいろ。俺の所にいてくれ！ 美緒っ！”

振り返った美緒が残酷な言葉を口にする。

“だって、伊津っちゃん、何も言ってくれなかったじゃない”

“伊津留。美緒はお前じゃない、俺を選んだんだ。諦めろよ”

一人の言葉が、俺の理性を引き裂いた。

“嘘だ！ 違う！ 行くな、美緒！”

言葉が意味を成さない。一人が美緒の肩を抱いて遠ざかっていく。

“離せっ！ 俺のだ 美緒は俺のモンだ！ その手を離せ！”

届かない。どんなに叫んでも、美緒には届かない。彼女が選んだのは俺じゃない。ならば、いつそ いつそ奴がいなくなってしまうば……。

ソウ。奴ガイナクナッテシマエバ。

別の声が俺の思考にかぶさってくる。

何ヲ悩ム必要ガアル？

才前ノ欲シイ物ヲ、手ヲ伸バシテ取レバイイ。誰モガヤツテイ
ルコトダ。

誰モが……手を伸ばして……。

欲シクハナイノカ？ 欲しいとも。

悔シイダロウ？ 悔しいさ。

ナラバ…… ならば……？

その瞬間、鋭い痛みと景気のいい破裂音がして、ポカッと眼が覚めた。

目の前にシエラの顔がある。あ、起こしてくれたのか。ん？ でも。

シエリ・ルーの右手はまるで誰かをひっぱたいたかのように、奴の顔の前に掲げられ、俺の左頬は熱を帯びてジンジン痛みを訴えている。

どうやらコノヤロは、俺の事をひっぱたいて起こしたらしい。

「伊津留？」

そのままの姿勢で、シエラが口を開く。

「何だよ？」

思いつきり不機嫌に返事をする。

「目え、覚めたか？」

「くらあ！ ひっぱたいという『目え、覚めたか？』はねーだろー、フツー！」

くそつ！ ヒリヒリする頬に手を当てて起き上がる。そんな俺を見て、シエラが大きく息をついた。

はしごを降りるためにシエラを促すと、奴が俺の腕をつかんで声をひそめた。

「お前、どんな夢を見てたのか知らないけど、連中の言う事に耳を貸すなよ。いつも俺がフォローしてやれるとは限らないんだ」

その言葉にギクリとする。

「ち、ちよつと待てよ。その『連中』ってのは何なんだよ？ 訳わかんねーぞ」

シエラは俺が夢見たのを知っている。俺は何を思った？ 何を願った？ その『夢』の中で？

「そう。その『連中』だよ。奴等は、人の心の隙間に入り込む。そ

うやって、人間の『負の感情』を喰ってデカくなるんだ。お前の夢の中に入り込んでいたのは、あの“妖獣”の一部だ」

げろっ！ 何と！？

「彼女を送っていったら、詳しく話してやる。とにかく、自分の心に隙を作るな。伊津留、お前は自分が思っているよりも、精神的に強いんだ。よっぽど心が乱れていない限り、奴等はお前に手が出せない。いいな？」

こくこくこく。 。 らじゃーです。ただ、首を縦に振るばかりである。

かなりスッキリした顔で起きていた美緒を、安全運転で実家へ送り届ける。せめてお茶でも、という美緒のお母様のお誘いを丁重にお断り申し上げ、俺は自宅へと急ぐ。

シエラに聞きたい事が沢山あった。伝えておきたい事が沢山あった。

俺の「負の感情」 それは一人に対する「嫉妬」以外の何者でもない。

どこか俺の目の届かない場所で、ヤツが嘲笑っている気がする。所詮、お前も人間なんだと。どんなに気取って見せても、結局は自分が一番可愛いんだと。

駐車場に車を入れると、身体を引きずるようにして部屋へ向う。

「たあだいまあ」

今日一日は始まったばかりだと言うのに、すでに疲れ切っている俺は、一体何者？

ポテポテとリビングへ入る。シエラの返事はない。普段なら少しは変だと思うのだが、今の俺に、通常の思考は望むべくもない。

「おーい。帰ったぞ……」

「お早いお帰りだな。邪魔しているぞ」

俺は言葉を失った。

悪夢の記憶（前書き）

どうして自分は「人間」を襲うのか？
この世界へどうやって降り立ったのか？「彼」は記憶を辿り始める。

悪夢の記憶

初めて、獲物を逃した。まだ体調が万全ではないらしい。彼は不機嫌そうに唸り声をあげた。

方法を変えなくてはいけないかも知れない。これまでのように、闇雲に人間を襲う事は難しくなる可能性がある。あの二人のような人間が現れないとも限らない。

彼は猛烈に考えていた。

「狩り」には「知恵」が必要だ。それには「学習」しなくてはなるまい。いままでは力づくで、どうにか出来た。力の弱いもの、年取いたもの、正気を失っていたもの、不意を狙ったもの。でも、それだけでは、駄目かもしれない。現に、今回は逃げられている。

そもそも、自分はなぜ人間を襲うのか？ 勿論、食すためである。と、彼の本能が告げる。だが、それ以外に何かあったはずだ。何か、大切な事が……。

彼は闇の中にうずくまって、初めて「自分」について考えている。どうやって、この雑多な世界へやってきたのか？

「自分」と言う存在は、一体何なのか？

彼は自分の記憶の中を遡ってみた。

まず最初に思い出されるのは、炎と煙が絶え間なく立ち込める平原。荒涼としていて、水もない。生きて動くもののない世界。想像できないくらい広い大地は、深い亀裂に覆われ、巨大な火柱が立ち上る。

鎖に繋がれた手足。視界を遮る牢獄の檻。

自分だけではなく、そこかしこに同じような牢獄があった。

いつが夜明けなのか夜なのか。それ以前に空があるのかすら分からない世界。

遙か彼方、南の方角からは何者かの歌う声が風に乗って聞こえてくるが、時に沈黙して業火の燃え上がる音だけが耳を振るわせる。

無機質な顔をした巨大な者達が、自分と同じように囚われている事だけは見て取れた。

次に思い出すのは、魂の自由。繋がれていた鎖を断ち切り、堅牢であるはずの檻を抜け出し、自由に虚空を駆け回る。

そして追っ手。檻を抜け出した自分を追い、何者かがやってくる。囚われれば、再びあの檻へ連れ戻されるのだ。……いや、今度はもっと酷いことになるかもしれない。

とにかく逃げるのだ。奴らの手の届かない場所へ。

そうして逃げて逃げて。「彼」はどこかへ辿り着いたのだ。それが「どこ」なのかは分からない。でも、温かくて優しくて。「彼」が今までに経験した事のない安らぎがそこにはあった。

魂の脈動を刻む鼓動。それに合わせて全身を巡る熱い血流。「実体」を持たなかった「彼」にとって、全てが新鮮な出来事だった。

やがて来る苦痛。全身がよじれるような痛み。温かな、安心できる場所から引き離される不安。失いたくない焦燥と、新たな世界に対する期待が入り混じった、何とも形容しがたい気持ち。

次の瞬間、「彼」が感じたのは光。眩しいほどに溢れる光。文字通り、生まれて初めて浴びた光は、「彼」を惜しげもなく照らしていた。

その身に触れる柔らかな毛並み。優しく慈しむ抱擁。「彼」にとって、味わった事のない至福のとき。この一瞬のためなら、魂が束縛される不自由も甘受する価値があると思った。

それから訪れたのは出会い。どういう経緯だったのは忘れてしまった。とにかく、冷たい雨に濡れて、心細くて、寂しかった。

自分を暖めてくれる者なら、誰でも良かった。でも、その出会いは「彼」にとって運命。

濡ればそった「彼」を静かに抱き上げ、震える身体をそっと拭いてくれたのは……。

誰だっただろう？ とても大事な事なのに、思い出せなくてイライラする。ぼんやりと記憶の中に浮かび上がるその人物は、とても

優しかった気がする。自分を大切にしてくれた。自分も大切にしたいと思った。人間なのに？ 自分は人を喰う。なのに、どうして大切に感じるのだろう？ その矛盾が解消されない。

ただ、思い出せることがある。その「大切な人間」を、「彼」は失ってしまったのだ。その人間は、「彼」を置いて逝ってしまった。この雑多な世界に「彼」を一人で置いたまま。

そうだ！ 自分からあの優しかった人間を奪い去った連中に復讐するために、自分は「狩り」を始めたのだ。「彼」の大切な人間を奪い去った連中。助けようともしなかった連中。

だから「彼」は人間への殺戮を心に誓ったのだ。
それさえ分かれば、それでいい。

これで心おきなく殺戮を続けられる。まだ「狩り」は始まったばかりだ。自分の身内に巢食う、この虚無は殺す事によってしか埋められない。いや、埋まらないかもしれない。それでもいいのだ。「彼」から喜びの全てを奪った、「人」という名の種族に復讐するためには、身内に虚無を飼っていたほうが都合がいい。常に飢えていなければ、「狩り」は続けられないのだから。

それが思い出せば、後は体力を取り戻すだけだ。早く回復すれば、それだけ早く復讐を開始できる。

今は眠ろう。休む事によって、力を取り戻すのだ。
そして、「狩り」を続けよう。

悪夢の正体と天使の誤算（前書き）

部屋へ戻った俺を待っていたのは、この世で一番見たくない顔、ア
リエルだった。

この高飛車天使が明かす妖獣の正体。

そして自信満々な奴が、予想だになかった誤算とは？

悪夢の正体と天使の誤算

テーブルに肘をついて不機嫌丸出しのシェリ・ルーと、窓辺に立って腕を組み、無表情にこちらを見ている野郎。

「なあ、おい、シェラ君よ」

「何だね、伊津留君」

ぶっきらぼうに返ってくる言葉。ああ、良かった。反応がある。

「もしかして俺ってば、幻覚か何か見えてんじゃないかしら？」

「ほほう、奇遇だねえ。実は俺にも見えてんだよ。で、一体どんな幻覚だ？」

話しているうちに、徐々に余裕が戻ってくる。

「頭あ、金髪だよ。こう、モデルみたいにナナメにカットしててよ」

「目玉が緑色か？ やたらと陰険で、目つきの悪い」

「そうそう。えらく態度のデカイ」

言いたい放題である。それもそのはず。今の俺達二人が絶対に会いたくない人物が、部屋の中にいるのだ。

ちよつとやそつとの悪口なんざ、笑って聞き流すくらいの余裕がねえなら、初めっから来なきやいいのさ！

「んで、その幻は一体全体、何にし現れやがったんだ？」

「何か話があるんだとさ」

やつと話の流れが本題へ向ってきた。その問題の人物　アフィエルはと言えば、平静を取り繕ってはいるものの、引きつった口元と額に浮かんだ青筋はごまかしようがない。

「で、何の用だよアフィエルさん？　人の留守中に勝手に家に上がりこむなんざ、あんまりホメラレタもんじゃないぜ」

「ふん。お前達が“妖獣”と呼んでいるアレの事についてな」

相変わらず、タカビーな野郎だ。まるで六本木ヒルズの屋上から、俺達の事を見下ろしてるみたいに話しやがる。

「ほうん。そりやまた、ご親切につ。あ、シェラ。コーヒー淹れて

くんね？ 無駄に緊張したら、喉渇いちったよ」

「ん、OK」

立ち上がったシェラがキッチンへ消えると、食器の触れ合う音が聞こえてくる。

俺はおもむろに煙草に火を点けると、

「で、話して何だよ。こつとも、これで色々忙しいんだ。サクサク済ませてくれよ」

灰皿を引き寄せて、無愛想な声を出す。

「お前達が“妖獣”と呼んでいる、あの生き物について何を、どれだけ知っている？」

シェラがトレイを持って戻ってくる。

「別に。やたらと図体がでかくて、シツポが蛇んなってて、泣きが入るくらいタフで、あつちやこつちやで人間喰い散らかしてる事くらいしか知らねえよ」

バカシェラ。こんな奴の分まで、持ってきてやることないんだよ。「シェリ・ルーよ。お前なら、もう少しまともな答えが出来るんじゃないのか？」

あ、テメー。俺の事、馬鹿にしゃがったな、くらっ！

俺の隣に置かれていたクツシヨンに座り込むと、マグカップを口に運びながらシェラが答えた。

「第三天サグンの北の地獄、ゲヘナから逃げ出した妖獣・幻獣の魂だろう」んだ、そりゃ？ しかし、顔中を「？」マークで一杯にしている俺を一顧だにせず、アフィエルはコーヒーを口にする。

「あんな、伊津留。人間が言う“天”てのはさ、七つの階層に分かれているんだ。その、下から数えて三番目にあたる天が『第三天・サグン』。で、このサグンの北には『ゲヘナ』と呼ばれる地獄があつて、岩と氷と炎とで閉ざされた大地しかない。ここに捕らえられた魂を繋いで、天使達が罰するんだ」

「じゃ、何か？ あの妖獣は元々、その……第三天？ に繋がれていた奴が、鎖かなんかを引き千切って逃げ出したと」

俺の問いに、コックリとうなずきながらコーヒーを飲むシエラ。

「頭の悪い人間のお前にも、どうやら理解できたようだな。事がどれだけ重大かが」

ブチッ。

あら、切れちゃった。右手が勝手に動く。手元にあつた雑誌を、アフィエルめがけて投げつける。

バサバサバサ　バツ、バサササ。

俺の投げつけた雑誌を片手で叩き落したアフィエルは、物凄い目付きで俺をにらみつけてきた。

「何をするっ！」

「『何をするっ！』じゃねーよ、このタワケ者が。つまるところ、お前等の管理不行き届きで逃げ出した化けモンが、俺達に迷惑かけてんじゃねえかよ。こんな場所でボケボケ茶あなんぞ飲んでる場合か？ さつさどどこにかしやがれ、大馬鹿野郎！」

心底怒り狂っている俺の言葉に

「何とかしろだと？　フン、下衆^{けず}が。貴様等、自分達の立場をわきまえてから物を言え。あの妖獣によって薄汚い人間が滅ぼされたからと言って、我等にしてみれば、痛くも痒くもないわ」

アフィエルは傲然と言い放つ。

「テメー、仮にも天使のくせして、そおんな事言っていいいんかよ！？」

俺は世の一般常識というモノを甘く見ていたらしい事を、痛切に思い知らされる事になる。

「何か勘違いしているらしいな。我等にとって人間など、どうでも良い存在なのだ」

少しも動じてないよ、コイツ。

「天使が人間を守護しているだと？　思い違いも甚^{はなは}だしい。馬鹿馬鹿しいにも程がある」

え？　そうなの？　そういうモンなの？

ちよつとばかり氣勢を殺^そがれちゃって、俺はシエラの方を向いた。

「アフィエルの言う事も、ある意味、真実なんだ。信じられないかもしれないけどな」

ほんの少し寂しそうな表情をして、シェリ・ルーが答えた。

「だってよ、『人間』てのは、『神』が創造したんだろ？ 何でだよ？」

初めに神は、天と地とを創造された。

そう。神は初源の七日間に六日目、土くれから『人間』を創り出したはず。自分の勝手で俺達『人間』を創っておきながら、その責任はとらないってのかよ？

「愚かな戯言を信じる者どもよ。我等が真実、父なる神と共に拝するは、高貴なる『初源の人』アダム・カドモンただお一人。墮落したイヴの末裔たる女の胎から生まれた『人間』など、汚らしい限りだ」

オメーよお。今の台詞、女性人権擁護団体のおばちゃん達の前でも一回言ってみろ。

しかし俺は、アフィエルの言葉を聞きながら、もう一つの神話を思い出していた。

その昔。神は天使達を創造し、神以外の何者をも拝するな、と告げた。

やがて神は、『初源の人』アダム・カドモンを創造する。『彼』が天使達よりも高位であると考えた神は、先の命令を忘れて新しい被造物に服するように命じた。

しかし神以外に首を垂れる事を良しとしなかった天使達は、こう言って神の命令を拒んだ。

「いかにして炎の子が、土くれの子を拝せようか」

その結果、天界の三分の一の天使達が闇の深淵へと堕ちて行く事になったのである。

「墮天使」についての、あまり知られていない、もう一つの「真実」である。

深く神を愛したが故に、最愛の神によって天上を追われた天使達。

「つたく、この「神」って奴はよお……」。

「で、お前の用件は何なんだ？ お前等の言う所の汚らしい地上まで、わざわざ聖書の講釈をしに来たわけでもあるまいに」

そうそう。初めは“妖獣”の話をしてたんだった。

「どうせお前の事だ。逃げ出した妖獣の魂を捕らえて来い、とか言われたんだろが」

シェリ・ルーの一言に、アフィエルがなんとも嫌そうな顔をする。どうやら、凶星らしい。

「その通りだ。サンダルフォン様のご指示で、あの魂を第三天に取れ戻すように言われている。初めは、簡単に見つけられるはずだったのだ。痕跡も残っていたからな」

“はず”や“つもり”で渡っていきるほど、世の中そんなに甘くない。「締め切りまでには、上がるはずだったんです」とか「こんなにかかるつもりじゃなかったんです」とか言っても、担当さんに許してもらえない、この俺が言うんだから間違いない。

あれ？ 何か違う……。

「それで？ “つもり”と“はず”が、どうしたって？」

頭を抱えてしまった俺をさりげなく見ながら、シェラは冷たく先を促す。こいつって、敵に回すと、かなりヤな奴かも。

「しばらくの間は、順調に痕跡を追うことができた。ただあいつの気配さえ追っていけば良かったんだからな。ところが、途中でその気配が消えてしまった」

ゆっくりとコーヒーを飲み干して、カップを手の中でクルクルと回す。やめるよお、そのカップ高かったんだからな。

苦虫を（どんな虫なのか、幼少の頃からの謎である）まとめて数十匹、噛み潰したような渋面でアフィエルが続けた。 んむ。いい気味だ。

「妖獣の魂が、人間の中に紛れ込んでしまった。 いや、そうではないな。妖獣の奴の魂と人間の魂が融合してしまったらしい。おかげで、こちらは後手後手に回らざるを得ない」

第三天とやらから逃げ出した妖獣　　ディーガというらしい

の魂は、まず何らかの「器」を手に入れたようだ。ここいら辺は他の魂と同じく、この世界の法則に従がったらしい。すなわち、「器」を持たない魂は、長くこの世に留まる事が出来ない。

アフィエル達“天使”は、たとえディーガが肉体を持ったとしても、追跡には何ら支障はなかったらしい。「器」である肉体の特徴ではなく、ディーガの「妖獣」としての気配で追跡していたというのだから。しかし、そこで問題が起こり、ディーガの気配は完全に人間のモノと融合してしまったようなのだ。天使達に言わせると、人間の気配と言うのは不安定でまとまりがなく、雑多でうつつしいものなんだそうだ。ヨケーなお世話だったの、大馬鹿野郎！

「つまりは、逃げられた魂を連れ戻す事はおるか、見つけ出すことも出来ないでいるって訳か」

相棒の鋭い突っ込みに、奴は世にも渋い顔でどつか別の方向を向いている。シエラは残ったコーヒーを飲み干して、先を促す。

「それで？」

をい。ここまで聞いたなら、いっかな鈍い俺でさえ、こいつの言わんとしている事は想像できるぞ。けど、シエリ・ルーはアフィエル自身に言わせたいようだったし、奴が困るのは俺も大歓迎なので、そのまま沈黙を守っていた。俺もケツコー、人が悪い。

「私もこれで、地上の事には詳しいつもりだ。もちろん、他の天使達に比べてと言う意味だが。しかし、永の歲月、地を流れていたお前であれば、我等には眼の届かない小さな場所まで入り込めるだろう。いかがわしい、下等な友人も多いそうだからな」

いちいち、嫌味な野郎だ……。

苦虫がもう百匹程追加されたような表情で、それでも必死に体面を取り繕いながら

「墮天使シエリ・ルーよ。妖獣・ディーガを捕らえて見せよ。見事成功したならば、お前の帰天をサンダルフォン様に取り成してやつても良い」

くおら、このガキ！（天使の年齢なんて知るかよ！）人にモノを頼む時に使う文法ぢやねえだろうが、それはよっ！

シェラツ！ テメーも黙つとらんで、なんとか言うたれ！ ガツンと！

「別に。お前に頭を下げたまで、戻りたい場所ではないな」

うーし、良く言った。ひとり会心の笑みをたたえる俺に反し、相棒の言葉に呆然とした顔になるアフィエル。

「天に帰る気がないと言うのか？ 何をたわけた事を言っているのだ。我等『天使』にとって、帰天本能は何よりも優先されるものだぞ。それを……」

「帰天本能」？ あんだ、そりゃ？ 後から聞いた話によると、動物に「帰巢本能」があるように、天使にも「帰天本能」というものがあるらしい。人間が持つている「睡眠」「食欲」「闘争」などの諸々の「本能」の中で「生存本能」が優先されるように、天使にとって「帰天本能」とは、全てにおいて優先されるべきモノなのだそうだ。

その本能を否定されたんだから、驚いて当然だろう。

「戻ったからといって、何が変わる訳でもなし。所詮、俺は『アズラエル』だからな」

よつぽど、ロクな事なかったんだな。それに、半身を探し出さなといけないわけだし。

「私の申し出を断る、というのだな？」

申し出？ はい？ 押し付けじゃなくて？

言葉は正しく使いましょね、アフィエル君。

断られるとは、思っても見なかったのだろう。顔色を失くしているアフィエルは、傍から見ていておかしくなるくらい、動揺していた。

「ああ。お前の申し出は断らせてもらう。だが妖獣の件は話が別だ。これ以上の被害を出さないために、そして何より、奴が罪を重ねないために。お前に言われる以前から、俺達は奴を追いかけている」

シェリ・ルーの言葉に、アフィエルは複雑な顔をする。

「結局は引き受けるのではないか。それならば最初から素直に」

「勘違いするな、アフィエル。天の意志とは関係ない。これは俺や伊津留、地上に暮らす者のためだ」

「何とでも言うが良いさ。私達、天に属する者にとって、ディーガが捕縛されればそれで良い。奴の魂がサグンの牢に戻れば、それで良いのだ。私はこのまま天に戻り、サンダルフォン様に事の次第を伝えなければならない。後の事はお前に任せる。しっかりと働けよ」
「なけなしの威厳をかき集めると、マントのように全身にしっかりと巻き付け、アフィエルは高飛車に吐き捨てた。　　が、さっきよりも勢いがないように感じるのは、俺の気のせいではないはずだ。」

先ほどのシェラの発言によって、奴の鉄面皮にヒビが入った事は間違いない。ざまあみろってんだ。この超高層ビル男め。さっさと天でもどこでも帰れってんだ。

「用件は済んだか？　　だったら、さっさと帰ってくれ。俺は疲れてんだ」

そっけなく言うと、洗面所へ向かい顔を洗う。嘘でも方便でもなく、マジで俺は疲れてんだ。自分の気持ちだって整理しなくちゃいけないのに、今はアフィエルの倣岸な態度に付き合っている余裕はない。

リビングに戻ると、高飛車天使の姿はすでになかった。ああ、精神衛生上よろしくなかったわい。

シェラが淹れ直してくれたコーヒーを、今度はゆっくりと味わって飲む。一日分にしては十分過ぎる程の出来事が、怒涛の勢いで襲い掛かってきた感じた。

美緒を送って戻ってきたら、シェリ・ルーと詳しい話をするつもりだったんだけど……。何だか、頭の中がぐちゃぐちゃだ。

自分の心の奥に凝っていた闇。一人の存在を疎むほどの嫉妬。それを目の前に突きつけられて、俺はどうしていいのかわからなくなっていた。それなのに、あの馬鹿天使は余計な事ほざいて帰りやが

闇の解析・反撃開始（前書き）

シエラが少しずつ解析していつてくれる俺の中の闇。
そうだ、俺は聖人君子じゃない。

でも、誰かの涙の上にある幸せなんて欲しくない。
待ってる、ディーガ！これから反撃開始だぜ。

闇の解析・反撃開始

「今日は何だか、ドタバタだな。ゆつくりと話をする暇もない」

自分のカップを持ってきたシェラが、俺の前に座る。

「少し話をしようか」

「ん……。いや、お前も何かと大変そうだし」

確かに悩みの種は尽きないけれど、こいつだって色々抱えてんだ。そうそう俺のことばかり言っていては始まらない。

「大丈夫だから。気にすんなよ」

笑いを作って見せた俺に、あきれたような表情でため息をついた。「変に気を使っているのは、お前の方だろ？ 気にしなくていいのは、こっちの台詞だよ。ディーガの方は、真砂がネットワークを使って探してくれているし、何かあったら連絡が来るようになってるから。それに、俺のほうの用事は、少しくらい寄り道したからってどうなるモンでもないしな」

だから話してみるよ。と促されて、俺は自分の胸の奥のモヤモヤを吐き出すことにした。忘れたと思っていた過去も恋。思いがけない再会によって湧き上がる嫉妬心。無自覚に放った呪いの言葉。

「諦めがついたと、自分の中では決着がついたと思っていたんだ。それなのに、美緒と一人の二人に会っただけで揺らぐような決心だったなんて……」

テーブルで頬杖をつきながら俺の話を聞いていたシェリ・ルーは、噛んで含めるように語り始めた。

「それって、そんなに悪い事なのか？ たとえ決着のついた過去の恋でも、好きだった人に出会えば心が動かないか？ ライバルがいれば『いなくなっただけ』と思うのは、普通の事だろう。別に特別な話じゃない。それさえも許せないほど、伊津留は聖人君子なのか？」

「そんな訳じゃないけど……」

そう……だよな。俺ってば、聖人君子じゃない。思いつ切り俗にまみれた、平凡な人間なんだ。シエラの言葉を聞いているうちに、何だか気が楽になってくる。

「伊津留は今でも、本橋さんの事が好きなんだな？」

「ああ。好き　なんだと思う」

この気持ちは本当に「恋」なのか？

それとも、逃げ出してしまった自分に対する、後悔への言い訳なのか？

「彼女を自分のモノにしたいか？　それが、たとえば二人を引き裂き、彼女を傷つけてしまう結果になったとしても」

シエラの言葉に俺はハツとした。俺のこの想いは、彼女の、美緒の気持ちをまったく無視しているんだ。一人の身に何かあったら、美緒はどれだけ傷つくだろう。考えた事もなかった。

「そう……だな。美緒を泣かせてまで、俺のモノにしたい　とは思えないかもな」

心の闇が、少しずつ解きほぐされていく。あれほど苦しかった波が、嘘のように消えていくのが判った。

「シエラ。お前と話して良かったよ。あのままだったら、俺はきっと、美緒を傷つけていた。一人の命が助かった事を喜べねえ、サイテーな野郎になってたさ」

俺の言葉を聞いて、シエラは静かに笑った。

「そりゃあ、良かった」

「実は俺、結構凹んでたんだ。こんなに嫌な奴だったのか、ってね」
大きく伸びをして、息を吐き出す。胸の奥にあった塊が、音を立てて堕ちていった気がした。

「奴と出会えば、誰でもそうなる。人である以上、それは仕方のない事だ」

「？　奴？」

「妖獣、ディーガの事さ。妖獣と言う存在は、いわば負のエネルギーの集合体だ。正と負のエネルギーが微妙なバランスで成り立って

いる人間が、奴と出会えば必ず天秤の皿は負に傾く。これは誰にも止められない。伊津留の場合、その対象が倉田さんと本橋さんに向かってしまったという訳だ」

だから、必要以上に落ち込むことはない。シェリ・ルーはそう言ってくれた。

あの妖獣と出合った後に、俺の意識の奥でざわめいていた声。妬みや憎しみが満ち満ちた囁き。あれらはディーガの負のエネルギーに触発された人々の感情なのだ。自分で経験しているだけに、その闇の深さは人事ではない。

「そもそも、妖獣って何なんだ？ そのあたりの説明がないまま、話が進んで行った気がするんだが」

「ああ、そうか。俺達には、今更だからな」

シェリ・ルーはクツシヨンに座り直すと、改めて語り出した。

「神が“世界”を創造なさった時、この世を美しいもの、清いもののみで満たそうとなさった。そのために、醜いもの、不完全なもの達の居場所がなくなってしまったんだ。神だって、最初から全てを完全に造れた訳じゃない。創造していく過程の中で何かが欠けたり、どこかが歪んだまま生み出されてしまった者達も多くあった」

「ディーガは、その不完全なもののつて訳か」

俺の言葉に軽くうなずき、テーブルの上で両手を組んだ。

「神はその『失敗作』達を消そうとなされたが、それが不可能なことに気が付かれた。一度生み出されてしまった存在は、いかに神といえども消滅させる事は出来なくなっていたんだ。仕方なく神は、それらのものを第三天・サグンへと連れて行かれた。そしてそのまま、地獄の牢獄に繋がれたんだ。『失敗作』が世界を汚さないようにと」

すでに何度も思った事だが まったく、神って奴は……。

「妖獣ディーガは、天地に凝った陰の気を集めて造られた。だから、常に陽の気を求める。つまり、自分にはない正のエネルギーだ。しかしディーガの持つ負のエネルギーは甚大だ。奴に出会えば、誰も

が少なからず持っているマイナスの感情が暴走してしまうんだ」

「なるほど、良く判ったよ」

俺はクッションを抱きかかえて床に転がった。

「なあ、奴をどうにかする手段って、あるのか？」

「さあ。どうだろうな。正直、判らないんだ。今、それを探しているところだな」

俺の問いかけに、返ってきたシェラの答えは、何とも心細いものだった。

「絶対に何かあるはずなんだ。必ず見つけ出してみせる。時に、

伊津留」

「んー？ なにー？」

次の瞬間、俺は世にも恐ろしい言葉を聞いた。

「担当さんから電話、あつたぞ」

「あー！ー！ーっ！！ やべえ！ー！ー！ーっ！！！」

＊＊

その電話が掛かってきたのは、締め切りも過ぎ、何の進展もないままに数日が経過した頃だった。

「もしもし？」

「あ、もしもし伊津留さんですか？ 俺、匠です。って、判りますかねえ？」

電話の主が判らず、俺が「あー」とか「うー」とか言っていると、受話器の向うで笑い声がした。

「あはは、やっぱり判りませんか。コンビニでバイトしてる、ほら……」

ああ、はいはい。判りましたよ、狐君ね。君、匠って名前なんだ。「お知らせしときたい事があるんですけど、シェラさん、いますかねえ？」

あいにくと、シェリ・ルーは買い物に出ていた。あいつが買い物

に行くようになってから、おまけが沢山ついてくるようになったなあ。

「そっかあ。じゃあ、伊津留さんでもいいや。あのですね」

……おい。「でもいいや」って何だよ。

「例の奴ですけど、調べていたら妙なことが判ったんですよ。詳しい話もしたいんで、今夜、真砂さんトコに来て欲しいんですけど、大丈夫ですか？」

はいはい。判りましたよ。了解しました。今夜二人で“仮面舞踏会”へ出向く事を約束して、俺は電話を切った。

はひー。

啜えた煙草に火を点け、大きく息をついた時、ドアの鍵が開く音がした。

「ただいまー」

近くのスーパーの袋を抱えたシエラが帰って来た。

「何？　どうかした？」

ソファでだらけている俺の姿を見て、シエリ・ルーが問いかけてくる。

「匠君から電話。奴の事で妙な事が判ったって。詳しい話がしたいから“仮面舞踏会”へ来て欲しいそうだ」

「匠君？　ああ、彼か。妙な事ねえ。何だろう、気になるなあ。

伊津留も行くだろう？」

買ってきた物を冷蔵庫へしまいながら、シエラが振り返って聞いてくる。

「当たり前だろ。もちろん、行くさ」

ここまできて、置いてけぼりはないだろうよ。絶対行くってばよ。ソファの上でだらけ切っている俺は、プカリプカリと煙草をふかす。ああー、何もする気が起きない。アップダウンの激しい時間を過ごしたせいかどうかはわからないが、必要以上に疲れが出てしまった俺は、担当さんに原稿を渡した後（担当さんがうちに来て、俺の後ろで出来上がるのを待ってた……泣）から、ダラダラ状態が

続いている。

「おい、伊津留。そろそろスイッチを入れて、シャキツとしてくれないかな？ はつきり言って、かなり邪魔だよ」

腰に手を当てたシエラが、ソファアの前に立って見下ろしている。「ああーん？ そんな事言われてもなあ」

日光に溶けたマーガリンのような俺は、ふやけた返事を返す。シエラは大きくため息を吐くと、俺を横目に眺めて言った。

「そんなだらけた顔して店に行ったら、ガルに何言われるか判らないぞ。大口開けて、笑われるかもな」

あ……。それはちよつと嫌かも。シエラや真砂にからかわれたり笑われたりするのには気にならないけど、ガルに笑われるのだけは、ちと勘弁。口悪いんだよ、あの一つ頭のケロベロスはさ……。

「んじゃ、スイッチ入れますか」

ぐーっと伸びをすると、煙草をもみ消す。何だか久し振りに、人間の形になったような気がする。時計を見てみると、真砂の店に顔を出すには半端な時間だ。

「なあ、シエラ。“仮面舞踏会”に行く前に、病院に寄ってもいいかな？」

倉田一人が病院に担ぎ込まれて以来、俺は見舞いにも行っていないかった。何だか、自分の心を整理する時間が必要だったんだ。まっ、今さらだけどね。

「倉田さんのお見舞いか。意識、戻ったんだっけ？」

「ああ、美緒が連絡してきた」

まだベッドからは起きられないが、意識はしっかりしているそう。傷の経過も良好らしい。

久し振りに車を出すと、シエラを乗せて病院へと向かった。途中で、柄にもなく花を買う。食べ物だと、喰えなかった時に困るからな。

病院に着くと、ナースステーションで病室を確認する。意識を取り戻した一人は、思った通り個室から移動していた。

リノリウムの廊下を歩きながら、俺は妙に緊張している自分に気が付いた。教えてもらった病室のネームプレートを確認めると、深呼吸を繰り返す。スーハー、スーハー、落ち着け、俺。

そんな俺を見て、シェリ・ルーが心配そうに声をかけて来た。

「大丈夫か？」

そんなに大丈夫じゃなさそうに見えるんだろうか？

奴に向かつて平気だとうなずいて見せ、ノックをしようと右手を挙げた。

ガララ……。

「あれ？ 伊津っちゃん？ どうしたの？」

絶妙のタイミングでドアを開けたのは、誰あろう本橋美緒その人だった。

「あ、え、う……」

一方、完全にタイミングを外してしまった俺は、挙げた右手を下げるに下げられず、ヒドク間の抜けた姿で固まってしまった。

「外で何だか人の声がしたような気がしたから。あ、シェリ・ルーさんも来てくれたんですか？ どうぞ入ってください。今、ひとりも起きてますから」

先日の不安気な表情とは打って変わって、晴れやかに笑う彼女。そんな彼女を見て、一人の事を「ひとり」と呼ぶ声を聞いて、俺は自分の心が落ち着いている事に安堵した。

病室は六人部屋で、一人はその窓際にいた。実際にうまっているベッドは三台で、そのせいか妙に広々として感じられた。起こしたベッドに背中を預け、思いの外、元気そうな表情の一人が窓の景色を眺めている。

「よお。具合はどうだよ？」

俺の声に振り向いた一人は、頬が少しコケてはいるが顔色もいい。「伊津留、来てくれたのか。悪かったな。締め切りとか大丈夫なのか？」

「ケガ人が人の心配してんじゃねえよ。あ、ネコちゃん、これお見

舞いの花」

抱えていた花束を美緒に渡す。お花を生けて来るわね、と、病室を出て行く美緒を見送って一人は口を開いた。

「伊津留、そちらがシェリ・ルーさんか？」

俺の後ろにいたシェラが進み出て、一人と向き合った。

「初めまして、倉田さん。伊津留の所に居候させてもらっている、シェリ・ルーです。どうぞシェラと呼んでください」

笑みを浮かべて挨拶をするシェラ。

「美緒からお話は伺っていましたが 直にお目にかかると……」
言葉を探しているらしい一人に、助け舟を出してやった。

「美人さんだろ、うちの相棒」

「ああ、その通りだ。それしか言葉が浮かばないよ。 伊津留、色々と世話になったみたいだな。ありがとう」

静かに息を吸い込む。大丈夫だ。心に波は立たない。

「何……言ってたんだよ。ダチだろ、俺ら」

言えた。

「伊津留、俺、お前に言わなくちゃならない事があるんだ。美緒の事だけ 俺、知ってたんだ。お前が美緒の事……」

一気に話してしまおうとする一人の言葉を、俺は無理矢理遮った。
「一人。もういいんだ。もう、終わった事なんだよ。お前が気にする必要はない。お前はこれから先、美緒を幸せにする事だけを考えていればいいんだ」

「俺、ずっとこの事が気になっていたんだ」

自然と俺の顔に笑みが浮かんだ。一人も、苦しんでいた。俺だけじゃなかった。

「ああ。一人、お前になら任せられる。美緒の事を、頼む」

見えてくる真実（前書き）

俺、自分の事しか見えてなかった。

あいつだって、自分を責めていたっていうのに。

「真実」こそが、最も見えてこないものなんだな。
デイーガ、お前の真実も探してやる。

だからもうこれ以上、罪を重ねるのはやめるんだ。

見えてくる真実

病院を出た俺達は、車を置くために一度自宅アパートへ向かって
いた。ハンドルを握る俺の心は軽い。一人の意識が戻った事を、美
緒の笑顔を、喜べる自分が嬉しかった。二人のこれから先の幸せを、
祈れる自分が嬉しかった。

「ところでさ、シエラ。一人はディーガに襲われた時、あのマイナ
スの波動に当たらなかったのかねえ？ さっき見た限りでは、変わ
った様子はなかったけど」

自宅までの最後のカーブを曲がりながら、俺は疑問に感じていた
事を尋ねてみた。

「俺もそれは気になって、倉田さんの様子を伺っていたんだがな。
大丈夫みたいだ」

助手席に座っているシエラが、窓枠に肘を付きながら言った。

「そんな事って、ありえるのか？」

駐車場が見えてきた。縦列駐車、割と苦手なんだよね。

「考えられる理由は、いくつかあるな。その中でも、特に大きい理
由は二つ。一つは本橋さんの想いだ。彼女の想いが、まるでベール
のように彼を覆っていた。彼女の彼を愛する想いである正のエネル
ギーが、ディーガの負のエネルギーから倉田さんを守っているんだ」
駐車スペースに収まった車から降りながら、聞こえたシエラの言
葉に俺は振り向いた。

「美緒の一人への愛が、ディーガの負のエネルギーより勝ったって
事か」

助手席のドアを閉め、上着を羽織ながらシエラが続けた。

「そう。そして、彼が負の波動を受けなかったもう一つの理由。そ
れは、わざわざディーガが増大させるまでもなく、倉田さんが大き
な負の感情を抱えていたからだ」

車の鍵をかけると、先を歩いているシエリ・ルーを追いかけた。

「大きな負の感情？」

「ああ。彼が常に抱いていた、大きなマイナスの感情。それは伊津留、お前に対する罪悪感だ」

シェリ・ルーを追う足が止まる。

「俺に対する 罪悪感？」

二・三步先に立つ相棒が、不思議な表情で俺を見返す。

「倉田さんが病室で言っただろう。伊津留の気持ちを知ってたって。倉田さんは、お前から本橋さんを奪ってしまったんじゃないか、そのせいで伊津留が身を引いたんじゃないかって、ずっと感じてたんだよ」

一人が。そんな事を考えていたのか。美緒との結婚を控えた、この期に及んでまで。

「馬鹿だな。俺も、一人も」

俺一人が損をしたような気持ちになっていた。一人がそんなに悩んでいたとは。

「でも今回の件で、倉田さんも気持ちに区切りがついたみたいだね。帰り際の倉田さん、いい顔してたよ」

「ああ、そうだな。俺も、二人の結婚式には笑顔で出席できそうだよ。ようやく俺は、新しい一步を踏み出した。」

カロン、カロロン

妙に懐かしい響きのカウベルに迎えられて、俺とシェリ・ルーは「仮面舞踏会」のドアをくぐった。

「いらっしやいませ。匠君、来てますよ」

夕暮れ色に彩られた店内は、ここが異空間である事を、すんなりと受け入れさせる。そんな雰囲気があった。昼の名残と夜の訪れの入り混じった空間に、俺達を呼び出した張本人が座っていた。

「こっちです。わざわざ済みません」

真砂にコーヒーを二つ頼むと、彼のいるテーブルに着いた。

「予定も聞かずに呼び出したりして、大丈夫でしたか？」

「気にすんな。締め切りの後だったから、ちょうど暇だったし」

「良かったあ。勢いで電話しちゃったけど、気になっちゃって」

カシカシと頭を掻きながら、匠は人懐っこい笑顔を見せた。それ

にしても、あれは大した勢いの電話だったぞ、確かに。

「それで、早速なんだけど、妙な事が判ったって？」

「そうそう、そうなんですよ」

シェラの問いに、横にあってあったカバンの中から一冊のノートを取り出し、おもむろにテーブルの上に広げて見せた。

「新聞でちよつと調べてみたんですけどね。ディーガが起因していると考えられる事件は、月 日を境に始まっているんですよ。その日以前には、それらしい事件は見つかりませんでした」

ノートには、思いのほか几帳面な文字で事件の起こった日時と場所、概要が記入してある。事の始まりは、俺が新聞記事を見つけたあの日。

「ヤツが行動を始めたのは、割と最近だという事なんです。なのでこのあたりを中心に何かなかったかと思って色々と探してみたんですが……」

ページをめくると、始まりの日以前の新聞の切り抜きと、簡単なメモ。

「かなり頑張つて調べてくれたんだ」

俺の言葉に照れ臭そうにしていた匠は、ふと真顔になって答えた。「世界の基準の外側にいる者の気持ちは、俺たちが一番知っています。でも、ヤツはやり過ぎた。例えどんな理由があるにせよ、もうこれ以上は駄目だ。止められる奴が止めてやらなきゃ」

強い視線で語る妖狐の前に、真砂がコーヒーを置いた。

「そうですね、我々のために、そしてディーガのために」

そう。俺達、人間のためだけじゃない。真砂や匠やシェリ・ルーや、異端とされる者達の、そして何よりディーガのために。これ以

上の凶行をやめさせなくては。

改めて全員の視線が、テーブルの上のノートに注がれた。挟まれていた新聞の切り抜きを手にして、じっくりと読んでみる。さして大きくはない切り抜きは、社会面らしい。紙面の下のほうに、小さな記事が掲載されている。

“ いじめを苦に自殺か？ 遺体見つからず”
そんなタイトルだった。

“ 日午前七時三十分頃、××市の中学校で大量の血痕が発見された。発見したのは同校職員で、いつもより早めに出勤していた。血痕が発見されたのは校舎の裏手に辺り、普段は備品倉庫にでも行かない限り、人気はないという。保護者からの連絡により、血痕は昨夜から行方の分からなくなっている麻生美由紀さん（一六）のものではないかとして、警察も調べを進めている。しかし現場には遺体が残されておらず、麻生さんの生死も不明のままである。麻生さんが一分の同級生に「いじめ」をうけていたとの証言もあり、今後、警察では自殺も視野に入れて捜査を進める方針”

「遺体が ない？」

「関連性はないかも知れないって思ったんですけど、それ以外に『こちら側』の二オイのする記事って、見つからないんですよ」

「匠君、この記事の続報はないんですか？」

「それがないんです。これ以上調べるのは俺では無理なんで、ちょっと協力を頼んだんですよ。もうすぐ来ると思っんですけど」

「協力って、誰に？」

四人がそれぞれにしゃべっていると、カウベルが来客を告げて響いた。

「あー、いたいた。悪いな、遅くなっちゃって」

「お待たせしてしまいましたかしら？」

入ってきたのは、いつぞやの夜に真砂に紹介された人狼の彼とバンシーの彼女。

「貴方達の事だったんですね、匠君の協力者というのは。伊津留は、

話をするのは初めてでしたっけ？」

立ち上がった俺に、真砂は改めて紹介してくれた。

「彼はフリーライターの間壁二郎さん。種族はご存知ですよ。彼女はエバーナ・クロワ。ナイトクラブの歌姫です」

間壁はゴツツイ右手を差し出して、二カツと笑って見せた。

「人狼の間壁だ。満月になっても、我を忘れる事はないから安心してくれ」

「萌木伊津留です。こちらこそよろしく」

しっかりと握手を交わす。

「真砂から話は聞いているぜ。人間にしちゃあ、なかなか根性あるみたいじゃないか」

肩をバンバン叩かれる。痛い痛い痛い、イタタタタ……あ、肩凝り治りそう。そんな俺の姿を見て、エバーナが吹き出した。

「あ、あら。ごめんなさい。つい笑ってしまいましたわ」

お行儀良く口元を隠しながら笑うエバーナは、灰茶色の髪をした小柄な女性だった。

「初めまして。でよろしいのかしら？ エバーナ・クロワですわ。

ナイトクラブで歌わせていただいております、しがないシンガーですの。よろしかったら、今度聴きにいらして下さいませね」

白くて細い手と握手する。力を込めたら折れてしまいそうだ。

「ええ。ぜひ伺わせていただきます」

簡単な自己紹介を終え、席に着く。

「間壁さん、写真は手に入りましたか？」

「ああ。おっ母さんから借りて来たぜ」

抱えていた大きなカバンの中から、一枚の写真を取り出した。

「これが、麻生美由紀だ」

その写真には、ペットであろう大きな犬を抱いた少女が笑顔で写っている。ボーイッシュなショートヘアが良く似合う、活発そうな少女である。

「記事を書かせてもらってからって、無理を言っただけで借りて来たんだ」

なるほど、そのための協力者か。フリーライターの間壁だからこそ、彼女の写真を手に入れることが出来たのだろう。

「こんなに明るく笑っているのに……。彼女は一体、どうしているんだろう？」

匠の独り言のような呟きに、エベーナが悲痛な声で答えた。

「彼女は　もう亡くなっているわ」

「え？　知ってるんですか？」

驚いて声を上げた俺に、エベーナは寂しそうに微笑んで答えた。

「いいえ。でも、私には判ってしまうの。私は、人の死を報せる妖精・バンシーだから」

「エベーナはなくなった方の持ち物や写真に触れることで、その時の記憶や風景を“視る”力を持っているんですよ」

そうか。だから、二人目の協力者は彼女だったんだ。

「そのためにも、どうしても彼女の写真が必要だったんです。それで、間壁さんをお願いして写真を借りてきてもらったんですよ」

匠がそう言つて、テーブルの上の写真をエベーナに手渡した。彼女は写真を受け取ると、深く椅子に座り直し、そっと目を閉じた。再び開かれたエベーナの瞳は艶のない、いぶした銀色に似た灰色。光を反射しない不思議な瞳で、笑顔の少女の写真を見つめた。

張り詰めた空気の中、エベーナは己に視える麻生美由紀の過去を語り始めた。

慟哭（前書き）

思い出されるのは、あの人の最期の姿。

もう二度と、自分を抱き締めてはくれない、あの人の腕……。許しはしない。

自分から大切なあの人を奪った「人間」を許しはしない。

慟哭

闇にまどろみまがら彼は思い出す。初めて口に含んだ血の味。口腔に広がる甘さ、そして苦味。

「死にたくない」

あの人はそう言った。

「もう死にたい」

あの人はそう言った。

それは、どちらも本心。相反する心に揺れ動きながら、その狭間で追い詰められていったあの人。

彼を抱き締めてくれた、優しかったあの人は、もういない。彼を愛して、温めてくれたあの人は、もうどこにもいないのだ。その事を思い出した時、彼は自分の胸の奥にポツカリと深淵が口を開いたような気になる。その深淵は、ひどく冷たいモノで満たされている。彼を抱き上げてくれたあの人の手は、とても温かくて、とても柔らかかった。あの人の笑顔は、彼の裡を不思議な温もりで一杯にしてくれた。愛される事を知らなかった彼は、あの人と共にいる事で得られる温もりが、「愛」であるとは気付かなかった。でも、あの人と一緒にいた時間は、確かに彼にとって幸せな時間だったのだ。しかし幸せな時間は、唐突に終わりを告げた。いつもの時間になっても戻ってこないあの人を心配して、彼は迎えに行ったのだ。辿り着いた彼は、鼻腔を刺激する血の臭いに気が付いた。臭いの先にあったのは、血溜まりの中に倒れたまま、動こうとしないあの人の姿。

迎えに来た事をほめて欲しくて、温かい手に抱き上げて欲しくて、彼は血溜まりの中へ歩を進めた。まだ温かい、粘り気のある、金属的な、それでいて甘い臭いのする生命の源。彼があの人を指をなめると、ほんのわずか目を開けた。鼻を鳴らして甘える彼に、あの人は残った力で訴えた。

「死にたく……ない」

彼に触れようとして持ち上げられた手は、そのまま彼に触れる事なく地に落ちた。跳ね上がった血の飛沫しぶきが、彼の口元に付着した。初めて口にしたその味は、限りなく甘美で、限りなく苦い。それは彼の理性を速やかに狂わせていく。

視野が赤く染まった。彼の全身に刻み込まれた、あの人の言葉。血と肉に含まれた、あの人の無念。唐突に断ち切られてしまった未来への夢。それらすべてが、彼を狂わせていく。彼はむしろ喜んで、その狂気の波に己を委ねた。

許せないと思った。彼から大切なあの人を奪った、すべての者が許せなかった。復讐をあの人の生命に誓った。

そして 新しい彼が生まれたのだ。否、本来の姿に生まれ直したと言すべきか。

のそり、と闇の中で立ち上がる。まだまだ力が必要だ。まだ思い出していない事があるのだから。しかしそれは、もう思い出さなくてもいいのかもしれない。彼の大切なあの人を、一人寂しく死なせた奴等。あの人が追い詰められていたのに、助けようとしなかった人間共。そう。この世に生きる人間すべてが憎い。

身を潜ませていた物陰から姿を現わす。わざわざ思い出す必要はないんだ。他の事は考えなくていい。この世の人間を殺し尽くす事。そして大切なあの人思い出だけ。それだけを憶えていればいいのだ。

さあ、希望を絶望に変えに行こう。狩りを始めるのだ。彼の味わった絶望を与えに。彼の抱える虚無を与えに。

「そう言えばさあ、最近、聞かなくなったよねえ」

ファーストフード店のトイレを占拠し、化粧を直しながら気だるそうに会話を交わす、数人の女子高校生。

「聞かなくなったって、何が？」

「ほら、アレよアレ。例の事件だよ」

髪を整え、マスカラを付ける。眉を描き直し、口紅を塗る。

「あー、どつかで捕まったんじゃねえの？」

「えー？ そんな話、聞いてないよお」

「そんじゃ、どつかで死んじやつたんだよ、きつと。ねえ、それよりさあ、これからどうすんよ？」

それぞれの荷物を手にすると、甲高い声で騒ぎながら店から出てくる。

「カラオケにでも行く？ あ、でも、あたし今日お金ないや。どっしようっか？」

「テキトーにオヤジでも捕まえてさあ、おごらせちゃおうよ」

そのうちに彼女達はターゲットを発見したらしい。真面目そうなサラリーマンの青年に駆け寄った。

「ねえねえ、お兄さん。あたし達これからカラオケに行くんだけどさあ、一緒しない？ 今ちよつと、お財布ピンチなんだよねえ」

青年は事態が良く飲み込めていないらしく、意味不明な事を口走りながら、女子高生達に引きずられるようにして移動していく。

「い、いや、君達……。一体、何なん……。僕は、あの……」

キョドキョドと周りを見回しながら、怯えたような表情を浮かべるサラリーマン青年。そんな様子を目にして、少女達の嗜虐性に火が点いた。目配せすると、カラオケ店ではなく、その脇の細い路地へ入っていく。

「き、君達、何をする……？」

壁際に追い詰められた青年は、ズリ落ちそうになる眼鏡を押さえ、鞆を抱えて立っている。

「何だったらさあ、別に付き合わなくてもいいからさあ。お小遣いだけちようだいよ」

「そうそう。お兄さん、お金持つてるんでしょ？」

少女達の言葉に、ようやく青年が反論した。

「何を馬鹿なことを言っているんだ。第一、どうして僕が、君達にお金を渡さなくちゃならないんだ。こんな事して、恥ずかしくない

のか？」

手前に立っていた女子高生の顔付が変わる。

「ゴチャゴチャ、うるせえんだよ。黙って大人しく財布出せよ」

「サクサク出しちゃいなよ。それともさあ、何なら今ここで『痴漢です！』って叫ぼうか？ お兄さんみたいな奴の言うことなんか誰も信用してくんないよ？」

自分達の優位を信じて疑わない、まだ幼いはずの濁った瞳。サラリーマン青年は口をつぐみ、うつむいている。

「判ったら、さつさと金出しなよ。こっちも暇じゃないんだからさ」
青年は答えない。街灯の光が眼鏡のレンズに反射し、その表情は読み取れない。

「おい、聞いてんのかよ！？」

乱暴な言葉を投げ付けていた少女が、ふと口をつぐんだ。

「え？ 何、どうしたの？」

「今、誰かしやべった？」

「うつん、別に。誰も話してなかったけど……」

最初に異変に気付いたのは、セミロングの髪を派手な赤茶色に染めた少女だった。

「誰か、いるのかよ？」

背後を振り返り、暗がりに向かって声をかける。

「何なに？」

「誰かいたの？」

側にいた少女達も何かを察したらしく、不安気に振り向きながら、せわしなく口を開く。

「ケタ」

光の届かない、吹き溜まった闇の中から、何者かの声が聞こえた気がした。

「誰だよ！？」

「そんなトコに隠れてんじゃねーよ！ 出て来い……！」

コンクリートの壁に発育途中の少女達の声が響く。その声は、明

らかに恐怖の色を孕んでいた。

カシッ、カシッ、カシッ。

硬く鋭いものがアスファルトを掻く音。闇が一点に凝縮し、膨れ上がった気がした。

「ミ　　ッ、ケタ……」

人語を語る形には出来ていないアゴから、たどたどしい言葉が漏れる。

「な、何コレ……」

暗がりから現れた、その姿。泥色の毛皮。鈍く光を反射する太い爪。めくれ上がった口唇から覗く乱杭歯。

「ね、ねえ　。コイツって、もしかして」

「そんな、まさか」

怯えながら震えている少女達を、黄色く濁った眼で見据えながら近寄ってくる獣。不気味に蠢く、奇怪な蛇。

「ミ、ツケ、タゾ　。ソノ、フクダ。シッテ、イ、ルゾ　」

明瞭な発音ではない。片言の人語。しかし、意味が通じるだけに、余計に不気味さが募る。息を飲んで立ち尽くしている少女達の背後から、不意に笑い声が弾けた。

「あつはは、おつかしいったら。さっきまでの威勢の良さは、どうしたよ？」

先程まで、目の前の少女達にいたぶられていたのと同じ人物とは、とても思えない豹変振りである。

「お嬢ちゃん達、ちつとオイタが過ぎるねえ。黙って見てようかとも思っただけど、それも、あんまりだしな」

かけていた眼鏡を放り投げ、ネクタイを緩めながら不敵に笑っているのは、サラリーマン青年。上着を脱ぎ捨てて肩を回しながら、凍り付いている少女達に告げた。

「これに懲りたら、少しは良い子にしてろよ。これからヤバい事が始めるから、早く行け」

その言葉にディーガが反応した。

「ナゼ、ジャマ、ヲスル。ソノフクダ。サガシタゾ。シンデ、シマツタアノヒトト……オナジフクダ」

逃げ出そうとしていた女子高生の一人が、立ち止まって振り返った。

「死んじやったあの人って、まさか、麻生？ あいつ、勝手に死んだクセに何だって」

「オマエ、シッテイルナ……。アノヒトヲ、シッテイルナ！」

「馬鹿野郎！ 立ち止まらずに、早く逃げる！！」

何の予備運動もなく、ディーガの巨体が跳んだ。着地したディーガが少女の退路を断つ。

「オマエカ？ オマエガ、アノヒトヲ オマエガ、アノヒトヲコロシタノカ！！」

その怒りの波動が、物理的な衝撃となつて襲い掛かってくる。仲間から取り残された少女は、恐怖に目を見開き、ズルズルと腰を抜かして座り込む。

「あ、あたしのせいじゃない！ あいつが、麻生が勝手に死んだんだ！ あたしのせいじゃない！！」

壊れた人形のように首を振りながら、自分のせいではないと繰り返す。

「ちっ！」

舌打ちをした青年は、アスファルトに座り込んでいる少女とディーガの間に割り込む。

「だから、さつさと逃げろって言ったんだ」

「ジャマヲスルナ！ ソノオンナヲ、コツチニヨコセ！」

短時間のうちに、随分と滑らかに人語を話すようになってきている。物凄いスピードで学習しているのだろう。

「悪いな。このお嬢ちゃんを、お前にくれてやるわけにや、いかなえんだ」

背後に少女をかばった青年の姿が、徐々に変化していく。瞳が縦長になり光を反射する。脇に垂らされた両手が、バキバキと音を立

てて変わっていった。指が太くなり全体的に黒い毛に覆われていく。鋭い爪が伸び、口許には長い犬歯が覗く。

「お嬢ちゃん、良く覚えておきな。この世の中、やった事とやられた事の釣り合いは、バランスが取れるように出来てる。その時になつて、やってません、知りませんは、通用しねえんだぜ」

その言葉は、果たして彼女の耳に届いたのか……。

闇との対峙（前書き）

いよいよ全面对決だ！

もうやめろ、俺達が止めてやるから。

これ以上、罪を重ねるんじゃない！

クライマックス突入！！

闇との対峙

その知らせが届いた時、俺達はまだ「仮面舞踏会」に揃っていた。エバーナの力によって知った、麻生美由紀の最期。その事に俺達は複雑な思いに包まれていた。

ガロンツ！ ガロンツ！

店内に漂う静寂を打ち破るカウベルのけたたましい音。ドアを蹴破る勢いで入ってきたのは、店の常連である顔なじみの男性とガルだった。

「出たぞ！ 阿久から知らせが来た！」

「かかったのか？」

匠が立ち上がって問い返す。

アフィエルがうちに来た次の日から、「仮面舞踏会」のメンバーが「おとり」になって街を徘徊していたのだ。そして、それが今夜、ヒットしたのだという。

「場所は何？」

間壁も立ち上がっている。

「何のために俺がいると思ってんだ。大丈夫だ。引つかかったんなら、逃がしやしねえ」

力強くガルが応える。

「急いだ方がいい。どうやら、逃げ遅れた人間がいるらしい」

「馬鹿！ それを早く言え！ 真砂とエバーナは、ここに残ってくれ。何かあった時に、この店で連絡を取り合おう。匠君は、街に散らばっているメンバーに状況を伝えてくれないか。どんな方法でもそれは任せる」

シェリ・ルーが矢継ぎ早に支持を出していく。

「判りました。それじゃ、狐火を使って、皆に報せます。万が一、突破された時の事を考えて、周辺に待機しているように伝えればいいんですね？」

匠は身をひるがえすと「仮面舞踏会」を飛び出していった。さすがは、狐が正体だけあってフットワークの軽い事。

「私はここで、真砂さんと一緒に皆さんを待っていますわ。私が行っても、かえって足手まといになってしまっただけですから」

「そうですね。エバーナと一緒に、皆さんが帰ってくる準備をしておきましょう」

「ああ、頼む。間壁さんは一緒に来て下さい。伊津留は」

俺は麻生美由紀の写真を胸ポケットにしまうと、立ち上がった。

「俺も行くぜ。あんな話を聞いて、このままという訳にもいかんしな。“人間”として、行かせてもらうぞ」

「そうか。よし、それじゃ、行こう。ガル、案内を頼む」

「仮面舞踏会」を飛び出した俺達は、先頭を走るガルの後を追いかけて走っていく。どこをどう走ったのか。側から見ればかなり異様なこの集団は、誰かに見咎められることもなく、駅付近の繁華街に辿り着いていた。この時の事は、後になっても良く思い出せない。多分「仮面舞踏会」と同じく、異空間をつなげてあったんだと思う。本来かかるはずの時間を大幅に短縮して、俺達は現場に辿り着いた。

「コタ！ 大丈夫か！」

ガルが鼻先で示した路地の奥に向かって、間壁が大声で問いかけた。

「馬つ鹿野郎！ 来んのが遅エよ！ それから、俺の事を『コタ』って呼ぶんじゃないええ！」

それに答える声も、間壁に負けず劣らず大声だ。

「何でえ。マジで大丈夫そうじゃねえか」

おいおい。その言葉の中に、本気の残念さが伺えるぞ……怖えなあ。

「どうやら、結果はまだ張られていないようだな。それだけの余裕がないのか、なりふり構っていられなくなったのか。それとも、そんな事はもうどうでもいいのか」

シエラが呟きながら路地へ入っていった。

「って言ったって、このままにしといて大丈夫なのかよ？ 他の人間が入って来たりとか」

俺の心配に、ガルが答えてくれた。

「気にしなくていいぞ。匠達が、外側から結界を張ってくれるらしいから」

その瞬間、地面スレスレに不思議な炎が灯った。

「いつまでかかってんだよ！ 早くしろよ！」

路地の奥からお呼びがかかった。「今行くさ！」

俺達は匠の狐火を越え、声のする方へと進んで行った。

「よお、コタ。どんな感じだ？」

ディーガを壁に向かって投げ飛ばしていた男が振り向いた。

「遅えつつつてんだろ、馬鹿野郎！ それから、コタって呼ぶな！

俺の名前は『虎太郎』だ！」

その顔や腕などのむき出しになった肌には、名前の通り、虎のよ
うな模様が浮かび上がっている。縦長の瞳はギラギラと光り、口許
からのぞく牙が恐ろし気だ。

「こつちにゃ、足手まといにしかないおまけがくつついてんだ。
助けに来んなら、サクサク来いってんだよ！」

背後には、腰を抜かしているらしい少女の姿があった。

楽しそうに腕まくりをしながら、間壁が虎太郎に問い掛けた。

「そいつが、ターゲットなのか？」

「そうらしいな。そのお嬢ちゃんの事を、寄越せ寄越せって、ウル
セーのよ」

立ちほだかる俺達を見て、ディーガは怒りに全身の毛を逆立てた。

「ナゼダ……？ ドウシテ、ジャマヲスル！ ソイツガ、アノヒト
ヲコロシタンダ！ ナゼ、ワタシノジャマヲスルンダ！」

う、わっ！ しゃべってる！ ディーガの奴、しゃべってるよ！？

「だから、お前にこのお嬢ちゃんを渡せねえって言ってたんだろ？
学習しろよ」

虎太郎の後ろで座り込んでいた少女は、俺達の姿を見て少し安心したらしい。

「あ、あ、あんた達、助けてよ！ 何なのよアイツ！ 何なの？ 一体何なの？ あ、あんた達、何者なのよ？ 人間なの？ あんた達も化け物なの！？ 何でもいいから、早くあたしを助けてよ！！」

血走った目を見開き、口から泡を飛ばす勢いでまくし立てた。だが、俺達は誰も彼女の方を見もしなかった。

「悪いけど、俺達は君を助けに来たわけじゃないんだ」

あんまり優しくない口調で俺が答える。

「ちょ、ちよつと、何言つてんのよ！ それじゃ、何のために来たつて言うの！？」

その言葉に余程驚いたんだろう。女子高生は甲高い声で喚き始めた。

「うるせーよ、嬢ちゃん。俺はなあ、お前さんみたいな人間は嫌エなんだよ」

ガルが冷たく言い放つ。

「ソイツヲ、タスケニキタワケジャナイ？ ナノニ、ワタシノジャマヲスルノカ？ オマエタチハ、ナニモノダ？」

ディーガが用心深く、こちらをうかがう。奴には理解できないだろう。そりゃあ、そうだろう。だけど、本当に俺達は少女を助けに来たわけじゃないんだ。シェリ・ルーが一步前に出ると、おもむろにディーガに語りかけた。

「俺達は、お前と同じモノだ。天の定めた理から外れた、種族としての枠から外れたモノだ。今ここにいる連中は、あの娘を助けに来たんじゃない。お前を救いに来たんだ。お前がこれ以上罪を犯さないように。お前の魂が、これ以上闇に堕ちてしまわないように」

「ワタシノ……タマシイ」

意外な言葉だったのだろう。

「お前、麻生美由紀さんが可愛がっていた、レックスだろう？」

俺は胸ポケットから、あの写真を取り出して見せた。

「レックス。ワタシノナマエ……レックス……アノヒトガツケ
テクレタ」

「麻生美由紀のな、おっかさんが言ってたよ。彼女が戻って来なかった夜、可愛がってた雑種のレックスもいなくなっちまったって。随分と寂しがってたよ」

間壁が言葉を繋いだ。

「あんた達、何なのよ？ そんな事、どうだっていいじゃない！早くそいつを殺しちゃってよ！」

別の意味でパニックに陥った少女が叫ぶ。だけど、誰も振り向かない。何も答えない。

「何だよ！ あたしは人間なのよ！どうして人間じゃなくて、化物のそいつを助けるなんて言うの！？ あたしの事を助けなさいよ！」

ま、ね。常態であるなら、それが本当だと思うよ。どう見たってこの状況は、「怪物に襲われている女子高生」だからな。

「あたしが何したって言うのよ！？ あたしは何も悪くないじゃない！ 麻生は勝手に死んだのよ！ あたしが殺したわけじゃない。あいつが勝手に死んだのよ！」

状況に体が順応し始めたのか、抜けていた腰が元に戻り始めたのか、四つん這いになりながらにじり寄ってくる。

「ナニモシテイナイダト？ ワタシノタイセツナ、アオノヒトヲコロシテオイテ、ナニモシテイナイダト！？ フザケルナ！！」

ディーガが怒りの咆哮を上げる。蛇が赤い舌を吐き出し、身をくねらせて威嚇する。

「オマエガコロシタンダ！ オマエガ！ オマエガ！！」

四肢をバネのようにたわませ、ディーガがこちらに飛び掛ってくる。

「っ！ だから、落ち着けて！」

間壁がぶつかってきたディーガを受け止める。長大な蛇が襲い掛かるうとした瞬間、シェラの指が印を切った。蒼い光で紡がれた神

聖陣がディーガの周囲に現れる。

「ギャンツー!!」

陣に弾き飛ばされたディーガは、アスファルトに叩きつけられた。俺はこの場所に着いてから、初めてその少女の姿をまともに見た。両手の指先を飾っていたネイルは剥がれ落ち、あちこちに散らばっている。さして大きくはない目を縁取っていたマスカラとアイシャドーは、涙と汗に溶けてその顔を汚している。

「自分は何も悪くない。君は今、そう言ったな」

地面に張り付いたまま、彼女は俺を見上げた。

「そうよ。あたしは悪くないじゃない。勝手に死んだ麻生が馬鹿なのよ。あたしが殺した訳じゃない」

「そうだな。確かに君が言う通り、麻生美由紀を殺した訳じゃない。でも、だからって、君の犯した罪まで消える訳じゃない」

俺の言葉にディーガが噛み付いた。

「ウソダ! アノヒトヲコロシタノハ、ソイツニキマツテイル! ウソダ、ウソダ!!」

俺は、ディーガの復讐にかける果てしない執念を感じて、切なくも哀しくも思った。

「ディーガ いや、レックス。お前には納得できないかもしれないが、彼女は麻生美由紀を殺してはいないんだ」

「ウソダ !!」

路地にディーガ「レックスの悲痛な叫びがこだました。

これはエベーナが語って聞かせてくれた、あの日の出来事。

放課後の音楽室で美由紀は何かを探していた。教卓の下や机の間を廻り、掃除用具入れの中まで覗いてみた。

「おかしいなあ。ここじゃないのかなあ」

さらに深く掃除用具入れを覗き込んだ瞬間、背後から腰を強く蹴

り付けられた。

「ああっ!？」

モップやホウキをガタガタと鳴らしながら、美由紀は掃除用具入れの中につんのめってしまった。背後からは、数人の女子の高い笑い声が響いている。

「何するの……」

床に座り込んでしまった姿勢で、美由紀は自分を蹴り付けた相手を見上げた。

「あーら。誰かと思ったら、麻生さんじゃない。気が付かなかったわ」

「あたしなんて、てつきり、しまい忘れたモップかと思っちゃったわよ」

ひとしきり美由紀を囲んで笑った後、リーダー格らしい少女が何かを取り出した。

「お前が探してんの、コレじゃねーの？」

手のひらに乗る程の小さな箱。グリーンのリボンがかけられた、可愛らしい箱だ。

「あ! それ!」

差し出した美由紀の手を、少女の一人が払い除けた。

「なあに、こいつ。せっかく奈緒が拾つといてくれたのに、礼も無しかよ」

奈緒と呼ばれたリーダー格の少女は、手の上でその箱をポンポンと弾ませている。

「やめて! 返して!」

「へえ。そんなに大事なモンなのかよ？」

奈緒は美由紀の前にしゃがみこむと、箱を目の高さに掲げて見せた。

「わざわざ拾って持ってきてやったんだ。タダでお前にくれてやる訳には、いかねえよなあ。いくらで買うよ?」

美由紀の目に、困惑の色が広がった。

「そんな。お願い、返して」

立ち上がって箱を取り戻そうとした美由紀は、側にいた女子生徒に足元をすくわれた。

「きゃああ！」

前のめりに倒れこんだ美由紀の頭を、別の女子生徒がモップで押さえつけた。

「何が『返してえ』だよ。『返して下さい』だろうが。言葉遣いになってねえな」

周りにいた女子生徒達が、笑いながら、掃除用具入れの中にあつた雑巾を投げ付ける。

「やめて！ やめてよ！ どうして、こんな事をするの！？」

体を押さえ付ける数本のモップに抗い、投げ付けられる雑巾を手で除けようとしながら、美由紀は女子生徒達に訴えかけた。

「どうして？ お前が、ウゼエからに決まってるんだろ。当たり前的事、聞いてんじゃねえよ」

「目障りなんだよ」

「学校、来んなつつてんだろ」

頭上から降ってくる言葉のナイフの数々。

「どうしてよ、どうして？ 私が何かした？ 私があなた達に、何かしたの？」

美由紀の必死の問い掛けは、奈緒の冷ややかな答えにかき消されてしまった。

「別に。あたし達もさあ、毎日ストレス溜まる訳よ。だから、あんなでストレス発散してるの。判ったあ？」

その声と共に、手にしていた箱を美由紀の目の前に落とした。

「学校に来るなら、大人しく、あたし達のストレス発散に付き合っしかねーよなあ」

奈緒は冷笑を浮かべながら、落とした箱をゆっくりと踏み潰した。
「ああつ」

無残に潰れた箱に、美由紀が痛々しい声を上げた。

「こんなモンなあ、大事そうに学校にまで持ってくんなよ。馬っ鹿じゃねえの？ そんなに大事なら、落としたりしてんじゃねえよ」

自分の踏み潰した箱を掴み上げると、背中越しに開いた窓から投げ捨てた。声を失っている美由紀を見て、少女達はまた、甲高い笑い声を上げた。口々に罵倒の言葉を吐きながら音楽室を出て行く。ドアに手をかけ、奈緒が振り向いて言った。

「美由紀ちゃん。明日からも、あたし達のストレス発散、よろしくね」

彼女達が去った後、うずくまったままの美由紀の口から嗚咽が漏れた。握り締めた拳で床板を叩く。

「どうして？ どうしてよ？ ねえ、どうしてなの？」

答えの返ってくるはずのない問いを繰り返す。意味もなく、訳も分からず、このままずっと、奈緒達のグループに虐げられ続けるのか。

フラフラと立ち上がった美由紀は、箱が投げ捨てられた窓枠へ近寄って行った。涙で曇った美由紀の目が、窓のひさしの部分にかろうじて引っかけた状態になっている、潰れた箱を発見した。

「あつた」

生気を失っていた彼女の顔に、一瞬、明るい光が差した。音楽室の中を見回し、転がっていたモップを拾い上げた。窓枠から身を乗り出し、モップの柄で箱を引き寄せようと試してみる。しかし長いモップの柄は、美由紀の思い通りには動かず、ともすれば微妙なバランスで引っかけかかっている箱を落としてしまいかねない。

「くっ。上手くない……」

落ちれば、校舎の下へ拾いに行けばいいだけの話なのだが、そのときの美由紀の頭には思い浮かびもしなかった。

「あと、もう少しなのに」

美由紀はモップを放り出すと、窓枠を乗り越えた。頭の中には、小箱を手にかかるとしかかない。そのための手段は、美由紀にとってどうでもいい事だった。窓枠に手を掛けて体を支えると、美由紀は

箱に手を伸ばした。

「もう、ちよつと……」

ギリギリまで両腕を伸ばす。美由紀の震える指先が、小箱のリボンにかかった。攣りそうになる指が、懸命に箱を手繰り寄せた。

「やった！」

美由紀の顔が喜色に輝いた。その瞬間。

彼女の体を支えていた手が、汗ですべり、窓枠から離れた。何かを考える暇もなく、ただ掴んだ箱だけを胸に抱え込み、美由紀の体は宙に投げ出されていた。やがて 鈍い音が響いた。

「だから、彼女は麻生美由紀さんを、直接殺してはいないんだ」
俺の話が終わると、地面に座り込んだままだった女子高生、麻生美由紀を苛めていたグループのリーダー格だった少女・奈緒は力なく呟いた。

「あ、あたし達が悪いんじゃないじゃない」

確かに、彼女が直接手を下した訳ではない。それでも。

「それでもやつぱり、君達にも原因があるんだ」

長い話を聞いて、ディーガ「レックスも言葉を失くしていた。

「ソナナ」

「お前が学校に着いたのは、それから間もなくの事だ。だから、麻生美由紀の最期に間に合ったんだ」

ディーガ「レックスに、シェリ・ルーが静かに声をかけた。

「お前が怒りに任せて、目の前にいる彼女を殺しても、美由紀さんは喜ばない。それは、お前が一番良く知っているはずだ。美由紀さんと一緒に長い時間を過ごし、そして 彼女の血肉を身裡に取り込んだお前なら」

新聞の記事にあった、痛いが見つからなかった謎。その答えは、とても単純な事だった。アフィエルが言っていた、妖獣ディーガの魂の気配を追えなくなった理由。

「亡くなってしまった美由紀さんをそのままにしておけなかったお

前は、彼女の血を口にした。そして 彼女の遺体を、喰ったんだ」
人間の血肉は、正邪を問わず彼等の理性を狂わせる。

「ソナナ。ソノ女ガ、アノ人ヲ殺シタンジヤナイ？ ナラバ、私ノコノ身裡ニアル、抑エヨウノナイ怒リハ、私ノ身ヲ焦ガス、狂オシイ怒リノ炎ヲ、ドウシロト言ウノダ！ ダメダ！ ソナナ事ハ許サナイ！」

ディーガ「レックスの体が一回り膨れ上がった。恐ろしい勢いで学習しているディーガ「レックスの言葉は、聞いていてもはや何の違和感もない。

「許スモノカ！ 今更、何ヲ言イ繕ツテモ、アノ人ハ戻ツテ来ナインダ！ ナノニ、ソノ女ハ生キテイル。ソナナ事ガ、許サレルハズガナイ！」

ディーガ「レックスの背中が盛り上がり、まるで牙のような、刃のような（あれは、骨なのか、もしかして？）鋭い突起が、毛皮を突き破って現れる。

「おいおい。これ以上、どんな変身をしようってんだよ？」

虎太郎が呆れ顔で呟いた。

「やめる、レックス！ これ以上、己の魂を血で汚すな。もうやめるんだ！」

間壁の叫びに、レックスが悲痛な答えを返してきた。

「私ノ魂ハ、スデニ血塗レダ！ コノウエ血デ汚レタカラト言ツテ、ドウト言ウ事モナイ。ドウセ私ノ魂ハ地獄へ堕チル。ダガ、アノ人ヲ死ニ至ラシメタ者共ヲ、一人残ラズ殺シテカラダ！」

ディーガ「レックスは全身の毛を逆立て、俺達に向かって吼えた。獣の眼に涙腺があるのなら、今、奴は血の涙を流しているだろう。麻生美由紀の死は事故だった。彼女の仇を討つ事だけを思っていたディーガ「レックスは、今になって、その標的を見失ったのだ。しかし、間違った仇討ちはやめさせなくてはならない。奴の魂が、これ以上壊れてしまわないように。今の奴の醜い姿は、そのまま奴の魂の壊れた姿だ。

「レックス。地獄へ行くなら、お前一人で行け。お前の道行きに、彼女を付き合わせるんじゃない」

シェリ・ルーの声が、静かに、けれど厳しく空間を貫いた。

「何……ダト？」

思いもかけぬ事を言われたディーガ「レックスは、攻撃態勢に入っただけだ。」

「お前がこれ以上罪を重ねれば、お前の魂だけじゃない。お前の事を心配して、ずっと側にいた、美由紀さんの魂も罪に染まるんだ」

シェラの言葉は、ディーガ「レックスの胸に届いたようだ。」

「怒りと憎しみで曇ってしまったお前の眼には“見え”ない。彼女は、お前の側についていたんだ。お前がやっていた事も、全部知っているぞ。このうえ美由紀さんを、更に苦しめたいのか？」

俺達がディーガ「レックスを説得している間に、奈緒の抜けていた腰が治ったらしい。誰も自分の注意を払っていない事を確かめると、何とか逃げ出そうと動き始める。

（何なの、コイツ等。何、話してんだよ？ 理解できねえよ）

ギリギリと、その場から離れようとする。

（コイツ等、まともじゃないよ。さつさと殺しちまえよ。こんな奴、さつさと殺しちまえよ。こんな奴、こんな奴、）

「さつさと殺しちまえよ！ こんな奴！ こんな化け物！ さつさと殺してよ！！」

過去からの光（前書き）

俺達の前にディーガがいる。

悲しみに打ちひしがれ、愛する者を狂わんばかりに捜し求める孤独な魂……。

見るんだ、ディーガ！！

お前のために苦しみに耐えてくれていた人がいる事を、お前は知らなくてはいけない！！

過去からの光

奈緒の唐突な叫びのために、その場にいたすべての者の意識が逸れた。その一瞬の隙について、ディーガ「レックスが俺達の間をすり抜ける。

「！レックス！」

「キヤアア！」

アスファルトの路面に押し倒され、手足をガッチリと固定されている奈緒。その彼女の上にのしかかり、鋭い爪の生えた四肢で獲物を捕らえているディーガ「レックス。

「やめろ、レックス！」

「やめるんだ！」

あお向けに押さえつけられた奈緒の脇腹には、ディーガ「レックスの背中から生えた刃が喰い込んでいる。蛇は長さも太さも倍ほどに変化している。身の丈を超え、奈緒の鼻先で舌を吐き出し威嚇している。

「私ノ側ニ、アノ人ガイル？ 嘘ダ！ アノ人ガ側ニイテクレテイ
ルノナラ、私ニ判ラナイハズガナイ！ ソンナデタラメヲ言ツテ、
私ヲダマソウトシテモ、無駄ダ」

牙をむき出して、俺達の反論する。顔を引きつらせ、涙を流している奈緒を見下ろしてディーガ「レックスは言った。

「私ガ怖イカ？ 私ガ恐ロシイカ。私ハ醜イダロウ。ダガ、オ前ト
私ニ、ソレ程ノ違イハナイ。姿ヲドレ程飾リ立テテモ、オ前ノ魂ガ
放ツ腐臭ハ、私ト同ジモノダ」

奈緒は歯を食いしばり、喉からうめき声がもれている。そんな奈緒に顔を近づけ、舌をダラリと垂らして、ディーガ「レックスが更に言い募る。

「私ヲ、化ケ物ト言ツタナ。ソウダ。私ハ、天地ノ粹カラ外レタ、
化ケ物ダ。ナラバ、オ前ハ何ダト言ウノダ。私ハ、オ前ガアノ人ニ

シタ事ヲ知ツテイルゾ。自分ヨリ弱イモノヲ虐ゲテ、ソナナ自分ヲ
自慢シテイルヨウナ、ソナナ才前ノ心ヲ何ト言ウカ知ツイノカ？
才前ノ心モ、私ト同ジ化ケ物ダ」

俺はポケットから、ある物をつかみ出した。

「レックス！ それ以上、自分の魂を貶めるな！」
おとし

ディーガ「レックスの意識が、俺に向いたのを感じる。

「これが何だか判るか？ 美由紀さんが、何としても取り返したか
った物だ」

俺の手のひらにあるのは、緑のリボンがかかった潰れた小さな箱。
「良く見てみる、レックス！ 彼女がどうしても、この箱にこだわっ
たのか！」

リボンを解く。包装紙を破る。箱のふたを開ける。

「見る！ これが何なのか、お前は見なくちゃいけない」

俺が箱から取り出したのは、オレンジ色をした首輪。ゴールドの
金具に留められた、シルバーのプレートが揺れている。光を反射し
て煌くそのプレートには、「REX」と飾り文字で彫り込まれてい
る。

「あの日、美由紀さんが亡くなったあの日は、レックス、お前の誕
生日だった。憶えているか？ これは、お前のために彼女が用意し
たプレゼントだ」

これだけが、母親の元へ戻ってきたのだという。間壁が話を聴き
に行った時に、写真と一緒に借りてきたものだ。

「今更、ソレガ何ダト言ウノダ」

視線と意識だけを俺に向け、ディーガ「レックスが吐き捨てた。

「シェラ 頼む」

背中に伝わる気配で、シェラがうなずいたのが判る。

ファササ……。優しく空気が揺れる。ディーガ「レックス
の目が見開かれる。路面に押さえつけられた奈緒の震えが、止まる。
見なくても判る。シェラの シェリ・ルーの背中に、紅の翼が
開いたのだ。薄明かりに浮かび上がる、燃え立つような四葉の花弁。

「未だ光を見出さぬ魂

耐え難き痛みを耐え 煉獄れんごくに身を縛る魂よ

今ひと時 仮の器に宿れ

伝えられぬ想いを伝えよ 語られぬ言葉を語れ

我 死を司る天使

アズラエル シェリ・ルーが導く

萌木伊津留の裡へ」

広げられた翼が、かすかに震える。俺の胸の奥に温かいものが生まれた。それがジワジワと広がっていき、やがて俺の裡を一杯にする。それに従がって、俺の意識は主人格の座を譲り渡す。

「レックス……。もうやめて」

俺の口を借りて、俺のものではない声が、俺のものではない言葉を語る。

「レックス。私の声が聞こえる？」

奈緒を押さえつけたままのディーガレックスの瞳に、驚愕の色が浮かんだ。

「美、由紀ナノカ……？ 本当二？ 本当二美由紀ナノカ？」

俺の体が、ゆっくりと両腕を広げた。

「おいで、レックス」

奈緒の手足をガッチリと拘束していたディーガレックスの脚が、彼女の体から離れる。奴の目には、俺の姿にダブるようにして、麻生美由紀の姿が見えているのだろう。

「ごめんね、レックス。私のせいで、あなたに辛い思いをさせてしまった。もう、いいのよ。私が死んだのは、事故だったの。奈緒さんのせいじゃないわ」

ヨロヨロと近寄ってくるディーガレックスの前に膝をつく。

「ダメダ、美由紀。アノ女ガイナケレバ、美由紀ガ命ヲ落トス事ハナカツタ。ソレハ許セナイ」

俺 いや、「俺」という器に宿った美由紀の魂は、悲しげにディーガレックスに訴えかけた。

「私はね、レックス。生命の灯が消えた時から、ずっとあなたの側にいたのよ。あなたがやってきた事も、あなたが考えていた事も、全部知っているわ。私の力が足りなかったばかりに、罪を犯すあなたを止める事が出来なかった」

美由紀は俺の体を借りて、ディーガ「レックスの頭を抱き寄せた。
「全部？ 私ノヤツテキタ事ヲ、全部見テキタノカ？ コンナ二醜イ私ヲ、ズツト？」

腕の中から逃げ出そうとするディーガ「レックスの頭を、美由紀はしっかりと、しかし優しく抱き締める。

「ええ、全部。あなたが罪を犯したのは、私のため。だから、私が地獄に堕ちるのは構わない。でも、レックス。あなたの魂を、これ以上、罪で染めるのはやめて」

そんな美由紀の魂とディーガ「レックスの姿を、俺の魂は少し離れた場所から見ている。応急処置的に素人の俺の身体を「器」にしているために、魂はとても不安定な状態にある。ちよつとした衝撃で、器とのリンクが切れてしまう可能性もあるのだ。そのため、俺の魂はシエリ・ルーの力で護られている。余計なモノを脱ぎ捨てた俺の魂は、よりシエリ・ルーの本質と近い存在になっている。

（もしかするとシエラにとって、この世にある存在はすべて、こんなふうに感じるのかもしれない）

こうして見てみると、俗に「オーラ」と呼ばれる生命力の輝きが良く判る。間壁や虎太郎、ガルのオーラの輝きといたら。そばでうずくまっている、奈緒のオーラとは比べものにならない。しかも奈緒の場合、現在おかれている立場と、これまでやってきた行いが反映しているらしい。鈍色にくすんだ暗いオーラ。ディーガ「レックスの、濁った血のような赤黒いオーラ。そして、シエリ・ルーの体から立ち昇る、綺羅綺羅しい白銀のオーラの美しさ。

（ああ、何て綺麗なんだろう）

アフィエルはシエラの事を「墮天使」と呼んだけれど、本当に堕ちた天使なら、これ程までに美しいオーラを保てるもんなんだろう

か？

（いっぺん、アフィエルの野郎のオーラを見てみてえもんだよなあ）
オーラの輝き・煌きは、そのまま本人の魂の強さだ。魂の輝きが強ければ強いだけ、弱ければ弱いだけ、それはオーラに反映される。それだけではない。魂が清ければ清いだけ、魂が壊れれば壊れただけ、姿形に表れるのだ。

そう。今のディーガ＝レックスのように。

奴の本来の姿が、今あるものではないという事は、オーラの状態を見ていれば判る。赤黒い澱んだオーラの間隙から、わずかに漏れる別の色のオーラ。

（あの姿は、ディーガ＝レックスの本来の姿じゃないのか？）

俺がそう感じた時、俺の体の中にいる麻生美由紀が、奈緒に向かって語り始めた。これまでの恨みつらみを彼女にぶちまけるのかとも思ったが、どうやらそうでもないらしい。美由紀は静かに語り始めた。

「奈緒さん。あなたにお願いしたい事があるの。これ以上、私やレックスのような思いを誰にもさせないで」

よろけながら立ち上がった奈緒は、その言葉に疲れた視線を向けた。

「何を……言ってる？」

ディーガ＝レックスのゴワゴワした毛皮を優しく撫でながら、美由紀は奈緒に訴えた。

「あなたには、レックスの姿が恐ろしい怪物に見えたはず。それと同じように、いじめられている時、わたしはあなたが怖かった。今になって思えば、何がそんなに怖かったのか。同じ人間なのにね」

すでにこの世の住人ではない美由紀の言葉を、奈緒はどのような気持ちで聞いているのか。

「あなたは、レックスと出会う事が出来た。だからこそ、あなたにお願いしたいの。レックスの姿は、罪を重ねた魂の醜さ。あなたもこのまま、罪の意識のない罪を重ねていけば、いつかはレックスの

ようになつてしまつわ。罪の数だけ闇を背負つた、怪物のように醜い魂になつてしまつかもしれない」

奈緒に対して言葉を続ける美由紀に、ディーガ「レックスが唸り声を上げた。

「美由紀！ コンナ女ガドウナロウト、ソナ事ヲ心配シテヤル必要ナドナイ！ 腐ツタ魂ヲ抱エタママ、地獄ニ墮チレバイインダ！」
そう叫んだディーガ「レックスに、美由紀が厳しく諭した。

「それは違うわ。私にはあなたがいた。だけど彼女にはいなかった。今ここで、私はあなたを救う事が出来るけれど、彼女が堕ちた時に救ってくれる人は、いないかも知れない。だからこそ、奈緒さんには、今気付いてほしいのよ。自分のやってきた事が、いかに相手の心を殺すのかを」

ディーガ「レックスの鼻面に頬をすり寄せる。美由紀は告げた。

「私に残された時間は、そう長くないのよ。もうすぐ、行かなくちゃいけないの」

その言葉に、ディーガ「レックスが悲鳴を上げた。

「嫌ダ！ モウ離レルノハ嫌ダ！ ズット側ニイテ！」

すがりつく妖獣に、シェラが語りかけた。

「レックス、良く聞け。すでにこの世の住人ではない美由紀さんにとって、光に逆らつてこの世に留まり続けるという事は、限らない苦痛にさらされているのと同じだ。死者にとって、この世は煉獄に他ならない」

「何……？」

信じられないといった面持ちで、シェリ・ルーを見上げ、次いで美由紀を見上げる。

「美由紀、本当ナノカ？」

美由紀は柔らかく微笑んで、ディーガ「レックスを抱き締めた。
「私の事は心配しなくていいの。私はずっと、レックスの側にいるから」

そして、間壁に支えられて立っている奈緒を見た。

「奈緒さん。私は、あなたを恨んでいない。そりゃ、いじめられた時は、あなたを憎んだわ。でも、憎しみかられて罪を重ねるレックスを見て、気付いたの。レックスを救うためには、私が奈緒さんへの憎しみを捨てなければいけないって」

俺は彼女達のやりとりを聞きながら、すぐ近くにある、誰のものでもない気配を感じていた。俺や間壁や虎太郎やガルのもものより、異質で強大であるそれは、感じとしては、シェリ・ルーに近しい。全身がチクチクするような不思議な感じ。姿は見えないのに、何と言う圧迫感。そして存在感。

（誰だ？ 誰がいるんだ？）

シェリ・ルーの力に護られているはずの俺の魂に、その何者かの気配は近寄ってくる。これだけの圧倒的な存在感を持ちながら、俺以外の連中が気付いた様子もない。とすると、今、俺が意識を保っている次元は、現実とは別次元という事になるんだろうか？

そんな事を考えているうちに、強大な気配は、俺の魂に直接語りかけてきた。果たしてそれは、本当に“言葉”だったのか。何らかの意志が、俺に理解しやすい形に翻訳されたのだろう。

（ ）

俺の頭の中で鳴り響いた言葉。それは、奇妙な出来事に対して耐性がついていたはずの俺を、硬直させるのに十分な内容だった。

（いや、俺は構わないけど……。けど、それでいいのかよ？）

姿の見えない相手に話しかけるのは、恐ろしく間が抜けているような気がした。

（ ）

（まあ、あんたがそれでいいって言うんなら、俺に反対する理由はないしな）

美由紀は握り締めていた首輪を、レックスの首につけてやった。

「ああ、やっぱり似合うね。遅くなっちゃったけど、誕生日おめでとう」

そう言って笑うと、美由紀の魂は、ずっと俺の体から抜けて行っ

た。まるでその魂の行方を追うように、膝をついた俺の頭上を、じつと見つめているディーガ「レックス。」

「レックス。もう、彼女に心配をかけるな。お前のために、光差す道からあえて顔を背ける彼女を、そろそろ自由にしてやるんだ」
シェリ・ルーの言葉に、ディーガ「レックスはノロノロと顔を向けた。」

「私ノ罪ハ深い。ソレヲ理解シテナオ、コノ憎シミカラ、コノ苦シミカラ抜ケ出ス事ガ出来ナイ。コノママデハ、私ダケデハナク、私ヲ愛シテクレタ美由紀ノ魂マデモ救ワレナイ。ドウスレバイインダ？　ドウスレバ、美由紀ノ魂ハ救ワレルンダ？」

見上げてくるその瞳に、もうあの狂気はない。深い悲しみがあるだけだ。シェラが、ディーガ「レックスの前に膝をついた時、俺は、すつと立ち上がった。」

「伊津留……？」

目を閉じた俺の口から、再び俺のものではない声が滑り出てくる。「心配する事はない。大丈夫だ。お前の憎しみも、お前の苦しみも、全て俺が引き受けてやる。美由紀の魂が堕ちる事はない」

その声に、今度はシェリ・ルーの顔色が変わった。

「伊津留……お前……どうして？」

「久しいな、シェリ・ルー。お前の相棒の器を借りたぞ。伊津留には承諾済みだし、ちゃんと器を整えてやるから、心配するな」

「ルシエル……」

俺の体に宿った次なる相手。魂だけの俺に語りかけてきた相手。それは、シェリ・ルーがずっと捜し求めていた半身。大天使ウリエルによって引き裂かれた、シェリ・ルーの魂の半分　ルシエル。
（あの苦しみに満ちた魂を救ってやろう。しばし、器を貸してはくれまいか）

そう語りかけてきたのだ。

麻生美由紀の時とは違い、俺の魂は体の中に収まっている。すぐ間近に、ルシエルの存在を感じる。恐ろしいくらい強大なのに、俺

の魂を弾き出してしまうないように、力をセーブしてくれているのも判った。先程まで感じていたシェリ・ルーの気配とは、どこか似ていて、どこか違う。シェラの半身なんだから、気配が似ているのは当たり前なんだが。

（でも、シェラのもものよりも、荒々しくて強い。そのくせ、何だか子供っぽい感じもするし）

俺がそんな事を考えていると、ルシエルの笑いを含んだ「声」が聞こえてきた。

（俺の半身が、随分と世話になっているようだ。礼を言う）

（言われる程の事は、してねーよ。って言うか、世話されてんのは俺の方だし）

目を開いた俺は、自分の体が、その魂に見合った形へと変化していくのを感じた。髪が伸びる。シェラと同じくらいの長さか。多分、瞳の色は、そのまま黒だ。いや、もしかしたら、より深みを増した黒かもしれない。四肢から余分な肉が落ち、その分、上背が増えた。あ、俺、この状態がいいな。え？ 戻っちゃうわけ？ え〜〜〜？

（伊津留、お前）

（いや、ゴメ……。マジで、悪イ）

内面でのやり取りは、さて置き。

「お前は無関係な人間を殺し過ぎた。その償いだけは、しなくてはいけない」

ルシエルの言葉に、ディーガ「レックスは深くうなだれた。

「この世でもっとも大切な者を失った、お前になら判るはずだ。お前が殺してしまった人間にも、どこかで悲しむ誰かがいるという事を。それさえも理解できなくなってしまったと言うのなら、お前の魂に救われる余地はない」

ファサア。

空気が震える。重さを感じさせないけれど、しっかりとそこにある。俺の背中に開いた、四葉の花弁。だがそれは、シェリ・ルーのものとは相反するように、漆黒の翼。

「その時には俺が、再生の叶わぬ最下層の窓へ、お前の魂を突き落としてやる」

ルシエルは厳しい声でディーガ・レックスに告げた。

「美由紀が耐工忍ンダ苦痛ニカケテ、私ハ誓ウ。コノ身ハ必ズ、裁キヲ受ケヨウ。タトエ魂ヲ切り裂サカレヨウト、ソレダケノ事ヲ、私ハシデカシテシマツタノダカラ。美由紀ガ心安ク、光ノ道ヲ歩ンデ行ケルヨウニ」

そこで一旦言葉を切ると、ルシエルを見上げた。

「美由紀ハ　アノ人ノ魂ハ、天国ニ迎エラレルノダロウカ？　私ト一緒ニイタ事デ、美由紀ノ魂ニ傷ガ付イタリシテイナイダロウカ？」

ルシエルは、そんなディーガ・レックスに優しく微笑みかけた。

「大丈夫だ。心配する事はない。彼女からの伝言があるぞ。“魂の償いを済ませ、もしも生まれ変わる事が出来たら、もう一度、私のところに生まれておいで。今度は互いに、きちんと生きて行こうね。それまで、しばらくの間、さよならだよレックス”」

広げられた漆黒の翼が、細かな光の粒子をまとうて輝く。

「お前の心の内にある憎しみを取り除かない限り、同じ過ちを繰り返すだろう。俺がその苦しみを、全部引き受けてやる。いずれお前の罪が許され、再び生まれ変わる事が出来た時に、美由紀に対して恥じないでいるために」

そう言つて、ルシエルはディーガ・レックスの頭上に手をかざした。ルシエルの手から光が放たれ、やがて輝く光輪となる。だがディーガ・レックスは、何か言いたそうに視線を動かした。その視線の先には、間壁に支えられて立つ奈緒がいる。

「もう、彼女の事は気にするな。彼女もいつか裁かれる。たとえ人間の法で罪に問われる事はなくても、魂の法の前では逃げられない。彼女が自分のやってきた事に気付く、その時まで。それまで、彼女の魂は目に見えぬ、だが逃れようのない司法官に裁かれ続ける。彼女自身の『良心』という司法官に」

シェリ・ルーはそう言つて、その紅の翼を広げた。

「さつき言つただろ？ やつた事とやられた事の釣り合いはとれるようになつてゐる。このお嬢ちゃんも、それは身に染みただろう」
虎太郎が腕を組んで、皮肉を含んだ口調で言つた。視線はやはり、奈緒に向けられている。

「それじゃあ、お前を元の姿に戻すぞ。それから、魂の状態にする。いいな、シェリ・ルー」

「ああ。いつでもいいよ、ルシエル」

ディーガ・レックスの前後に立ち、各々の四葉の翼を広げる。互いを包み込むように。ディーガ・レックスを包み込むように。光の粒子がルシエルからあふれ出し。シェリ・ルーの翼へと移行していく。ディーガ・レックスの頭上にあつた光輪も、徐々に輝きを増していく。それに従がつてディーガ・レックスの姿が変わっていく。

背中から生えていた牙状の鋭い刃が消えていく。ドロ色の毛皮は、まるで漂白でもするかのように、端から色が変化する。長く細い毛は、光の加減で微妙に色合いを変えるアイスブルー。わずかな風にも優雅に揺れる。

「キ　レイ」

そう呟いたのは、ようやく一人で立つ事ができた奈緒だ。

蛇の姿をしていた尾は、絹のような質感を持った長い尾に変わる。細められた目から伺える瞳は、知性をたたえた黄玉の色。そして、その額にもう一つの目が開く。縦に開いたまぶたから、見て取れる瞳もまた黄玉の色だ。耳の後ろから、羊のようにキツく巻いた太い角が現れる。

「これで、お前の憎しみは取り除かれた。その姿こそが、レックス、お前の本当の姿だ」

ディーガ・レックスの頭上に輝いていた光輪が消えた。全身を軽く震わせ、ディーガ・レックスが立ち上がる。先程までの醜い姿からは、想像もつかない。憎しみが、魂の本質までも歪めていたのだろつ。

「何て 何て、キレイなの……」

その姿に魅了されるように、奈緒がふらふらと近寄って行く。

「おいおい、やめとけて……」

奈緒を止めようとしたガルに向かって、ディーガ「レックスが言った。」

「イヤ、構ワナイ。私ノ中ニ、モハヤ彼女ヘノ憎シミハ存在シナイ」
その声は落ち着いている。多少、金属的な響きもあるが、耳に快
い声だ。三つの目で奈緒を見つめる。じっと立っているディーガ「
レックスの体に、震える奈緒の指が触れた。流れる毛並みに指を這
わせる奈緒に、ディーガ「レックスが語りかけた。」

「私ハコレカラ、自分ノ犯シタ罪ヲ贖あがなイニ行ク。ドノヨウナ理由ガ
アッタニセヨ、己デシデカシテシマッタ事ニ対スル責任ハ、己自身
デ取ルシカナイノダカラ。私ハモウ、アナタヲ憎マナイ。アナタガ
早く、自分ノ心ノ歪ミニ氣付イテクレル事ヲ願ッテイル」

口唇を噛み締めている奈緒を残し、ディーガ「レックスはその場
から離れた。待っていたシェリ・ルーとルシエルの許へ戻る。

「では、魂の在るべき場所へ戻ろうか」

ルシエルが両手を差し出す。三つある目を閉じ、ディーガ「レッ
クスはその手に向かって首を垂れた。その姿が足下から解け始め、
光の粒子に変換されていく。誰もが言葉を失くし、目の前にある幻
想的ともいえる光景に見入っていた。やがて、ディーガ「レックス
の全身が解け終る。獣一頭分の質量の光の粒子が渦を巻きながら舞
い上がる。螺旋を描きながら舞う粒子に、シェリ・ルーが手を差し
伸べた。」

邂逅（前書き）

シェリ・ルーが探し求めていた相手・ルシエル。

束の間の邂逅の後、彼は去っていかうとしている。

引き止めるシェリ・ルーに、ルシエルが示した答えとは？

邂逅

頭上に掲げられたシエラの細く白い指先に、光の粒子が集う。粒子は凝縮され、一枚の羽根を形作る。シエラの手ひらの上に、ふわりと落ちてきた羽根は、目の醒めるような緋色。

「これでいいだろう」

一同から、ため息が漏れた。

「一件落着つて事か？」

虎太郎がシエリ・ルーに尋ねた。

「ああ、あとはこれを、アフィエルに渡せば終わりかな」

手の中の羽根に視線を落として、シエラが答える。

「んじゃ、もう結界は解いても大丈夫だな」

ガルが、路地の入り口へ向かって行つた。周辺で待機している匠達に、状況を伝えに行つたのだらう。

「アフィエルが来るのか。なら、その前に退散するでしょうか」

ルシエルの一言に、シエラが反応した。

「どこへ行こうと言うんだ。せつかく巡り会えたのに、また、お前はどこかへ行つてしまうのか」

「シエリ・ルー。お前と会えた事は、俺にとつても嬉しい出来事だ。でもな、俺は、お前の側にいない方がいいんだ」

意味が判らず、何もいえないシエリ・ルーを残し、自分の手を見つめている奈緒に近付いていった。

「人間とは、不思議な生き物だな。美しさを感じる純粋な心と、他者を虐げる残酷な心を併せ持つ。一つの身体に、相反する二つの心を住まわせる生き物は、そうは多くないだろう。お前、レックスの姿を見て、どう思った？」

ルシエルに問いかけられた奈緒は、自分の手に視線を落としたまま、小さな声で答えた。

「すごく、キレイだった。あんなにキレイな生き物、見たことない」

「温かかったか？」

言葉なくうなづく。

「それが、生きているという事だ。『命』というものは、間違えたからといって、デリートできるデータとは違うんだ。死んでしまったからと言って、ディスプレイの電源を切るように、何もかもが消えてなくなるわけじゃない。麻生真由美のことは、確かにお前に責任はないだろう。が、自分の目の前から、一人の人間の命が消えてしまった事実は、しっかりと受け止めるべきなのではないか？」

……いや、データとかディスプレイって、お前……。デリートと
かって、どこで学習したんだよ、ルシエル。

しかし、下手な喩えよりも奈緒には判り易かったようだ。

「麻生、死んじゃった。もう、謝っても、届かないんだ。」

奈緒の心にも、ようやく変化があったようだ。ルシエルは、奈緒の手のひらにオレンジ色の首輪を乗せた。

「届くよ。美由紀の声がお前に届いたように、その声は美由紀に届くよ。」

路地のそちこちに灯っていた、青白い炎が消えた。周辺で待機していた匠達が、結界を解いたのだろう。

「さあ、お嬢ちゃん。これから、どうするんだい？ 帰るってつたって、その格好じゃ無理だろう。」

虎太郎の一言に、そこにいた全員の視線が奈緒に集中した。腕や足には、あちこちに擦り傷や切り傷があるし、服も汚れ、ところどころほつれている。確かにこのままでは、帰れないだろう。

「コタ。お前の上着、貸してやれよ。真砂んトコまで行けば、何とかなるだろう。」

間壁の提案に、脱ぎ捨ててあった上着を拾い上げながら、虎太郎が不毛な反論を繰り返す。

「だから、コタって呼ぶなっつってんだろ？ 俺の名前は、虎太郎だ。」

その時、頭上でかすかな羽音が聞こえた。空を仰ぎ見た一同の目

の前に、純白の翼をはためかせて降り立つ、ハイパー高飛車エンジン
エルのアフィエル氏。

「あーあ。退散する前に、来ちまったよ」

ルシエルの呟きは、周囲に黙殺された。

「終わったのか？」

前置きなしにシエリ・ルーに詰め寄ったアフィエルは、少し離れた
場所に立っている、俺〃ルシエルには気付いていない。

「ああ、終わったよ。レックスの魂は、ここだ」

手の中の羽根をアフィエルに示した。

「レックス？ 何だ、それは？」

形のいい眉をひそめて、アフィエルが聞き返してくる。

「お前さんが“妖獣”と呼んだ、ディーガに付けられていた名前さ」
戻ってきたガルが、アフィエルの足下をすり抜けながら答えた。

「ふん。奴の名前が何であろうと、我等には関係のない話だ。それ
にしても、この品のない色は、どうにかならんのか。それとも、主
人の品性を写し取るのかも知れんなあ」

うつわ、ム力つく。何、コイツ。背中の中、全部むしってやる
うかな。マジで。

（まあ、落ち着け）

俺の思考を読み取って、脳内にルシエルの言葉が流れる。

「その色が気に入らんのなら、いっそ黒にしてやろうか。しかし、
己等の失敗で逃してしまった魂を、わざわざたら得てもらったのに
礼もなしか。天上界の品性も大した事は、なさそうだ」

「何だと？ 誰だ」

眉間に深い（不快？）シワを刻んだアフィエルが、声のした方を
振り返る。

「誰だはないだろう。しばらく見ないうちに、俺の事を忘れたらし
いな？」

そう言ったルシエルの姿を認めて、アフィエルの顔が強張る。

「え、あ、ルシ エル？ どうして、あなたがここにいるんだ？」

あなたああああ？

シエラには「お前」とか「貴様」とか言うクセに、ルシエルと随分態度違うじゃねえか。昔、アフィエルと何かあったんか？

（俺も、やんちゃだったって事さ。しかしアフィエルの奴も、見事なまでに変わらんなあ。もつとも、あの性格は変わりようがないのかもな）

げ。昔から、あんなんかよ……。ルシエルの知ってる頃って、一体、何百年前じゃ？

「俺がここにいると、何か不都合でもあるのか？」

「そんな事は……。このような汚らしい場所に、まさか、あなたがいるなんて思いもしなかったので……」

明らかに、わざと意地の悪い質問をしている。あつはは！

ルシエル、やるじゃねえ。けど、アフィエルの野郎、言うに事欠いて「汚らしい場所」だとお？　そもそも誰のせいでこんなことになったと思ってやがんだ。

「それでは、私はディーガの魂を受取り、第三天へ連れ戻してきましよう。二度と再び、抜け出す事のないように、また、抜け出す気など起こさぬように、厳重に縛り付けておかねばなりますまい」

ルシエルって、一体、アフィエルに何したんだよ。物凄い、

嫌な汗かいてるだろ、アフィエルの奴。

「こいつは、二度と逃げ出したりはしないさ。裁きが下り、いつか許されるその日まで。己の犯してしまった罪を、しっかりと認識しているからな」

シエリ・ルーから羽根を受け取ったアフィエルは、自分を悩ませていた仕事が終わったという安心感からか、少々油断していたらしい。

「まったく。人間など、いくら死んだところで痛くも痒くもない。しかし天界から魂が逃げ出すなど、あつてはならない事だ。存在する意味もない、無用の輩が多過ぎるのだ。父なる神も、このような連中に情けなどおかけにならず、いつその事、全部滅ぼしておしま

いになればよろしいものを」

そう言つて、その場にいた者達を見回した。牙をむき出しにして、足を踏み出す間壁と虎太郎をシェリ・ルーが制する。うんうん。こんな馬鹿たれ天使の言ふことなんぞ、聞き流すにこしたこたはない。ほつとけ、ほつとけ。

「人間共とて同じ事。まるで腐肉に湧く虫のようにワラワラと、際限もなく増えよつて。ノアの洪水といいソドムの炎といい、人間を滅ぼす機会は何度もあつたというのに、父なる神も甘い事よ」

アフィエルのその言葉に、思わぬところから反撃の手があがつた。「ふざけんなよ、テメー！ あたし達人間が、どれだけ大変な思いの中、毎日生きてると思つてやがる。そんなに目障りなら、どうして神は、あたし達人間を造つたんだよ。自分の勝手な都合で生み出しておいて、邪魔になつたら滅ぼすのか！？」

声の主は、オレンジ色の首輪を握り締めた奈緒だつた。

「何だ、お前は？ 子を孕む胎を持った、卑しむべき女め。お前如きが、神の御使いである私に口をきくなど不敬の極み。言葉を慎め、愚か者め！」

アフィエルが怒りの形相で、奈緒に向かっていつもの自論を披露した。ただ、いつもと違つていたのは、相手がアフィエルの高飛車発言にも、まったく怯む気配がなかったという点か。

「うるせー。卑しいのはオメーだ、馬鹿野郎！ 背中に白い羽根が生えてんのが、そんなに偉いのかよ。あんたなんかよりなあ、レックスの方が、よっぽどキレイだったよ。あいつに馬鹿にされるのは、仕方がないと思うさ。そう言われるだけの事を、あたしはしてきたんだろうし。でもね、あんたに下に見られる理由なんか、これっぽちもないよ！」

奈緒はアフィエルを睨み付け、そう言い放つた。

よっしゃ！ よう言つた！ その場にいた全員が、心の中で快哉を叫んだ。一方、これ程に罵倒されたのは初めてなのだろう。アフィエルの髪が逆立った。文字通り、怒髪天を衝く、である。

「黙って聞いておれば、いい気になりおって！ 貴様、神の怒りに触れるがいい！！」

いや……黙ってねえし、神じゃなくてお前の怒りだし……。そう突っ込みたかったが、さすがにそんな暇はなかった。

アフィエルの背中に広げられた翼が、雷電をまとってまばゆく輝く。

「消し飛べ、愚か者！！」

高飛車天使の翼から放たれた雷撃が、周辺の空気を白く染め上げた。全員の視界が焼ききれる寸前。

「愚か者は、己じゃ、この馬鹿め！！ 気位ばかり高くて、忍耐の足りぬ奴よ。己の感情に鼻面引きずられおって、この未熟者めが」

アフィエルの放った全ての雷撃を、立ちはだかったルシエルが片手で受け止めている。

「ル、ルシエル……」

頭に血が昇っていたアフィエルの顔から、今度は音を立てて血の気が引いていく。バチバチと火花をまわりつかせながら、ルフィエルはその手を握りこんだ。

「どうやら、その魂を任せる訳にはいかんようだな。思いたくはないが、天上界は、お前のような天使で溢れているのか。いや、今も変わらず……というところか」

ルシエルの手の中で、雷撃は握りつぶされてしまった。シエリ・ルーと良く似た仕種で髪をかき上げ、ルシエルは指を鳴らした。途端に、アフィエルの手にあった紅の羽根が、シエラの手の中に移動した。

「この魂は、こちらで預らせてもらおう。時が来れば、そして必要があれば、第三天サグンにも届けよう。どうせ、今のお前に渡しても、口くなく扱いをしないようだしな」

言葉が出てこないらしいアフィエルは、金魚みたいに口をパクパクさせている。

「判ったら、さっさと戻ってサンダルフォンに伝えよ！ 文句があ

「つたら、次元・時空の狭間を辿って会いに来いとな」

先程の雷撃を握り潰した手を開くと、中には小さな結晶がある。それをアフィエルに向かつて弾き飛ばした。結晶がアフィエルの足下に着弾すると、雷撃が湧き起こる。

「うわっ！」

両腕で顔面をガードしているアフィエルに、ルシエルは皮肉たっぷりに言った。

「お前の忘れ物だ。ちゃんと持って行け」

顔を両腕で隠したまま、アフィエルは翼を広げた。真つ白だったはずの奴の翼は。今は、ルシエルに返された己の雷撃のせいで、少々焦げている。へっ、ざまあみる。

「その言葉、確かにサンダルフォン様に伝えるぞ！！」

いや、それ、捨て台詞のつもりなのか？　かなり、情けないぞ。まあ、俺の知った事じゃないけどな。あれ、隠れた顔は絶対、泣いてんぞ、アイツ。

決して優雅とは言いがたい姿で、どこぞかへ飛び去っていくアフィエルを、その場の全員がおそらく、心の中で舌を出して見送った事だろう。

「さて、俺もそろそろ行くか。これ以上は、依り代の身体に負担をかける」

ルシエルの言葉に、シェリ・ルーが口を開きかける。

「何も言うな。俺はなるべくなら、お前の側にいない方がいいんだ。俺もディーガと同じく、償いを続ける身だ。いつの日にか、お前の許に戻る事もあるかも知れん。だが、それは今ではない。お前が俺を求めて、地上を彷徨っていたことは知っている。その気持ちに応えたいと思う。けれど、それは出来ないんだ。理由を俺の口から伝える事も出来ない。まあ、今度機会があつたら、ウリエルにでも聞いてみてくれ」

「そんな言い分で、納得できると思っているのか？」

「思っちゃいないさ。でも今は、無理矢理にでも納得しろ。これ以

上、何も言えん。俺も、お前に語れる日が来るのを、願っているよ」
そう言つと、俺の中からルシエルの魂が（魂……なのか？）抜け
て行くのを感じる。どういう原理か判らんが、俺の、『萌木伊津留』
の姿に戻つたらしい事は理解できる。

「悪い。行つちまったよ」

申し訳なさそうな口調になつてしまふ俺に、シェリ・ルーが無言
でうなずいた。そして、俺の肩に顔を埋める。

「お前のせいじゃないさ。それは、シェリ・ルーも判っている事だ」
代わりに声を掛けてくれたのは、虎太郎だった。

「いつまでも、ここでこうしている訳にもいかんだろう。そろそろ、
場所を移そう。匠達には、先に真砂んトコに行つとくように伝えと
いたぞ」

ガルの言葉で、全員が路地の入り口の方を向いた時。

「なあ、おい。兄ちゃん達、面白い格好してつけど、仮装行列か何
かか？」

そこにいたのは、トロンとした目付きの、出来上がったオツチャ
ンだった。シェリ・ルー以下、全員が凍り付いている中で、やけに
冷静な奈緒が答えた。

「そうだよ。クラブのイベントなの。ね？」

なぜか、俺に振ってくる。判つたよ。話に乗れば、いいんだろう？

「ああ。クラブ『仮面舞踏会』の、恒例イベントなのさ」

エピソード（前書き）

これまで見えなかったモノが見えるようになり、考えもしなかった出来事に遭遇して、色んな「不思議」を見た。
でもさ、「日常」があるから「不思議」を感じられるんだよな。

エピローグ

「ああー、今日もいい天気だあ」

俺は窓を一杯に開けると、思いっきり伸びをする。足下に置いてあったカゴから、洗濯したタオルを引っ張り出して広げる。

「平凡な日常って、素晴らしいねえ」

鼻歌混じりに、洗濯物を干していく。何も心配する必要のない日常が、俺には、とても新鮮に感じられた。

あの後、奈緒を連れて『仮面舞踏会』に戻った俺達一行は、待機組のメンバーから盛大な労いのもてなしを受けた。ディーガ：「いや、レックスや麻生美由紀の事、亡くなった人々の事を考えると、手放して大騒ぎする気分にはなれなかった。けれども、それぞれの裡に大きな安堵感が漂っていたのは確かだ。

詳細を真砂達に語るのは、間壁と虎太郎だ。お互いに、ああでもない、こうでもないと言い合っている。

俺はと言えば、さすがに連続しての降霊（ルシエルも霊なのか？）の影響か、少々ヘタリ気味でカウンターでコーヒーをすすっていた。あー、この甘さが、疲れた身体に染みる――。

特に何を話すでもなく、俺とシェリ・ルーが並んで座っていると、シャワーを借りてサッパリした奈緒がやって来た。少しためらいながら、俺の隣の席に腰掛ける。そうそう。俺、この娘に聞きたい事があつたんだ。

「ひとつ、聞いてもいいかな？」

真砂からコーヒーを差し出されていた奈緒は、化粧を落とした顔を俺に向けた。その表情は、歳相応に幼い。

「どうしてあの時、あの馬鹿天使に噛み付いたんだい？」

「あれ、見てたんだ」

「ルシエルと一緒にいたからね」

奈緒はカップの底から浮き上がってくる、注がれたミルクの模様を見つめ、俺の問いに答えた。

「あの天使。アイツの事見てたらさ、何かこう、いやあな気分になったんだ。まるで、自分を見てみたいでさ。きつとあたしもアイツみたいな顔して、アイツみたいな目をして、アイツみたいな言葉を使って。そう思ったら、無性に腹が立った。あたしと同じ、腐った魂を持つてるお前に、エラそうな事言う資格があるのかってね」

「なる程……」

煙草に火を点けた俺は、カップを両手で包み込んでいる奈緒の横顔を見た。

「あたしン家ってさ、すごい厳しかったんだ。子供の頃から塾とかばっかしで、友達と遊んだ事なんてなかった。第一、友達なんていなかったし、作る方法も知らなかったしね」

コーヒーを口に含み、喉を湿す。カップの中に言葉を落とし込むように、ポツリポツリと語り始めた。自分の子供の頃の話。厳しかった両親の話。まるで自分の中に蓄積されていた、何か苦しいモノを、全部吐き出そうとするかのように。

「きっかけは、何だったのかなあ。麻生が、レックスの写真を見せていたんだ。あれだったのかも」

麻生美由紀が、楽しそうに写真を見せて笑っていた。その姿を見た時、奈緒は彼女に嫉妬を感じたのだと言う。

「思い出したんだ。どうしても飼いたかった子猫を、取り上げられた時の事」

自分にはいなかった、友人に囲まれた美由紀。自分には許されなかったモノを、許されている美由紀。自分よりも恵まれていると思った。そんな美由紀を妬ましく思った。

初めは、八つ当たりのつもりだったと言う。だが皮肉な事に、美由紀をいじめるようになってから、奈緒にも仲間が出来た。

「いじめ仲間」という決して褒められたものではない関係だったが、

奈緒には初めて出来た友人だった。友人達の関心を失うまいと、美由紀に対する奈緒のいじめはエスカレートしていき、最早何が始まりだったのかさえ、忘れてしまう程となったのだ。

「麻生が死んだって聞いた時、本当はすごく怖かった。誰かがあたしを指差して、『お前が麻生を殺したんだ』って言い出すんじゃないかと思った。でも、クラスの誰も、学校ですら何も言わなかった。いじめもなかった事にされちゃった。だから、あたし達も、何もなかったことにするしかなかったんだ」

麻生美由紀が死んだのは、自分のせいじゃない。そう考える事にした。そう思い込む事にした。そして 罪悪感を忘れた。

「何やってるんだろっ、あたし」

そう呟いて、奈緒は自嘲に似た笑いを浮かべた。

しばらくの間、何も語らず、ただコーヒーを味わう。静かに流れた時間の後、奈緒は帰ると言って立ち上がった。

「そんじゃ、俺、送って行くわ。時間も遅いしな」

座席から立ち上がったのは、意外な事に虎太郎だった。大丈夫だと言い張る奈緒を、虎太郎は「女の子なんだから」との理由で言い負かした。荷物を抱えて席を立った奈緒は、少しためらった後、俺とシェラに向かって口を開いた。

「あたしさあ、もうやめる。あの、ウルトラム力つく、馬鹿野郎みたいになるの、ゴメンだし。それで、麻生とレックスの事、忘れないようにする」

ウルトラム力つく馬鹿野郎とは、もしかするとアヤツの事ですか？ なる程、そいつは言い得て妙だ。

「そうか。それを聞いたら、美由紀さんもレックスも喜ぶよ、きっと」

シェリ・ルーは奈緒を見上げると、そう行つて柔らかに微笑んだ。店内のライトに照らされて、神秘的に輝く。

「君の魂を守るのは、君自身だと言う事を、忘れないでいて欲しい。彼女達のために。そして何より、君自身のためにね」

奈緒はうなずくと、店のドアに手をかけた。

「送ってってくれるんでしょ、コタ？」

呼びかけられた虎太郎は、目を丸くした。

「コタ　　って、お前。ま、いいか。俺の名前は虎太郎だけど……

あんたなら構わねえよ、お嬢ちゃん」

「あたしは、奈緒よ。小野田奈緒。お嬢ちゃんって呼ぶの、やめてね」

カロン、カロロン

カウベルの音に送られて二人が出て行く。その後姿を、店にいる全員が見送った。一人の例外もなく、ポカンと口を開けていた。

「あの虎太郎が……」

「コタって呼ばせた……」

「あり得ねえ」

俺とシェリ・ルーと真砂は、顔を見合わせると、大声で笑い出した。何だか、すごく久し振りに声を上げて笑ったような気がする。

俺達三人につられて、店中に笑い声が弾けた。

嘆き悲しんでも、死んだ者は戻って来ない。俺達は生きている。

生きている以上、これから先も生きて行かなくてはならない。それなら、悲壮な顔をしているよりも、笑っていた方がいい。

洗濯物を干し終わった俺は、掃除機を引っ張り出してくる。なんでもない、日常の出来事。しかしそれも、毎日を「生きて」いればこそ。

「天気がいいと、気持ちがいいやねえ」

世界が変わった訳じゃない。世界を見る「俺」が変わったんだ。世界は相変わらず、そこにある。変わったモノ、変わらないモノを内包して、世界は存在している。人も、妖獣も、妖しも、堕天使も、すべてを含めて存在する世界。それは何て偉大な事なんだろう。

どうしようか迷ったんだけど、俺はルシエルの事をシェラに聞いてみたんだ。

長年かけて捜し求めてきた、半身。ようやく巡り合えたルシエルとの時間は、あまりにも短いものだった。シェリ・ルーにとっては、到底満足のいくものではなかっただろう。俺の問い掛けに、シエラは何とも言えない表情をした。

「確かにね。納得いかない事だらけだし、言ってやりたい事も山ほどある。ルシエルの奴、自分だけ一方的にしゃべって行っちゃったからな」

カップから立ち昇る湯気を、ため息で吹き飛ばした。

「俺はルシエルを見つけ出して、元の自分の戻る事しか考えてなかったけど……。よく考えてみると、ルシエルはルシエルで、自分の生きていく道を見つけたのかも知れないな」

そう言っ、シエラは淡く微笑んだ。俺がこれまで見た中で、一番印象的な微笑みだ。最近見慣れちゃったせいで、あんまり気にならなくなっ、たけど、こいつ、綺麗な顔してたんだよなあ。

「なぜウリエルが俺とルシエルを引き裂いたのか。それは今になっても判らない。でも、ルシエルには判っていたのかもしれない」

視線を上げると、店内を見回す。

「いつかそれが、俺にも判るといいが。ルシエルが俺の側に戻らなかったのは、俺なりの生き方を見つけてるっていう事なのかも知れない。そんな気がするよ」

「それで、これからどうするんだ？」

「そうだな。考えた事もなかったけど……。ゆっくり考えるさ。時間、たっぷりあるんだし」

「それも、そうだな」

俺とシエラは顔を見合すと、コーヒーカップで乾杯をしたんだ。

掃除機のスイッチを切ると、コードを巻き取り。クローゼットの中にしまい込む。

「これで、よし　　と」

台所でコーヒーを淹れると、部屋に戻って一息つく。テーブルに

置かれた郵便物に目をやり、その中の一通を手にとった。差出人は、倉田一人と橋本美緒の連名だ。

『あの時は、お世話になりました』

そんな書き出しで始まった手紙は、二人の近況を伝えてくれる。

「そっか、結婚式、早めるんだ」

すでに退院している一人は、今回の事もあって、予定を早める決意を固めたようだ。ぜひ、シェリ・ルーと二人で出席してくれ。そう締めくくられていた。

「シェラね……。行くのかな、あいつ？」

シェラ　シェリ・ルー。そう。今、俺の部屋の中に、奴の姿はない。どうやら、ようやくの事で自分がこの先どうするのか、決心がついたらしい。うむ。良い事だ。

手紙をたたみ、予定を確認しようとカレンダーを見上げた俺の耳に、チャイムの音が飛び込んできた。はい、はい。今、開けますよ。鍵を外し、ドアを開ける。目の前に大きな紙袋を抱えた、長身の人物が立っている。陽に透けた髪は、明るいブラウン。鳶色の瞳は、いたずらっぽく光っている。そしてその、ととのった中世的な美貌。聞いていて、耳に心地良い声が言葉を紡ぐ。

「ただいま、伊津留」

俺も笑顔で答える。

「ああ、お帰り。シェラ」

そう。地上に降り立った緋色の大天使は、今も俺の部屋に戻ってくる。自分に託された様々な想いを、四葉の紅い翼に宿し、極上の笑顔と、両手一杯の紙袋を持って。

「今日は特売日だったから、思いつ切り、買物してきちゃったよ」

「ほー。そいつは、ありがたい。ってか、早くメシにしてくれよ。

俺、もー。腹減っちゃって……」

「はいはい」

そして俺は、ドアを閉める。

この先も、この相棒という限り、ドアを開けるたんびに感じるの

だろう。

『世界は、不思議であふれている』と

。

）F i n ）

あとがき

この作品も、ようやく完結いたしました。

思えば、原稿用紙の一行目に「天使の仮面舞踏会」と題を書き込んでから、ゆうに十年間の月日が流れております。

本当に、この作品を完結する事ができるんだろうか……と怯えていた物語ですが、本日ここに、無事「Fin」を打つ事が出来ました。

これまで「天使の」を読んで下さった皆様。皆様のお陰で、物語を閉じる事ができました。心より感謝申し上げます。

またいつか、このキャラクター達で続編を書いていけたらいいなあ……などと考えております。

お付き合いくださいまして、まことにありがとうございます。

橘 伊津姫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035r/>

天使の仮面舞踏会

2011年5月24日14時25分発行